

である。○阿羅漢辟支佛の智慧の境界 小乗を學んで覺を得たのみで、未だ大乘を學ばぬものは前に説かれた二種の空智の中に於て、小乘的空智のみを得たものである。されば佛の境界のわからう筈はないのである。○七日の嬰兒 生れて僅か七日しか經たぬ嬰兒でも明るいといふことは知らぬ。いとこの區別はつくけれども、その明るいのが太陽から發した光りであるといふことは知らぬ。凡夫でも又は小乗のみを學んだ者でも、佛の貴いことは略ぼ知つて居るけれども、佛の境界を知るといふまでには至らぬのである。

滅とは梵語の涅槃の漢譯であるが、凡てを滅して無に歸するの意でないことは前にいふ通りである。僧肇は涅槃といふことに就て研究の深い人であるが、其の説には

無爲といひ亦滅度と名く。無爲とは虛無寂莫に取る。妙に有爲を滅絶するなり。

滅度とは其の大患永く滅し、四流を超度するをいふなり。

とある。虛無寂莫といふは一切の變化を超越し、一切の差別の外に立つことで、凡てが無に歸することではない。それは次に有爲を滅絶するとあるによつて明かである。有爲とは前にもいつた通り、世間的の差別のことである。大患といふのは即ち煩惱のことである。四流といふのは煩惱によつて生ずる所の種々の罪を四種に分つたものである。四流を超度するとは凡夫の境

界を離れ盡したことである。又『大乘義章』には滅といふ意義を種々の點から説明して、

外國にいふ涅槃を此に翻して滅と爲す。煩惱を滅するが故に、生死を滅するが

故に之を名けて滅と爲す。衆相を離るゝが故に、大寂靜の故に之を名けて滅と

爲す。

とある。衆相といふのは種々の差別相のことである。大寂靜といふのは永遠不變なる理と一致したる境界である。此の説明に依つても滅といふことが即ち佛の得られたる覺に外ならぬことは明かである。

涅槃經は其の名に示すが如く涅槃に就て説かるゝことを主としたる經であるから、此經の中に説かれた所は涅槃の問題を決定するのに最も有力であるべきである。然るに涅槃經の中に於ては、

諸の煩惱を滅せるを涅槃を得と名く。諸有を離るゝ者を乃ち涅槃と爲す

と斷定してある。諸有とは種々の差別のことである。吾等は世に立ち人に對するに當つて親疎遠近の別を立て、利害得失の別を立て、之によつて種々の偏執を生じ種々の紛争を生ずるのであるが、其の根本たる差別相を離るゝことを名けて涅槃と爲すといふのである。また圓覺經の

中にも、

因縁俱に滅せるを以ての故に心相皆盡きたるを、涅槃を得と名く。

とある。因縁俱に滅するといふのは一切の執著を離れて居ることである。心相とは心中に於ける差別相である。心中の差別相の皆盡きたるは即ち佛の御心と一致したるところである。又此の涅槃といふ語を譯して圓寂ともいふのであるが、其の意に於ては固より同一である。之に就て華嚴大疏鈔には、

涅槃は正しき名を滅と爲す。其の義類を取れば乃ち多方あり。總じて義を以て翻して、稱して圓寂と爲す。義は法界に充ち徳は塵沙を備ふるを以て圓といひ、體は眞性を寫し妙に相累を絶するによつて寂と爲す。

といつてある。圓とは完全の意であり、寂とは不變の義である。即ち絶對の覺を得て、一切の差別と一切の變化を超越したる境界である。勝鬘夫人が苦諦を稱して第一不思議なりといつたのも謂あることである。

さて四聖諦中の三諦は有爲なり無常なりといひ、唯だ滅諦一つのみが無爲なり常住なりといつたのは、決して他の三諦に價値がないといふ意ではない。三諦と一諦との間に本末輕重の別

のあることを明かにされたのである。譬へば一本の樹には幹もあり枝もあり葉もある。其等が皆具はらなければ一本の樹ではないから何れも皆それの價値をもつて居るものといはなければならぬ。併しながら幹から枝が出るのに定まつて居る、枝から幹が出るといふことは決してない。枝を一本や二本折つても其の樹は枯れぬけれども、幹を折れば枝も葉も皆枯れてしまふ。其の間に本末輕重のあることは争はれぬ。今此の四聖諦の關係も亦其の通りである。滅諦なるものは其の幹であつて、他の三諦は其の枝葉である。若し佛が滅諦を説かれなければ、他の三諦を説かれるのは皆無意義のことになつてしまふのである。此の三諦と滅諦との關係に就て、今少しく立入つて委しく之を考へて見やう。

先づ第一は苦諦であるが、苦諦とは人生に満足のないことを徹底的に説かれたものである。それは佛が「人々には満足なる生活を開き得べき本性の具はつて居ること」を明かにして居られたからである。若しさうで無くて、唯だ人生に満足のないことのみを説かれるのならば、佛の説法は唯だ之を聽聞する人々に失望を與へるより外に何の効果もないものであらう。然るに佛は吾等衆生が悉く佛性を具へて居ることを認められて居る。而も吾等の多くが之を自覺せず唯だ外界に向つてのみ満足を求めて居るために、終に満足を得られずに生涯を送り盡すことを

深く哀愍せられて、吾等の反省を促し自覺を促さんがために苦諦を説かれたのである。第二の集諦に就ても同様である。吾等の心には限りなき煩惱が堆積して居るけれども、如何に多くの煩惱でも吾等の具有する佛性を滅し盡すことは出来ぬ。大集經に

煩惱の諸結も染著すること能はず。猶ほ虚空の玷汚すべからざるが如し。

とあるのも此の事を指していはれたのである。されば佛が集諦を説かれたのも、其等の數限りなき煩惱を掃ひ去るに随つて、貴い佛性が次第に其の光りを發して來ることを明かにせんが爲であつたのである。其の佛性の遺憾なく發揮せられたのが即ち涅槃といふ境界なのであるから若し苦諦と集諦のみを説いて滅諦即ち涅槃に就ての説明がないならば、其の苦諦と集諦とは全く根柢のないものになつてしまふわけである。

又第三の道諦も滅諦があつて初めて意義を有するのである。例へば布施をするとか、佛戒を持つとかいふことは、何れも皆佛性を發揮せんが爲に外ならぬもので、若し其の佛性が開發せられて真に平和安穩なる生活に入り得ることが明かであれば、布施とか持戒とかいふことに力を用ゐる意義はなくなるのである。譬へば高山に登るのには非常に骨が折れるけれども、此の山頂に達すれば眺望が非常に好くて途中の苦みを償うて餘あるほどの愉快が感じられると知

つて居るから、其の苦みを厭はずして登つて行くのである。佛の境界の如何なるものであるかを知らせず、唯だ菩薩行を勵めとのみ教へても、生命に懸けても菩薩行を勵まうといふ念は起らぬであらう。梵天思益所問經に

如來の身は是れ光明の藏なり。佛の説きたまへる法を解して斯の光明を拜し、信心清淨ならば自ら光明身を得ん。

とある。これも佛の境界が明かにわかつて眞の信心が起るといふことを示されたのである。また大乘菩薩正法經には

如來は衆生をして此の明瞭なる菩提の自性を覺らしめんが爲に大悲心を起すとあり、更にまた

菩提には出入なし。我は是故に正覺を成就す。出入なしとは相なきが故に出ず又入らず。平等なるが故に彼此の差別なし。如來は衆生をして此を知らしめんと欲するが故に大悲心を轉ず。

とある。此を知らしむるといふのは佛智を具へ得たる境界のいかに貴きものなるかを知らしめ

んとの意である。以上の諸經の文に依つて見ても、滅諦を説かれたことが道諦の基礎となつて居ることは確かである。是れが即ち根本であつて、他の三諦は之によつて立つものである。なほ此の「一諦章」の本文は續く。

凡夫の識は二見顛倒なり。一切の阿羅漢辟支佛の智は則ち是れ清淨なり。邊見とは凡夫、五受陰に於て我見妄想計著して二見を生ず。是を邊見と名く。所謂常見と斷見となり。諸行は無常なりと見るは是れ斷見にして正見にあらず。涅槃は常なりと見るは是れ常見にして正見にあらず。妄想見の故に是の如きの見を作す。身の諸根に於て分別思惟して、現法の壞するを見、相續あるに於て見ずして斷見を起す、妄想の見なるが故に。心の相續に於て愚闇にして解せず、刹那の間の意識の境界を知らずして常見を起す、妄想の見なるが故に。此の妄想の見は彼の義に於て、若しは過ぎ若しは及ばずして異相の分別を作す。若しは斷若しは常なり。一切の阿羅漢辟支佛の淨智とは、一切智の境界及び如來の法身に於て本見ざる所なり。或は衆生あり佛語を信するが故に、常想、樂想、我相、

淨想を起す。顛倒の見にはあらず、是を正見と名く。何を以ての故に。如來の法身は是れ常波羅蜜、樂波羅蜜、我波羅蜜、淨波羅蜜なり。佛の法身に於て此の見を作す者は是を正見と名く。正見の者は是れ佛の眞子なり。佛口より生じ、正法より生じ、法化より生じて法の餘財を得。

前に佛の覺りたまへる所は凡夫の心識の力をもつて推度することの出來ぬものであるとあつた。此に至つて其の凡夫の心識によつて佛の境界を推度し得ぬといふ理由を説かるゝのである。凡夫は正見を有せずして唯だ邊見のみを有するものである。邊見とは妄想の見である。また顛倒の見である。要するに其の心の力が不完全であるから事物の眞相を捉へることが出來ぬのである。此の邊見を分つて二とする。即ち斷見と常見とである。何れも一方に偏したる見方であるから、之を妄想の見ともいふのである。例へば咲いた花は必ず散るものである。盈ちた月は必ず缺けて行くものである。然るに花の美しく咲き出たのを見た時には、やがて散つて行くといふことは忘れて、いつ迄も斯う美しい眺めが續くものゝ如くに思つて居る。それが一夜の風に散つてしまつたのを見ると、今更の如くに驚く。是れが凡夫の常態である。満月の光りの澄み渡つたのを仰ぎ見た時にも、明日の夜から缺けて行くのだといふことはツイ忘れて居るのが、

凡夫の常である。斯ういふ淺はかな考へ方を常見といふのである。阿育王譬喩經に記する所に依ると、或る時釋尊が一の牧場の側を數人の弟子と共に通過された。此の牧場の持主は最初に一千頭の牛の兒を養つて能く肥え太らせ、日に其の一头づゝを殺して其の肉を賣つて生計を立て、居た。釋尊が其處を通られた時には既に其の五百頭を殺して、残るところは五百頭であつた。然るに此の五百頭の牛は共に遊び戯れて踊つたり跳ねたりして、自分等もやがて殺されるのだといふことに少しも氣がつかぬやうな様であつた。釋尊は其の諸弟子を顧みて、

此牛愚癡にして伴侶盡きんと欲するも方に共に相戯る。人も亦是の如し。一日過ぎ去れば人命轉た滅ず。度世の道を思惟し勤求せざる可からず。

と戒められたといふことである。實際吾等の多くは無常なるものを常住と思ひ、變化して止まぬものを不變のものゝ如くに思つて居る。何れも常見に囚はれたものである。

併しながら流轉變化といふことは天地萬有の存在する一面の現象であつて、決して其の全體ではない。されば無常といふ方にのみ囚はれてしまふのも亦邊見を免れぬのである。例へば朝顔の花は毎朝咲いて日中になれば凋んでしまふ。櫻の花は盛りが短いといつても七日や十日は散らずに居る。然るに或る人の詠んだ歌に、

朝がほは朝な朝なに咲きかへて盛り久しき花にぞありける

といふのである。成る程是れも一種の見方である。櫻は七日か十日の間にスツカリ散つてしまふけれども朝顔は朝毎に新しい花が咲いて、凡そ一ヶ月以上も枯れずに居るのであるから、櫻などよりも遙かに盛りの長いものと思はれるのである。畢竟盛りの長いか短いかいふことは其の見方に依つて變るものである。尙ほ今少し長い間のことを觀察して見ると、櫻の花は僅か七日か十日で散つてしまふけれども、春の來る毎に必ず咲いて、又必ず散るのである。昔から櫻の咲かぬ春もなく、櫻の散らぬ春もない。此の必ず咲き必ず散るといふ事實は數百千年を通じて少しも變りはせぬのである。月も亦其の通りである。満月になつた次の日から少しづゝ缺けて行つて、十五日目には全くの闇となり、其の次の日から新月が見え初めて、十五日目には又元のやうに満月になる。此の盈虚の順序は昔から少しも變らぬ。蘇東坡が「赤壁賦」の中に水と月とを説いて、

逝く者は斯の如くなれども而も未だ嘗て往かず。盈虚する者は彼が如くなれども而も卒に消長莫し。蓋し將た其の變ずる者よりして之を觀れば、天地も曾て以て一瞬なること能はず。其の變ぜざる者よりして之を觀れば、物と我と皆盡

くること無し。

といつたのは確かに眞實のことである。人情風俗は古今によつて變化異同があるけれども、人の人としての本性は少しも變らず、佛の教へは永遠に人を導き世を救ふのである。そこを見ずして、變化流轉の方面のみを見て居るのが即ち斷見である。

勿論教へは不變のものであつても其の教へを其の時代に適應するやうに説くことも必要であるから、變化極まりなき世相を觀察することも決して怠るべきではない。要するに一方に偏るの誤りの元である。變化の中を一貫して不變化のものゝ存することを知らなければならぬ。又不變化なる理が種々に變化して現はれて來るさまをも明かにしなければならぬ。之を併せ見て少しも違はぬものを名けて正見といふのである。正見を有するものにして初めて佛の境界を知ることが出来るのである。それで此の一段は正見を以て佛を知るといふことを以て終つて居るわけである。

○二見顛倒 二見とは斷見と常見であつて、其の委しいことは下に説いてある。顛倒といふのは正しい道を失つて居ることである。顛倒の見をもつて居る者は佛を知ることには出來ぬ。されば法華經壽量品に「顛倒の衆生をして近しと雖も而も見えざらしむ」とある。○是れ清淨なり

凡夫に通有なる煩惱を除き盡したる程度をいふので、佛智が清淨であるといふのは決して同等ではない。其の事は次の「一依章」に至つて明かになつて居るのである。○五受陰 外界からの刺戟を受けて起り來る所の吾等の身心の働きを五つに分け、五陰とも或は五蘊ともいふのである。蘊とは集積して居るといふ意味である。其の所謂五陰は色受想行識である。第一に色といふのは外界の刺戟に應じて起る感覺である。即ち眼によつて物の色と形を分ち、耳によつて物の聲を分ち、鼻によつて匂ひを分ち、舌によつて味を分ち、皮膚によつて寒暖硬軟を分つ等を皆併せて色といふのである。第二に受といふのは此の感覺に伴つて生ずる感情のことである。即ち快と不快とを分ち好惡を分ち美醜を分つ等の作用が盡く皆受と名けらるゝのである。第三に想とは即ち念想である。判斷し比較し推理する等の作用が皆此の想といふ中に含まれて居るのである。第四に行といふのは意志作用で、即ち一切の行爲の本となるものである。或は善を爲し或は罪を作るのは皆此の行といふ作用よりして生じ來るのである。第五に識といふのは以上の四作用を統一するところの作用である。此の統一作用が具はつて居るので吾等は互ひに一個人として認めらるゝわけである。今此處に「五受陰に於て」とあるのは、日々の生活の中に於てといふ意に取れば宜いのである。○我見妄想計著して 我見といふのは萬事を自己の

利害得失の上から判断することである。人は元來相扶け相保つて生きて行くべきものであることを忘れて、専ら自己の利害得失のみを考へるのが凡夫の常である。妄想とは、我見を起した結果として、自己の利害得失の爲に周囲の人々を犠牲にしてもかまはぬやうな考へを起すことである。是れが世の中に多くの紛争の起る本となるのである。計著とは其の利害得失の打算に執著して、何處までも自己に都合の宜いやうにのみ萬事を運びたいと考へることである。此の三語は凡夫の常態を形容して悉せりといふべきである。○邊見と名く 一方に偏して物事の全面を見る事が出来ぬのである。右に在る者は右からのみ物を見る、左に在る者は左からのみ物を見る。斯くして其の間に争ひの起らぬ筈はない。○常見 常住不變の方のみを見る偏見である。世の中に無常の事が多くあるのに、それをも常住であるかの如くに見てしまふのである。○斷見 流轉變化の方のみを見る偏見である。世の中に常住不變な事もあるのを更に認めず、凡てが變化して行くとのみ恣に斷定してしまふのである。○諸行は無常なりと見る 諸行とは有らゆる現象のことである。諸行は無常であるといふことは誤りなき事實であるから、斯う見るのが誤りだとはいはれぬ。併し世の現象界の方ばかりを見て、此より以上のことを全く考へぬのが誤りなのである。例へば雨も長くは續かず晴も長くは續かぬから、天氣の變化といふも

のは無常といふべきである。併し天氣が如何に變つても、此の天地間に於ける水分といふものには何の變化もないのである。人々の生活の様式は其の土地の氣候風土により、又時の古今によつて變るけれども、人の人としての本性には決して變りはない。○正見にあらず 一方に偏せぬ中正の見でなければ、事物の眞實の相を知ることが出来ぬのである。○涅槃は常なりと見る 涅槃とは一切の惑を離れ盡したる境界であるから、是れは常住不變のものに違ひない、併し此の一事のみを見て、其の他の事を考慮せぬのは完全なる考へ方ではない。凡夫の生活の顛倒に充ち、變化して常なきものであることを能く知らなければならぬ。又其の凡夫の心の中にも涅槃を得べき本性(即ち佛性)の具はつて居ることを知らなければならぬのである。○妄想見の故に 何れに偏するものも中正の見ではないから斷見も常見も共に正見と相距ること遠きものである。そこを自ら能く反省して佛の大乘の教へを學び、妄想の見を去ることに努めなければならぬのである。○身の諸根に於て 諸根とは即ち六根である。六根とは眼耳鼻舌身意である。眼に色と形を見、耳に聲を聞き、鼻に香を嗅ぎ、舌に味を分ち、身に寒溫柔硬等を區別し意に物の存在を認めるのである。○分別思惟し 現に眼耳鼻等によつて經驗して居ることに就て分別し、又過去のことをも思ひ出し、今より後に生じ來るべきことに就ても考へるのであるが、

偏見を去らぬ間は、其等が皆正見を作る用には立たぬのである。○現法の壞するを見 法とは一切の事物のことをいふのである。今吾が眼前の事物が變化するのを見て、常住のものは無いと思ひ定めるのは斷見である。花の落ち葉の飛ぶのを見て無常を觀するといふが如きは其の一例である。○相續あるに於て 其の變化の中に不變のものが存在して、後まで續くといふことを知らなければならぬ。例へば木の葉が秋になつて落ちて、來年の春に至つて又葉を生ずべき本性は其の木の中に潜んで居る。寄せた波が引いて行つても、或る時間が経てば又寄せて來べき本性が其の水の中に存して居るのである。凡ての事が皆此の通りである。○心の相續に於て愚闇にして解せず 吾等の心の中に起つて來る種々の性質の中に、永續性のものもあり、又一時的に消えて去るべきものもある。之を能く分別しなければならぬ。其の分別の足らぬものは、一時的の事に執著して苦を増し惑を増すのである。○刹那の間の意識の境界 外界の刺戟に應じて起る感覺や感情の如きものは皆刹那毎に變るのである。例へば眞晝の日光に身を曝せば非常に暖いけれども、日が傾いて行けば寒くなる。海から吹いて來る風に向つて立てば涼しいけれども、風が止めば忽ち暑くなる。併し佛の大乘の教へを學んで覺り得たことの如きは、其等の一時的の感覺などは異つて、永く變らずに後に傳はるのである。○彼の義に於て「一

切の事物の意義を辨ふる上に於て」といふ意である。一時的の事もあり永久性のある事もある。軽く視て過ぐべき物もあり、重く考へなければならぬ物もある。その辨別を誤つてはならぬ。○若しは過ぎ若しは及ばず 或は深く意に止めないでも宜いことに對する注意の過ぐることもある。或は深く注意すべきことをウツカリ見て、意の用ゐ方の足らぬこともある。是れ皆正しい智慧が缺けて居るためなのである。○異相の分別 自分の勝手に差別を立て、居るから、或は斷見に陥り或は常見に陥るのである。○無常に常想あり 此より以下に於て凡夫の四倒を説明するのである。先づ無常なるものを常住と思ふのが一つの顛倒である。例へば世間に於ける地位とか勢力とか、名聲とかいふものが久しく續いた例はない。又勝敗とか得失利害とかいふものも絶えず變化するのである。それを常住のものゝ如くに思ふ所から、未だ得ざるものは得んとして争ひ、既に得たるものは失ふまいとて執著するのである。○苦に樂想あり 苦といふのは不満足なことである。他の人から見ても羨しく思はるゝ事でも、自ら之に當つて見ると何か不満足な所がある。心に煩惱がなくなれば、如何なる地位に在つても、如何なる職業に従事しても、其の心は常に平和であり安穩であるが、煩惱に充ちた心を以て世に立てば、如何なる地位にも、如何なる職業にも満足といふものはない。此の事を考へずに、満足を他に

向つて求めやうとするのが凡夫に共通なる顛倒の想である。○無我に我相あり 各自に自我といふものが確として存在して居るやうに思ふけれども、心に煩惱があれば外界から刺戟を受ける度に其の心は動搖して、更に定まる所はない。随つて世の中に立つに就て定まつたる理想もなく、其の生涯を一貫したる主義といふものもなく、其日其日をウカ／＼と送つて居るだけである。此の如き状態でありながら自ら反省もせず、自我といふものが確立して居るやうに思つて居るのは、凡夫に共通なる顛倒の一つである。○不淨に淨想あり 凡夫の心は種々の煩惱のために汚されて居る。随つて凡夫の爲す事は一として累を他に及ぼさぬものはないのである。それを一切の業が不淨であるといふのである。而も其の不淨であることに氣附かず、之を清淨なる事の如くに思つて、之を改めやうともせぬのは一つの顛倒である。○阿羅漢辟支佛の淨智何れも小乗の教へを學んで世間的の事に對する執著を去り得たものであるから、其の心は清淨であつて、地位や勢力を争つて鬭ぎあふといふやうなことはなく、其等の事の羨むに足らぬことを能く見究めて、自ら質素清淨の生活に安んじて居られるのである。○一切智の境界及び如來の法身 佛は大慈悲の心を以つて一切の人に對せらるゝのである。これは阿羅漢辟支佛等の到底窺ひ知ること得ざる境界なのである。眞の清淨身とは即ち佛身のことである。其處に到着

するためには是非とも大乘を學び菩薩行を勵まなければならぬのである。○佛語を信するが故に 佛は自ら常に平和安穩にして、何の求むる所もなく、唯だ一切衆生を救護することを以て志とせらるゝのである。佛は自ら此の如き境界に居らるゝことを語りたまふと共に、吾等衆生にも佛と同じ境界に到達し得べき本性の具はつて居ることを教へられ、此の貴い本性を充分に開發するためには必ず菩薩行を勵まなければならぬと教へられた。大乘の教とは即ち菩薩行を勵んで佛の境界に到達すべき道を示されたものである。此の佛語を信するものは、必ず大乘を學び菩薩行を勵まうといふ志を立つる筈である。○常想 此より以下に佛の四徳が擧げられてある。即ち一に常德、二に樂徳、三に我徳、四に淨徳である。此の四徳を具へられたる佛の實在せらるゝことを信じ、自分も大に努めて此の四徳を具ふる身とならうと決心すれば、即ち四想が起るのである。其の一は常想である。常想とは凡夫が無常なものを常住と思ふのは異り常住不變の佛身といふものが確かに存在するといふことを信じ、自己も其處に到達するまで必ず努力を続けやうと決心することである。○樂想 是れも苦を樂と思つた凡夫の顛倒とは異つて、眞に一切の苦と一切の惑とを離れ盡したる安樂平和の境界のあることを確信し、さういふ境界に到達するために菩薩行を勵まうといふ決心をすることである。○我想 佛となつて初め

て眞に自我といふものが具はるのである。佛にならぬうちは其の心に煩惱が除き盡されぬのであるから、外からの刺戟に應じて其の心が多少なりとも動搖することを免れぬのである。それでは眞の自我が確立したとはいはれぬ。併し吾等も佛を理想として修行を積み、終には自我を確立し得るやうにならうといふ志が變らなければ、少しづつ心の動搖が少なくなつて、終には眞の自我といふものが出来るのであるから、其の決心が大切である。○淨想 淨とは一切の煩惱を除き盡した状態をいふのであるが、眞に清淨になり切つた者は佛のみである。其の佛の清淨なる境界に到達することを理想として菩薩行を勵まうと決心するのが、即ち淨想をもつといふことである。○顛倒の見にはあらず 凡夫は前にもいつた通り、常樂我淨の四種の顛倒の見を有するのであるが、佛が常樂我淨の四徳を具へらるゝことを信ずるのは正しい見方である。随つて此の佛の境界に到達することを理想として修業を勵むのも正しいことである。凡夫の顛倒したる見方とは全くちがふものである。○正見と名く 佛の具へらるゝ四徳を正しく知つたのは、即ち佛を正しく解し得たのである。此の正見よりして菩薩行を勵まうといふ大なる勇氣が生み出されて來るのである。○常波羅蜜 波羅蜜といふのは梵語であるが、譯して到彼岸といふのである。彼岸とは即ち悟つた境界のことである。到彼岸とは自ら悟ると共に、他の人をも

教へ導いて同じ悟つた境界に到達せしむべき力を具へたことである。其の悟るに就ては特に重要な四點に着眼するのである。其の四點とは常樂我淨であるが、先づ第一は常といふことである。常とは常住不變の義である。吾等の眼前の天地は絶えず變化して居るけれども、此の中を一貫して常住不變の理の存することを捉へなければならぬ。これを正しく捉へ得たものが即ち佛である。○樂波羅蜜 樂とは安樂であり自得である。世間普通の樂なるものは必ず苦の之に伴ふことを免れぬ。佛のみは一切の煩惱を離れ盡して居られるから、眞の樂を得て居られる。又一切の人を教へ導いて眞に安樂なる境界に入らしむる力をも具へて居らるゝのである。○我波羅蜜 其の心が絶對の理と一致した時に初めて眞の自我が確立するのである。迷つて居る間は、いつも其の心が動搖し變轉することを免れぬから、眞の自我といふものは立たぬ。佛は眞の自我を具へられ、又一切の人を教へて共に眞の自我を確立せしむる力をもつて居らるゝのである。○淨波羅蜜 淨とは一切煩惱の汚れを離れ盡したることである。佛の心はいつも清淨であるから、自ら一切の人を感化して煩惱の汚れを離れしむべき力を具へて居らるゝのである。○是を正見と名く 佛を正しく知るものは即ち一切の人間の事を正しく知るものである。人々は皆佛性を具へて居て、共に修行一つでは佛の境界に到達することの出来るのである。唯だ

多くの人は此の自覺が足らぬために、煩惱に役せられて其の生涯を無意義のものにしてしまふのである。されば佛を知ることが人生を眞に意義あらしむるものと考へなければならぬ。○佛の眞子 佛は一切衆生を悉く吾が子であると思はるゝのであるが、吾等が煩惱に昏んだ心をもつて居るために、佛を親と頼む念が起きぬのである。其の念が起きさへすれば、固より吾等は佛の眞子として認めらるべきである。○佛口より生じ 佛の口より出るものは貴き教へである。其の教へを聽くことに依つて吾等は一切の煩惱を除いて、全く生れ更つたものになれるのである。佛口より生ずるといふのは、佛の教へによつて更生することである。○正法より生じ 佛の説かるゝものは正法である。吾等は正法を學ぶことに依つて更生するのである。○法化より生じ 佛が正法を以て吾等を教化せらるゝに依つて、吾等は更生することを得るのである。○法の餘財を得 吾等凡夫が佛の境界に近づき得ることは、無上の至寶を得たものといふべきである。是れ皆佛の正法を學び得たる賜と申すべきである。

此に至つて正見の重んずべきことが力説されて居るのは大に注意すべきである。前に凡夫は到底佛の覺られた所を覺ることは出来ぬとあるのは、決して吾等を失望せしめんが爲ではない。それは「正見の者は是れ佛の眞子なり」と斷せられたのに依つてもわかることである。凡夫

がいつ迄も凡夫で居るのは妄想の見到に囚はれて居るからである。妄想の見をすてゝ正見を得さへすれば、佛の眞子となることが出来るのである。妄想の見とは即ち執著である。凡夫は眼前の事に執著して容易に之を離るゝことが出来ぬ。「大學」にも心を正しくすることの要を説いて、

身に忿寔する所有れば、則ち其の正を得ず。恐懼する所有れば則ち其の正を得ず。好樂する所有れば則ち其の正を得ず。憂患する所有れば則ち其の正を得ず。心焉に在らざれば視れども見えず、聽けども聞えず、食へども其の味を知らず

とあるが眞に適切である。之を要するに勝鬘夫人が「我見妄想計著して」といつた通りである。小き自己の利害得失に執著して容易に離るゝことの出来ぬものは、其の執著が其の心を曇らして居るから、視ても正しく見え、聽いても正しく聽えぬのである。法句經に記する所に依ると、むかし精進力と名くる比丘が山中の静かなる處に獨り居て、佛法に就て頻りに思惟して居た。その時に其の傍の樹の上に鳩と鳥と毒蛇と鹿とが居て、「世間の苦の中に於て何が最も重いか」といふことに就て互ひに語りあつて居た。時に鳥がいふには、

飢渴最も苦なり。飢渴の時は身疲れ目昏みて身識寧からず。身を羅網に投じ鋒刃を顧みず。我等の身を喪ふこと之に由らざるはなし。之を聞いて鳩がいふには、

嬌欲最も苦なり。色欲熾盛なれば顧念する所なし。身を危うし命を滅すこと之に由らざるはなし。

毒蛇が之を聞いていふには、

瞋恚最も苦なり。瞋恚一たび起れば親疎を避けず。亦能く人を殺し復た亦自殺すなり。

鹿が續いていふには、

驚怖最も苦なり。我林野に在りて心常に惴れ、獵師及び諸の豺狼を畏懼す。髣髴として聲あれば奔りて坑壑に投ず。母子相捐て肝膽掉ひ戦く。

此等の動物の語りあふのを聞き終つて、彼の比丘は靜かに、

汝等の論ずる所は是れ其の末のみ。未だ苦の本を究めず。天下の苦は身あるに過ぎたるは無し。身を苦の器と爲す。是故に我は俗を捨て道を學び意を滅し想

を斷ち、四大を貪らざるは苦の源を斷たんが爲なり。

と語つたとある。四大とは地水火風の事で人の身は地水火風を集めて成るものであるといはれて居る。四大を貪らぬといふは一身の欲望に動されぬことである。少しも欲望に動されぬやうになれば、瞋りも恐れも何も起るものではない。

凡夫は互ひに執著がある爲に正見を有することが出來ず、互ひに妄想の見を懷いて相對して居るのである。其の間に衝突が起り争鬭の起るのは少しも怪むに足らぬことである。雜譬喻經に或る長者の子と其の妻との譬喻譚がある。其の長者の子は新に妻を迎へて互ひに深く相愛して居た。一日夫はその妻に向ひ「今日は至て閑であるから酒を酌みかはして楽しまうと思ふ。」厨へ行つて酒を持つて來るやうに」といつた。妻は夫の命に従つて直ちに厨へ行き、酒甕を開いたところが自分の姿が酒に映つた。「さては自分より他に愛する女があつて、此の甕の中に隠して置いたのか」と、妻は大に怒つて元の室へ戻り夫の多情を言を極めて責めた。夫は不思議に思つて自ら厨へ行つて酒甕を開くと自分の姿が酒に映つた。之を見て「妻は自分の眼を昏まして若い男を隠して置くのだ」と思ひ込み、大に怒つて元の室へ戻り、妻に向つて、「汝は若い男を隠して置きながら、却つて我に對して罵り怒るとは不都合千萬な奴である」といひ、兩人

互ひに罵りあつて、争ひはいつ果てやうとも見えなかつた。

其の時戶外に立つて居た一人の僧が夫婦の罵りあふ聲を聞きつけて其の仔細を質ね「然らば自分が其の實際のところを見届けやう」と、直ちに厨に入つて酒甕を開いて見ると、自分の姿が酒に映つた。僧は彼の夫婦を厨へ呼び寄せて、其の不心得を懇ろに諭し、

世の人愚惑にして空を以て實と爲す。今汝等が爲に甕の中より人を出すべし。

とて、一つの石を取つて其の甕を打ち壊した。甕が破れて酒の盡きると共に、人の姿は何も見えなくなつた。夫婦は之を見て深く慚愧を懷き、此より信心を勵んで、共に平和なる生活に入る事が出来たといふ。佛は此の譬喩を説き終つて後に、

影を見て相闘ふは三界の人の常なり。

と教へられたと。實際凡夫は互ひに影を見て相闘つて居るのである。互ひに正しく見ず、正しく聞かず、正しく思ふことを知らぬ者が相對するのであるから紛争の起るのは固より當然の事である。

此の淺ましい生活を離れやうとする者は是非とも大乘の教へを學んで、佛の御心を以て吾が心とするやうに努むべきのみである。吾等の耳目を刺戟する外界の出来事は常に變化して、絶

え間は無いのであるから、煩惱が更に煩惱を生み、執著より更に執著を喚び起すといふやうな状態で、殆んど際限はないのである。されば若し消極的に煩惱を掃ひたい、執著を除きたいとのみ考へて、如何に工夫を凝して見ても容易に効果の見らるゝものではない。吾等は先に積極的に考へなければならぬのである。孫子に

守れば則ち足らず、攻むれば則ち餘あり。

とあるは大に味ふべき語である。吾等は大乗を學んで佛智を大に發揮し、其の力を以て煩惱を攻め破らなければならぬのである。氷の上に置けば熱い物でも必ず冷たくなる。火の上に置けば冷たい物でも必ず熱くなる。常に大乘を學んで怠らなければ如何なる煩惱でも必ず除くことが出来るので、孫子が

古の所謂善く戦ふ者の勝つは、勝ち易きに勝つ者なり。

といひ更にまた

勝兵は先づ勝ちて而る後に戦を求む。敗兵は先づ戦ひて而る後に勝を求む。

とあるのは名言である。必ず勝つべき力があればこそ戦つて勝てるのである。勝つべき力は吾に在る。吾が力が空しくて敵に勝てやう筈はない。大乘を學ぶのは一切の煩惱に勝つべき力を

作る所以である。

常に大乘を學んで怠らなければ、いつとは無しに佛の御心が吾が心と通ひあふやうになるから、いつとは無しに一切の煩惱が掃ひ去られて行くのである。法華經の安樂行品には、常に此經を信するもの、境界を説いて、

智慧の光明日の照すが如くならん。若し夢の中に於ても但だ妙なる事を見ん。

とある。實際吾等の日常の經驗に思ひ合せて見ると、多くの人の前では行ひを慎んで格別に過失を犯さぬことが出来ても、夢の中では随分淺ましいことをするものである。夢の中までも清淨になれば、勿論眼の覺めて居る時に間違ひのあらう筈はない。夢の中でも常に妙なる事を見るといふのは、其の心が常に佛と通ひあつて居る證據である。而してその夢の中のことを説いて、

又諸佛の身相金色にして無量の光を放ちて一切を照し、梵音聲を以て諸法を演説し、佛四衆の爲に無上の法を説きたまふ。身を見れば中に處して合掌して佛を讚し、法を聞きて歡喜して而も供養を爲し、陀羅尼を得て不退智を證す。

とある。是れが即ち所謂見佛の境界である。見佛とはいつも佛と共に在る心をもつて日々を送

つて居ることである。

此の經文に『法を聞きて歡喜して』とあるが、眞に法を聞くの喜びに越ゆる喜びはない。法を聞くことに依つて、吾等が本來具有せるところの佛性がスルクと伸びて行くのである。此の喜びに比すべきもの、人の世にまた有らう筈はない。同じ法華經の藥草論品に、佛の説法の貴いことを雨が有らゆる草木を潤はすに比して、

其の堪ふる所に隨ひて爲に法を説くこと種々無量にして皆歡喜し、快く善利を得しむ。是の諸の衆生是の法を聞き已りて現世安穩にして後には善處に生じ道を以て樂を受け、亦法を聞くことを得、既に法を聞き已りて諸の障礙を離れ、諸法の中に於て力の能ふる所に任せて漸く道に入ることを得。彼の大雲の一切の卉木叢林及び諸の藥草に雨ふるに、其の種性の如く具足して潤を蒙り、各生長することを得るが如し。

といつてある。絶えず大乘の法を聞くことに依つて、本來具有せるところの貴い佛性が次第に長じ、終には佛の境界に近づいて行けるので、『漸く道に入ることを得』といふのはまことに好

い形容である。草や木の側に立つて見詰めて居ても、今伸びて行くといふことは認められぬけれども、いつとは無しに伸びて行くのである。吾等の佛性の開發せられて行くのも亦其の通りであつて、いつとは無しに法の力に依つて伸びて行くのである。それに伴つて諸の煩惱もいつとは無しに除かれて行くわけである。禪家の書などを讀むと、何かの機會に於て豁然として大悟したといふやうな事がよく出て居るが、それは特に機根のすぐれて居る人にはさういふ事もあるかも知れぬけれども、さういふ事は一般には望まれぬことである。一般にいへば「漸く道に入る」といふのでなければならぬ。曉に東の方の空が少しづつ明るくなつて、いつか夜が明け離れてしまふやうに、佛性がいつとは無しに伸びて行くに随つて、心の闇も自ら除かれて行くのである。

又此の藥草諭品の文に「現世安穩にして後には善處に生じ」とあるのに就て、往々にして誤解があるから、特に注意して置きたいと思ふ。現世安穩とあるので、「法華經を信ずれば現世に於て有らゆる災難が無くなる。病氣も無く火難水難盜難等も無くなるのである」と淺薄に解する人も世間には随分ある。随つて現世安穩を祈るために法華經を讀誦するといふことも昔から隨分行はれ來つたのである。併しながら此處に「安穩」といつてあるのは心の中のことである。如

何なる境遇、如何なる事情の下に在つても自分の心の持ち方一つでは、少しも其の累ひを受けず其の中を通り過ぎることが出来るのである。壽量品に

衆生は劫盡きて大火に焼かると見る時も、我が此の土は安穩にして天人常に充滿せり。

とあるが、此の土といふのは即ち此の娑婆世界のことである。衆生が大火に焼かるゝと見る、其の同じ世界に在つて佛は至て安穩なのである。獨り佛のみならず、佛の御力が吾等の心と通ひあつて居さへすれば、吾等も亦安穩であり得るのである。正しき信仰のない人は何處へ行つても安穩の天地を見出すことは出来ぬ。正しき信仰をもつて居る人は、周圍の境遇がいかに變化しても、其の心はいつも平和であり安穩であつて、いつも佛の貴い法を其の心に味ひつゝ、満足を感じて居られるのである。

勿論身體をもつて居る以上は、外界から受ける刺戟に對して全く無感覺なわけには行かず、雪が降れば寒く日が照れば暑いのである。刃を以て斬りかけられる時には血も出れば痛みをも感ずる。併し其の中に在つて自ら信ずる所を改めなければ、心はいつも平穩であり安穩である。日蓮上人が四條金吾に與へられた消息の中に

法華經を持ち奉るより外に遊樂はなし。現世安穩後生善處とは是なり。たゞ世間の留難來るとも取りあへ給ふべからず。賢人聖人も此事はのがれず。……苦をば苦とさとり、樂をば樂とひらき、苦樂ともに思ひ合せて南無妙法蓮華經と唱へ居させたまへ。これ豈に自受法樂にあらずや。

とあるのは、眞に能く現世安穩の眞の意義を明かにしたるものと稱すべきである。心に固く信する所のあるものは、如何なる危難の中に在つても其樂みを改めぬのである。孔子が陳蔡の間に於て迫害にあはれた時は、何時恐ろしい危害が自分達の身に迫つて來るか知れぬやうな有様であつたが、孔子が其の門人等を慰められたのに對して、顔淵は答へて

夫子の道は至て大なり、故に天下能く容るゝものなし。然りと雖も容れられざること何ぞ病まん、容れられずして然る後に君子を見る。

といつた。孔子は之を聞いて油然として笑つて、顔淵の言の眞に吾が意を得たるを悦び回や爾をして財多からしめば吾は爾が宰と爲らん。

と戲言をいはれた。死生の岐に立つて居ながら師弟互ひに慰めあつて、斯様な戲言をさへ言つて居られるほど其の心は平穩であつたのである。宋の蘇東坡は彼の周公旦が一國の宰相であり

ながら其の弟等の讒誣にあつて惱んで居たのを、之を比較して

乃ち今にして周公の富貴は夫子の貧賤なるに如かざる有るを知る。夫れ召公の賢を以て、管蔡の親を以て而も其の心を知らざれば、則ち周公誰と與にか其の富貴を樂まん。而して夫子の與に貧賤を共にする所は皆天下の賢才なり。則ち亦與に此に樂むに足れり。

といつたが眞に適評である。大乘の教へを學ぶ者も固より此の樂みを味ひ得べきものである。現世安穩とは此の事である。

煩惱に役せられて少しも心に平和のなかつたものが、此の如き樂みを得らるゝやうになつたのは、全く貴い佛の教へを學んだ爲である。世の中に此より以上に有難いことは無いわけである。安樂行品に説かれた夢ほど良い夢は決してあるまい。随つていつ迄も法を聞くことの樂みを知らずに世を過すほど不幸なことはないと知るべきである。方便品に此の如き人のことを説かれて、

薄徳少福の人として衆苦に逼迫せられ、邪見の稠林の若は有若は無等に入り、此の諸見に依止して六十二を具足す。深く虚妄の法に著しく堅く受けて捨つ可

からず。我慢にして自ら衿高し、諂曲にして心不實なり。千萬億劫に於て佛の名字を聞かず、亦正法を聞かず。此の如き人は度し難し。

とある。吾等はいつちも柔軟の心を以て佛の大乘の教へを學び、正しく佛の御心を解し得るやうに努むべきである。佛の御心が正しくわかりさへすれば、心の煩惱が自然に消え去るのであるから、所謂虚妄の見を離れて正見を得るやうになり、いつも正しく見、正しく聞き、正しき心を以て世に對し人に對し、眞に意義ある生涯を送ることが出来るのである。以上で「一諦章」を終つて次には「一依章」である。一依とは即ち滅諦のことで、是れが實に正見の基礎なのである。一依といふも第一義依といふも同じ意義である。

世尊、淨智とは一切阿羅漢辟支佛の智波羅蜜なり。此の淨智とは淨智といふと雖も、彼の滅諦に於ては猶ほ境界にあらず。況んや四依智をや。何を以ての故に。三乗の初業は法に愚ならず、當覺當得なり。彼が爲の故に世尊四依を説きたまふ。世尊、此の四依とは是れ世間の法なり。世尊、一依とは一切の依の上なり。出世間上々なり。第一義依は所謂滅諦なり。世尊、生死とは如來藏に依

る。如來藏を以ての故に本際不可知と説く。

一依といふは即ち絶對の理のことである。依とは「他のもの、依つて立つ所」といふ意である。譬へば家に就て之を見るに、敷居や鴨居は柱がなければ敷居たり鴨居たる用を爲さぬ。されば柱は敷居や鴨居の「依」である。然るに柱は礎の石がなければ柱として立つことは出来ぬ。されば礎の石は柱の「依」である。その石も大地がなければ礎としての用を爲すことは出来ぬ。されば大地は此の家全體の依つて立つ所のものであつて、之を第一の依と稱すべきである。佛法といふものは非常に洪大なるもので、一切衆生は此の佛法を學ぶことによつて初めて意義ある一生を送ることが出来るのであるから、佛法は一切衆生の「依」であるといふべきである。さて佛法は如何に洪大なるものであつても、其の歸する所は四諦であるから、四諦が佛法全體の「依」であるとするべきである。而して四諦は畢竟一の滅諦の上に立つべきものなることは前段に於て委しく説かれたる所である。されば滅諦を以て佛法全體の「依」とすべきである。此の滅諦は佛智を以て證知せられたる所であるが、佛智を以て證知せられたる所は即ち絶對の理である。是れこそは大地が家を支へて居ると同様に、佛法全體の依つて立つ所のものである。故に之を「一依」といひ、また「一切の依の上」といひ、また「第一義依」といふのである。而して佛が此の

如き絶對の理を覺つて之を説きたまひ、吾等が之を聽聞して之を能く解することの出来るのは實に如來藏即ち佛性の具はつて居るが爲である。如來藏の完全に開發せられたものが即ち佛智であることは前段に於て既に委しく説かれた所である。吾等は凡夫であるけれども同じく如來藏を具へて居るのであるから、勤めて佛の大乘の教へを學んで怠らなければ、所謂滅諦を證知することが出来て、やがては一切衆生の所依となるべき貴き身ともなれる筈である。前にも引用したが涅槃經の中に、

一切衆生は定めて當に大信心を得べし。是故に説きて一切衆生悉く佛性ありといふなり。

とある通りである。

○淨智とは 是れは小乘を學んで覺つたもの、具ふる所の智をいふのである。即ち凡夫に共通なる煩惱を離れ盡したる程度のものである。未だ一切衆生を救護すべき力は具はらぬのである。○淨智といふと雖も 凡夫に共通なる煩惱を離れたのであるから其の心が清淨になつたとはいへるけれども、一切衆生の爲に力を盡すといふ所まで行かなければ、全く自己を捨て切つたとはいはれぬのである。大慈悲の心を具へ得て初めて眞の淨智を得た者といふべきである。

○彼の滅諦に於ては 滅とは一切の差別を離れ盡したる平等の境地である。これは大乘を學び菩薩道を勵む者のみの到達し得べき所で、小乘を學んだのみでは到底到れぬところである。○況んや四依智をや 四依智とは即ち四諦によつて生ずる所の智である。四諦の中の苦諦と集諦と道諦とは要するに滅諦に依つて成立つものであることは前段に説かれたる通りである。其の根本たる滅諦が徹底的にわからぬ以上は、他の三諦の明かに知れよう筈はないのである。○三乗の初業 三乗とは聲聞乗と緣覺乗と菩薩乘、即ち大乘と小乗である。その初業といへば小乗の修行をすることである。○法に愚ならず 小乘を學んで居るものでも皆佛性を具へて居るものであるから、低い程度の教へを學んで満足せぬ念が何となしに其の心の底には動いて居るのである。○當覺當得なり 小乘を學んだのみで眞の覺りは開けぬ。又小乘を學んだのみでは佛の御心を解し得たものではない。併し此より進んで大乘を學べば眞の覺りも得られ佛の御心を解し得るやうにもなれるのである。其の準備として小乘を學ぶことは決して無益ではない。されば「當に覺るべく當に得べし」といふのは、小乘より進んで大乘の修行に入るべきことの必要を説かれたのである。○四依を説きたまふ 所謂四聖諦を學ぶことに依つて正しき覺りを得べきことを教へられたのである。○四依とは是れ世間の法なり 世間の法といふのは根本の原理でな

く、其の應用的方面のことである。人生の苦であることを説き、人々の心が煩惱の集まりであることを説くのは、要するに人々をして其の無意義なる生活に囚はれて生涯を終るの愚なることを自覺せしめて、眞に意義ある生活に入らしめんが爲に外ならぬのであるから、滅諦を説かるゝことに依つて他の三諦が初めて其の根柢を得るのである。○一依とは一切の依の上 一依とは即ち滅諦である、即ち佛の覺りたまへる所の絶対の理である。是れが一切の教への根柢となるのである。○出世間上々 出世間といふのは世間の生活を離れ切つたことではない。世間の生活に囚はれずして、更に高い所から世間の人々を導くことである。○生死とは如來藏に依る生死とは世間の有らゆる變化をいふのである。變化極まりなき世間に立つて、其の變化の爲に心の顛倒してしまつた者は、如何にして斯る變化の中に處すべきかの分別を失つてしまふのである。たゞ佛の大乗の教へを學んで怠らぬ者は、其の具有する如來藏即ち佛性が其の光りを發して來るから、紛糾極まり中に於て一貫したる正しき道を見出すことが出来るのである。○本際不可知 如來藏より發する智慧の應用はまことに無限である。煩惱にのみ役せられて居る者の窺ひ知るべき所ではない。

此に至つて本末輕重の關係が明かに説かれてあるのは、まことに貴いことである。吾等が社

會の一員として生きて居る以上は、自分の努力が多少なりとも社會の役に立つことを望むべきは勿論であるが、それには先づ以て自己の覺悟を定め、自己の實力を養はなければならぬ。自己の覺悟も極まらず、自己の分別も定まらぬのに、世のため人のために力を盡すことの出來やう筈はない。孔子の儒教は天下國家の用を爲すべき人物を養成することを目的とするのであるが、孔子は其の門弟子の中に於て、世間に立つて目覺しい活動をして居た子貢や子路を一向に稱揚しないで、たゞ陋巷に屏居して居た顔淵を「賢なるかな」と幾度もほめられた。それは顔淵が大事に當るべき實力のあることを見極められての事と思はれる。顔淵は不幸にして世間に其の實力を認められず、極めて貧しい生活をして終つたけれども、若し然るべき地位を得たら充分に其の手腕をふるふことの出來た人に相違ない。孔子は顔淵に對して、

之を用ゆれば則ち行ひ、之を舍つれば則ち藏る。唯だ我と爾と是あるかな。

といはれた。孔子は曾て魯國の宰相となつた時には非常に優秀なる治績を擧げて國民をして驚嘆せしめたのであるが、顔淵に對して「自分の同じやうに世間に用ゐられさへすれば、充分な働きの出來るものである」といはれたのは、其の力量に就て餘ほど深く信用せられたものと思はれる。其の時に遇ふと遇はぬは運命であるから致し方がないが、其の時に遇ひながら立派な

働きをすべき實力のないのは、何よりも耻かしいことである。何よりも大切なのは自己の修養である。

孔子は充分の力量を有しながら世間に容れられずして、其の力量を發揮することも無く終られたのであるが、獨り其の道を樂んで少しの煩悶もなく、

天を怨みず人を尤めず、下學して上達す。我を知る者は其れ天か。

といひ、君子は能くすること無きを病ふ。人の己を知らざるを病ひず。

といひ、優游自適の間に其の晩年を送られたのである。されば或る人が孔子の世に用ゐられぬのを不平に思つて居られるかと思つて、其の意を探らんが爲に「子何ぞ政を爲さざる」と問うたのに對して孔子は

書に云く孝か惟れ孝、兄弟に友にして政有るに施すと。是も亦政を爲すなり。爰ぞ其れ政を爲すことをせん。

と答へられた。國政に與るのみが國家に貢獻する所以とは限らぬ。自分が子弟を集めて之を教育して居るのも、即ち國家の發展するに貢獻することであつて、直接に國政に與るのと其の効

果に於て異なる所はないとの意である。何人でも自己に徳が具はり力が具はりさへすれば、強いて其の周圍に感化を與へようとしなくても、自然に其の周圍を感化することが出来るのである。此の本末の關係を明かにしなければならぬのである。

苟くも佛法を學ぶものは皆菩薩行を勵んで、終には佛の境界にも到達し得るといふことを理想としなければならぬことは、今までも繰返して説かれて居ることであるが、菩薩として佛の化導を賛げ、世を導き人を救ふために力を盡さうとするには、先づ以て自己を完成することに意を用ゐなければならぬ。法華經提婆品には龍王の女が文殊師利菩薩に従つて法華經を學び、結局佛の境界に到達し得たといふことが説かれてある。それに就て文殊の説明した所には、

諸佛の所説、甚深の秘藏悉く能く受持し、深く禪定に入りて諸法に了達し、刹那の頃に於し菩提心を發し、不退轉を得たり。辯才無礙にして、衆生を慈念すること猶ほ赤子の如く、功德具足して心に念ひ口に演ぶること微妙廣大なり。

とある。是れはまことに菩薩として具へざるべからざる所の性質を悉されたるものであるが、其の前半即ち「不退轉を得たり」までは其の自利の方面である。「辯才無礙」より後は其の利他の

方面である。而して其の自利によつて其の利他の作用が生み出されたのであることに特に注意しなければならぬのである。

今こゝに勝鬘夫人が滅諦を得ることを「一切の依の上」であるといひ、又「第一義依」であるといつたのは眞に本末の別を明かにして遺憾なき語といふべきである。滅諦を得るとは即ち佛の境界を知ることである。滅諦を知り得た人は佛の御心を能く辨へ知つた人である。此の如き人にして初めて一切衆生を教へ導くところの大活動が出来るのである。眞に世のため人のために力を盡さうと思ふ人は必ず自己の修養に努力することを怠らぬのである。釋尊の如きは眞に其の範として仰ぐべき方であつた。釋尊が難行苦行を重ねて其の洪大なる佛智を成就したまへるは、一切衆生を救護しやうといふ御志が初めから確立して居たからである。前にも引いた無量義經の中に於て、大莊嚴菩薩等が釋尊の難行苦行を稱歎して種々に言を盡して後、

是故に今自在の力を得て、法に於て自在にして法王と爲りたまへり。

といひ、更に

我復た咸く共に稽首して、能く諸の勤め難きを勤めたまへるに歸依したてまつる。といつたのは之が爲である。

尙ほ注意すべきは「三乗の初業は法に愚ならず、當覺當得なり」といふことである。釋尊が小乗を説かれる時から、「今小乗を聽いて居る者も後には必ず皆大乘を學んで、皆菩薩道を勵むやうになる」といふことを目標として説かれたのであることは前に已に述べた。今迄にも幾度か引いた語であるが、法華經方便品には

我本誓願を立て一切の衆をして我が如く等しくして異ること無からしめんと欲しき。

とある。その「本」といふのは「初めから」といふ意である。釋尊は其の説法を始められた時から、吾等一切衆生のために大乘を説き、吾等をして盡く佛と等しくして異ることなき者たらしめたいといふ心をもつて居られたのである。たゞ如何せん多くの者は機根が甚だ下劣で、さういふ高遠な説を聽いても到底理解し得ぬ程度であつたので、已むを得ず四十餘年の間方便の教へを説いて居られたといふことである。併し釋尊は一切衆生が皆佛性を具へて居ることを能く知つて居られるのであるから、如何なる愚者でも惡人でも決して愚者で終り、惡人で終るべきものではない。其の人に依つて速いと遅いの差はあるけれども、必ず佛法に歸依して正しい覺りを得る時のあるべきものであると確信して、教へを説いて居られたのである。涌出品には釋

尊が諸菩薩の慰問に答へられた語として、

如來は安樂にして少病少惱なり。諸の衆生等は化度す可きこと易し、疲勞有ること無し。

とあるが、是れはたゞ釋尊が如何なる患者をも惡人をも寬假せらるゝところの宏い度量をもつて居られたからでは無く、釋尊は患者がいつ迄も患者ではなく、惡人がいつ迄も惡人ではなく、必ず後には正しい信仰を得べきものであるといふことを認めて居られたからである。

されば釋尊は小乘を説きながらも、たゞ之を小乘として説かれたのでなく、大乘に入るべき階梯として説かれたのである。又如何に機根の低い者でも決して之を侮らるゝこと無く、「やがては菩薩行を勵まうといふ心を發すべきもの」として之に對せられたのである。今勝鬘夫人が其の初歩の聞法者を稱して「法に愚ならず」といひ、「當覺當得なり」といつたのも、佛意の在る所を察しての言である。彼等が小乘を學ぶのは大乘に入るべき途がこゝに開かれたのである。たとへ小乘を聞いて凡夫に共通なる煩惱を除き得たのみで自ら足れりとする心が一時に起つても、決して永くそこに止つてしまふべきではない。然るべき時機が來れば、必ず進んで大乘を學ぶことになるのである。此の事は斷じて疑ひのないことなのである。

以上で「二依章」を終つて「顛倒眞實章」に入るのである。此の經の正宗分も愈々終りに近づくので、追々に結論となるわけであるが、此の章に於ては苟くも如來藏を具へたるものは、決して永く凡夫にして終るべきものでないことを斷せらるゝのである。

世尊、如來藏あるが故に生死を説く。是を善説と名く。世尊、生死、生死とは諸受根の没して次第に根の起ることを受けず、是を生死と名く。世尊、生死とは、此の二法は是れ如來藏なり。世間言説の故に死あり生あり。死とは諸根の壞するなり、生とは新に諸根の起るなり。如來藏に生あり死あるにはあらず。如來藏は常住にして不變なり。是故に如來藏は是れ依たり、是れ持たり、是れ建立たり。世尊、不離不斷不脫不異不思議の佛法なり。世尊、斷と脱と異との外の、有爲法の依持建立たるものは是れ如來藏なり。世尊、如來藏無ければ苦を厭ひ、涅槃を樂求することを得ず。何を以ての故に。此の六識及び心法の智に於て、此の七法は刹那も住せず、衆苦を種ゑず、苦を厭ひ涅槃を樂求することを得ず。世尊、如來藏とは前際なし、起らず滅せず、法として諸の苦を

植^うゑ苦^くを厭^{いと}ひ、涅槃^{ねはん}を樂^{がく}求^{もと}むることを得^う。世尊^{せそん}、如來藏^{にょらいざう}は我^がにあらざ、衆生^{しゆじやう}にあらざ、命^{みやう}にあらざ、人^{にん}にあらざ。如來藏^{にょらいざう}とは身見^{しんけん}に墮^だする衆生^{しゆじやう}と、顛倒^{てんだう}の衆生^{しゆじやう}と、空亂意^{くうらんい}の衆生^{しゆじやう}とは其^その境界^{きやうがい}にあらざ。

此の段と次の段とに於ては、吾等が皆如來藏を具へ得たることの貴さを自覺しなければならぬ所以を極言し、以て此の經の正宗分を終るのである。吾等は佛が貴き大乘の教へを吾等の爲に説き遺されたる大慈悲に對して深く感謝しなければならぬと共に、吾等が此の如くに貴き教へを解し得る本性を具へて居ることに就ても深く感謝しなければならぬのである。若し吾等が如來藏を具へて居なかつたならば、佛は其の貴き教へを説かれなかつたであらう。よし又説かれても之を能く解し能く信するものが無ければ、其の貴き教へは今日に傳はらなかつたであらう。

獨逸の哲人ヤコブ・ペーメは貧しい靴屋の主人であつたが、或る日其の店頭で仕事をして居る間に圖らずも一の暗示を得た。其の店頭の床の上に一つの錫の壺があつた。それは靴の踵の皮を入れて置くものであつた。其の家は非常に舊い建物であつたので屋根が破れて居たが、その破れ目から日の光りが射して來て、その光りが錫の壺に當り、眼の眩むやうな強い光りを生じた。

ペーメは之をツクトゥ眺めて居て大に悟る所があつた。日の光りはまことに美しいものであるが、若し地上に射したならば斯んな光りとはならなかつたであらう。又此の錫の壺が日の射さぬ所に置かれてあつたならば斯んな光りは生じなかつたであらう。日の光りと錫の壺とが相遇ふことを得たので、此の眼の眩むやうな美しい光りを生じたのである。吾等が神を信じ得るのも全く此の通りである。神の子耶蘇が此の世に出現して、貴き神を信すべきことを教へられたのはまことに有難いことであるが、吾等が若し其の貴い教へを理解する力をもたなかつたならば、切角耶蘇が此の世に出現されても何の意義もなかつたであらう。吾等は精靈を附與されて居ることを感謝しなければならぬ。神が其の子たる耶蘇を此の世に降し給へることも眞に有難いが、吾等に此の精靈を神が賦與せられたのも非常に有難いことである。ペーメは斯う考へて心の中が著しく明るくなつたことを感じたといふことである。歐洲中世の羅馬教會に於ては主として『人は罪の子である』といふ方面のみを力説して、懺悔の大切であるといふことのみを教へたのであるが、決してそれが基督教の教義の全體ではない。人々が自ら貴び自ら重んじ、其の前途に大なる希望をもたなければならぬといふことも教へられなければならぬ。ペーメが其の點に思ひ到つたのは、彼の獨自の人生觀を確立する上に大なる力となつたものと思はれる。

佛教に於ては吾等の反省と慚愧の必要を教へらるゝこと至れり盡せりともいふべきであるが、それと同時にまた吾等が貴き佛性即ち如來藏を具へて居ることをも教へられてあるのはまことに貴い。而も釋尊は

一切衆生煩惱の中に在りと雖も、常に染汚せざる如來藏あり。徳相備足して我
と異なることなし。

と明言して居られるのである。此一切衆生といふ中には如何なる愚者をも如何なる惡人をも含むのである。此の貴い本性を具へて居ることを自ら覺らずして、煩惱に役せられて無意義なる毎日を送つて居るものが即ち「顛倒の衆生」である。此の顛倒の見をすてゝ大乘の教へを學び、自ら具有せる貴き本性を開發し長養することに力を用ゆるものが即ち「眞實の理を知る者」である。顛倒の衆生も、眞實の理を知る者も共に如來藏を具へて居るものであるが、之を自覺すると自覺せぬとが即ち兩者の岐れ目である。此の點が此の「顛倒眞實章」に於ては明かに説かれてある。

此處に「如來藏無ければ苦を厭ひ涅槃を樂求することを得ず」とあるのは特に注意すべき語である。豚は泥の中に在つて其の泥の汚れたることを知らず、蛆は厠の中に在つて其の臭きことを知らぬ。若し吾等の心がたゞ煩惱のみに充されて居るならば苦の娑婆に在りながら其の苦を

厭ふことを知らぬであらう。勿論吾等の心の中に煩惱が非常に勢力を得て居る時には、苦を脱せんと求むる念も起り得ぬのである。法華經の方便品に

深く諸の邪見に入りて、苦を以て苦を捨てんと欲す。

とある通りで、一切の言ふ事も爲す事も皆苦を生むのである。一の苦を捨てんとして爲したことが又新なる苦を生むのであるから、いつ迄も苦を脱することは出來ぬわけである。併しながら吾等とても貴い如來藏をもつて居る者であるから、此の煩惱の生活が苦であることを指摘する、時には必ず氣がつくのである。それで此の苦を離れて、意義ある生活に入りたいといふ念を起すことになる。佛が「穢土を厭離せよ」といふことを屢々説かれたのは實に之が爲である。穢土を厭へと説かるゝのは「穢土を淨土にするために力を盡せ」と教へられんがための前提に外ならぬのである。

外國の學者の中には佛教が厭世的、消極的であるといつて非難する人が少くないけれども、それは佛教の一面のみを見て、未だ其の全體を知らぬからである。世を厭ふべきことを説くのは、斯る厭ふべき世を樂しむべき世に變化せしむべく努力せよと教ゆる爲の前提であることを知らなければならぬ。人々が皆煩惱のみに充ちたる心を以て相對し、家を作り村を作り社會を

作つて居る以上は、厭ふべく哀しむべき出来事の多く起るのは當然である。此の世相を有のまゝに見詰めて、何故に此の世は斯くも厭はしいものであるかと徹底的に考へることが何よりも肝要である。それを深くも考へずに『成るべく累はしい事には關係せぬやうにしよう』とか、『成るべく世間の明るい方面のみを見て毎日を送るやうにしよう』とかいふ主義の人も少くないやうであるが、それは自ら欺き人を欺くものにすぎぬ。厭はしい事は飽くまで厭はしいと見極めて、初めて其の厭はしい事を取り除くべき氣が起るのである。佛教に於ては煩惱に囚はれたる生活の淺ましい状態を有のまゝに示すと共に、斯る淺ましい状態を全く離れ切つたる、貴い心の持ち方のあることを示して、人々の共に之に倣ふべきことを勸むるのである。佛教全體を通觀すれば決して消極的、厭世的のものではない。吾等は多くの經典の中に示されたる佛菩薩等の貴く氣高い言行に接する毎に、此の如くに貴き言行を爲し得べき本性が吾等自身にも具はつて居るのかと思つて、吾等は決して自ら輕んじ自ら侮つてはならぬといふことを痛感せざるを得ぬのである。昔の戀歌に

かにかくに厭はまほしき世なれども君が住むにも惹かれぬるかな

といふのがある。世を厭ひ世を捨てたいと思ふけれども、戀しい人が一人あるために、其の人に心が惹かれて世を捨つる氣にもなれぬといふのである。況してや貴い佛性を遺憾なく發揮して崇高なる行ひをした人が多く居ることを知るならば、世を厭ひ世を捨つる氣は決して起らぬ筈である。世を厭はしいと思ふのも吾等に佛性が具はつて居ればこそである。世を捨てられぬと思ふのも亦貴い佛性があればこそである。

○如來藏あるが故に生死を説く 生死とは前にもいつた通り、人生に於ける有らゆる變化のことである。人生の榮枯盛衰は常に變化する、利害得失の關係は絶えず變動する。一として常住なるものはない。佛教に於ては此等のものゝ常住でないことをいつも丁寧反覆して説かるゝのであるが、それは凡ての人に如來藏の具はつて居るが爲である。如來藏より發するものは清淨なる智慧の作用である。此の智慧を以て照し見ることに依つて、變化極まりなき人生を一貫して永遠に變らぬ道の存し理の存することが明かになるのである。されば生死を説かるゝのは、斯る生死を超越すべき力を養へよと教へんが爲である。斯る生死を超越すべき力は如來藏よりして發し來るべきである。○是を善説と名く 善とは完全の義である。佛の説きたまへる所は眞に善説と稱せらるべきものである。それは吾等一切衆生の本性を能く見極めて説かるゝからである。吾等の心は種々の煩惱に充されて居るけれども、而も貴き如來藏を具へて居るのであ

る。此處を能く見極めて其の煩惱に囚はれたる生活の恃むに足らぬことを説かるゝのであるから、吾等は皆大に覺醒して、斯る虚偽の生活を離れんといふ奮發心が起るわけである。されば之を稱して善説と申すのである。○生死 人生に種々の變化のあることは否定し得べからざる事實である。此の事實を深く究めなければ道も教へも立たぬ。此の事實を深く究めずして徒らに高遠なる理を説いても用を爲さぬのである。それは病の性質を究めずして藥を調合するやうなものである。吾等は世間に處して世間の事物の真相を委しく究め、而も世間に囚はれぬやうにしなければならぬのである。○諸受根の没して 受根とは吾等の耳目等に生ずる感覺のことである。受とは外から受くる所の種々の刺戟、根とは耳目鼻舌身等のことで、其等種々の刺戟は一々に種々の感覺を生ずるのである。吾等は之によつて好惡愛憎等の感情を生じ、或は之を求め或は之を避けんとして、即ち利害得失の打算を試みるので、これが有らゆる紛争の元となるわけである。而も吾等の周圍の事情は絶えず變化するのであるから、其の刺戟も亦絶えず變化し、一つの刺戟が決して久しくは存續せぬ。没するとは消え去つて永く續かぬことをいふのである。されば之にいつ迄も囚はれて居てはならぬ。○次第に根の起ることを受けず 前に生じた感覺と次に生ずる感覺とは必ずしも聯絡せぬのである。受けずといふのは其の間に聯絡統

一の具はらぬことである。楽しいと思つたことが忽ちにして苦しいことに變る。苦しいと思つたことでも忽ちにして消え去る。それ故に種々の感覺が心の中で相闘ひ相紛糾するのである。凡夫に確立したる自我が無いといふのも實は之が爲である。○是の二法は是れ如來藏 世間の變化によつて絶えず種々の刺戟が與へられ、此等の多くの刺戟が來る毎に吾等の心は動搖するのであるが、斯く動搖して定まらぬ吾等の心は即ち如來藏を具へたる所の心である。心が二つあるわけでは無い。如來藏が次第に養はれ育てられて其の光りを發して來れば、動搖して定まらなかつた心の中から清淨なる智慧も生み出されて來るのである。華嚴經の中に「心の外に別法無し」とあるのも此の事をいはれたのである。○世間言説の故に生あり死あり 周圍の境遇事情が絶えず變化し、絶えず新なる刺戟を與へて來るから、之に應じて絶えず新なる感覺が生ずるのである。其の變化して暫くも止まらぬ所を見れば、生死があるといへるのである。併し吾等の本來具有する所の如來藏は之が爲に少しも影響を受くべきものではない。斯く少しも變化せぬものが吾等に具はつて居ればこそ、吾等は靜かに人生の離合變化を觀察することが出来るのである。○死とは諸根の壞するなり 唯だ心に起る種々の感覺に變化があるのみで、それは譬へば水上に絶えず波の起るやうなものである。波に高低があつても水の本質には少しの

變化もない。如來藏の常に不變なるは其の如くである。○生とは新に諸根の起るなり 心は元の通りの心であるが、外から新なる刺戟が来るのに應じて新なる感覺が起つて來るのである。○如來藏は有爲の相を離る 有爲の相とは即ち差別觀である。如來藏そのものは全く差別の外に立つて居るから、如來藏より發する所の智力に依つて、一切の事物の差別が能くわかるのである。○如來藏は是れ依たり 吾等が人生の眞の意義を能く辨へて、正しい道を履んで行けるのは、如來藏が吾等に具はつて居るためである。されば如來藏は吾等のために唯一の頼みとなるものといふべきである。○是れ持たり 如來藏あるが故に吾等の身も心も正しく持たれて行くのである。若し如來藏がなければ、正しい智慮分別の力といふものは無くなつて、吾等の身心一切の働きは全く無意義なものになつてしまふであらう。○是れ建立たり 建立とは土臺となる力といふことである。此の力に依つてのみ、吾等の身心の働きが健全に行はれて、たとへ今は凡夫であつても、やがては佛菩薩に等しきものにもなれるのである。○不離不斷 常住にして變化なきものである。現象界の事は何れも皆離合あり斷續あるを免れぬのであるが、如來藏は離合斷續の外に立つものである。○不脫不異 一切の事物の眞相を見究むべき力が其の中から出て來るのであるから、之を稱して不脫不異といふのである。○不思議の佛法 其の作用

の無限なるを稱して不思議といふのである。此の不思議の力を本として佛法が成り立つのである。小乗の法には此の如來藏の作用がまだ充分に現はれて居ないから、眞の佛法とはいはれぬわけである。○斷と脫と異との外 「斷と脫と異との外に超越して」といふ意である。斷と脫と異とを免れぬものは現象界の刺戟によつて生ずる種々の感覺である。如來藏は其等より超越して居るものであるから、能く其等を統一することが出來るのである。○有爲法の依持建立たり 有爲法とは世間の一切の事物をいふのである。政治外交農工業といふやうなものは種々の差別の中に於て行はれ、また絶えず變化して止まぬものであるから、何れも有爲法といふ中に含まるべきである。其等の一切の働きがいつも健全に行はるゝ爲には、いつも大乘佛教の精神が其の根柢となつて居なければならぬ。而して大乘佛教なるものは前から説かれてある通り、如來藏といふものが其の本になつて居るのである。それ故に如來藏は有爲法の本となるものであるといふのである。○苦を厭ひ涅槃を樂求することを得ず 晝夜共に闇であるならば、其の闇であることを知らぬであらう。晝の明るいのと比べて見て初めて夜の暗いことがわかるのである。若し吾等の心が唯だ煩惱のみを以て充されて居るならば、人生の苦であるといふことが徹底的にわからぬから、覺を得たいといふ望みも起らぬであらう。吾等の心には皆如來藏なる

ものが具はつて居るので、煩惱に役せられて毎日を送ることの無意義なるを知つて、斯る無意義なる生活より脱出したいといふ望みも起つて來るのである。○六識及び心法の智 六識は前にあつた通り、眼耳鼻舌身意に生ずる所の一切の感覺的知識である。心法といふのは此等六種の感覺的知識を統一する所の作用である。此の七識が具はつて居るので吾等は一個人としての生活が出来るのである。但し此の七識より以上の心の作用が發達せぬ人は唯だ無事に毎日を送つて居られるといふだけで、道とか教へとかいふものゝ貴さはまだ辨へ知らぬのである。即ち凡夫たるに過ぎぬ者である。○刹那も住せず 七識だけの力で生活して居るものは更に主義もなく理想もなく、唯だ眼前の事のみを處理して、毎日を無事に送りさへすれば、それで自ら足れりとして居るのである。されば其の心は外界から來る所の刺戟に絶えず動かされて居て、一刹那と雖も靜かではないのである。○衆苦を種るす 苦を苦と知らぬのである。常に外界の刺戟にのみ動かされて居るものは、其の心が片時も安穩でないものであるが、其の何故に安穩でないかといふことを自ら反省することを知らぬのが凡夫の常である。若し佛法を學んで、本來具有するところの佛性（即ち如來藏）が發揮せらるゝことになれば初めて苦を苦と知つて、此の苦を脱離すべき道を求むるやうになるのである。○前際なし いつから如來藏が具はるやうに

なつたかといふ、其の始めはないのである。吾等の生命は果てもない昔から續いて居るものであるが、此の生命と共に如來藏なるものも具はつて居るのである。○法として「如來藏そのものゝ本性として」といふ意である。如來藏の働きが次第に發揮せらるゝに隨つて、世間の苦を苦と知つて、此の苦を離るゝ道を求むる力が強くなつて來るのである。○我にあらす衆生にあらす 我も人も共に如來藏を具へて居るのである。然るに前にいふ第七識まで發達して、それより以上に進まぬものは唯だ自他を區別することのみを主として考へて居るから、いつも相争ひ相闘うてのみ居るのである。其の具有せる所の如來藏が次第に發揮せらるゝと共に、我も人も共に小い自己に執著することを止めなければならぬといふことが明かになつて來るのである。○命にあらす人にあらす 命とは自然の變化をいふのである。人とは人間社會の一切の出來事である。人と天地萬有とは共に存し共に生きて行くのであるから、吾等は自然界と吾等とを強めて差別するには及ばぬ。如來藏の力が發揮せられて行くと共に人をも物をも盡く護らるゝ絶對の力の偉大なることを深く感ずるやうになるのである。○身見に墮する衆生 萬事を吾が一身の利害得失を中心として考へて居るものは、如來藏の存在などいふことのわかる者ではない。○顛倒の衆生 人と共に活くべき本性を忘れて、自己の利害のみを考へて居るものは其

の心の顛倒せるものといはなければならぬ。○空亂意の衆生 煩惱のために其の心が昏んで正しい分別を失つたものは、如來藏の存在などに想ひ到らぬのは勿論のことである。

此の一段に於て特に注意すべきことが二つある。その一は正しい覺りを得ることが「有爲法の依持建立」であるといふことである。其の二は苦を厭ふといふ思想の根柢が即ち如來藏であるといふことである。此の二つの事は大乘佛教の根本精神を明かにするために特に肝要なることである。先づ其の第一の點からいふと、有爲法とは世間一切の事を指していふのである。政治も外交も商工業も皆有爲法である。有爲とは差別の義であり變化の義である。世間の事は差別がなければ成り立たぬ。又絶えず變化し行くので進歩もあり發達もあるわけである。然るに此の世間を健全に發達せしめんとするには、佛の正法を能く辨へた人が其の指導の任に當らなければならぬのである。絶對不變化の理を能く覺つた人のみが、此の變轉極まりなき所の世間の事物に接して、一々其の判斷を誤らず、之を健全なる道へ引き向けて行くことが出来るのである。國王といふ者は一切の人を教へ導くべき徳を具へなければならぬといふのであるが、獨り國王のみならず、世間の人を指導すべき責任のある人は皆其の徳を養はなければならぬ。その徳を養ふには佛の大乘の教へに依らなければならぬのである。されば尼乾子經には

能く法に依つて衆生を攝護して安樂ならしむるを以ての故に、之を名けて王と爲す

とある、法に依るとは即ち佛の正法に依ることである。また同じ經に、

法行を行ずるの王は不放逸心と大慈悲心とあり、身の無常と資生の無常とを知り、善く自ら身を觀じて諸の過を見、能く實の如くに知つて資生を受用す。

ともある。不放逸心と大慈悲心とを兼ね具へたる者は、能く佛の大乘の教へに一致したるものである。資生といふのは吾等の生活を續くるために必要なる衣食住の原料のことである。即ち一切の物資である。吾等の生命にも限りがあり、一切の物資にも限りがある。吾等の生命に限りがあることを知るならば、此の限りある生命の中の一日たりとも空しく過してはならぬといふ覺悟がつかなければならぬ筈である。又凡ての物資に限りがあることを知るならば、驕奢放逸な生活は出來ぬ筈である。斯く自ら省みて清淨なる行ひを續け得る人にして、初めて能く王として四民を教へ導く所の大任を全うし得べきである。王の王たるは徳あるが爲である。自ら其の徳を養はずして四民を幸福ならしむることの出來やう筈はない。されば華嚴經には賢王の

日常に於ける行ひを説いて、

先づ道場に入り賢聖を敬禮して福祐を祈り、祖宗を祠祭して恩徳に報ぜんことを思ひ、人に孝敬を教へて萬方を冥益せんことを思ひ、了りて後に朝に臨みて諸の大臣と王事を理め事を聴く、此の事了りて後に膳を進む。

とある。是れは毎朝の行事である。毎朝政治堂に出て諸大臣と天下の政治を處理する前に、賢聖を禮拜し祖宗を祭祀して心を淨め、淨らかなる心を以て政治堂に臨むのである。是れ實に賢王が王事を敬する所以である。國王一人の心が正しければ天下の民は皆其の慶を受け、國王一人の心が正しくなければ天下の民は皆其の禍を蒙らなければならぬのである。賢王は常に此の事を忘れぬから、毎朝政を聴く前に是れだけの行事を缺かさぬのである。

又一日の政務が終つて後は園林に遊んで勞を慰し氣を養ひ、夜に入つては又法を學び教へを聴くのである。即ち華嚴經の文の續きには、

王殿に論座を敷き、國內の大智慧ある沙門婆羅門を請じ、正法を演説せしめて之を聴き、何ものか善、何ものか惡、何ものか正、何ものか邪、何をか行ふべ

き、何をか止むべきを諮問す。

とある。是れは日常の行事であるが、なほ此の外にも爲すべきことがある。即ち時に宿舊の智臣の高徳にして隠れたるものを集めて國政を詢問し、其の得失を評せしむ。

とある。王は四民の上に立つて之を教へ導くことの責任をもつて居るのであるから、此の如くに自己の徳を養ひ智を磨くことに力を用ゆるのである。眞に國民をして安樂ならしめんとするには唯だ生活の困難を除いてやるだけでなく、是非とも之に教化を與へなければならぬ。たとへ衣食等に別段の不自由がなくても、其の心が煩惱に充されて居れば常に相争ひ相闘うて、少しも平和は得られぬのである。それで前に引いた尼乾子經の文にも「能く法に依りて衆生を攝護して」といつてあるのである。

王は能く徳を修め智を磨き、身を以て衆を率ゐるの覺悟をもたなければならぬ。それでなければ「王」といふ名を冒すことは出来ぬわけである。されば日毎に大智慧ある出家の人を王宮に招いて、佛の正法を説かして之を聽聞するのである。

人自ら意を伏すること能はずして、反りて他人の意を伏せんと欲す。能く自の

意を伏せば人の意伏すべし。(三慧經)

と佛の教へられた通り、人に教へんとする者は先づ自ら修めなければならぬのである。王の威力を以て命令すれば、誰も其の命令に背く者はないけれども、自ら實行し得ぬことを人に命じても人は決して心服するものではない。心服しなければ其の命令は結局行はれぬことになる。王の命が行はれなければ其の國の統一が失はれて、國民は皆其の日を安らかに送ることが出来なくなる。王たる者が能く己を修めて民に臨めば、其の國中の者が皆其の慶を受くると共に、王自身も亦國中の人々に敬愛せられて、其の心はいつも安泰である。

仁を履み慈を行ひ、博く愛して衆を濟へば十一の譽ありて、福常に身に隨ふ。
臥して安く覺めて安く惡夢を見ず。天護る人愛す。(法句經)

とある通りである。斯くて初めて眞に王と稱せらるべきものである。

王はまた一般の政務を總攬し、人民の訴へを決すべき大なる責任がある。勿論王一人の力で萬事を處理することは出来ぬから、王を輔弼すべき良臣を擇まなければならぬ。若し其の人を得なければ政務は澁滯し、また種々の弊害が起つて國中の者が皆其の禍を受けなければならぬ。

ことになる。されば人を知るといふことも王の身に負へる重大なる責任の一といはなければならぬ。此の如き種々なる責任を果すためには常に正しき判断力をもたなければならぬ。事を定むるにも又人を擇むにも、最も必要なものは正しき判断の力である。正しき判断をするために何より大切なのは私心を去ることである。唐の張蘊古の「大寶箴」の中に

衡の如く石の如く物を定むるに限を以てせざれば、物の懸るもの輕重自ら見ゆ。水の如く鏡の如く物に示すに情を以てせざれば、物の鑑るもの妍蚩自ら生ず。

とあるが、秤は少しも私情がないから物の輕重が正しくわかり、水や鏡も全く私情がないから、物の姿の美しいのも醜いのも其の儘に映るのである。此の如くでなければ多くの人の上に立つて之を正しく指導して行くことの出来るものではない。

其の正しき判断を妨げるものは私心である、即ち有らゆる煩惱である。煩惱は正しき思慮分別を昏ますものである。正しい事も自分の氣に入らぬ人のいふことは正しいとは思はれぬ。正しからぬ事も自分に親しい人の主張は尤もなやうに感ぜられる。自分に利益のある事は理を擧げてても實行したいと思ふ。自分の利益にならぬことは理に合つた事でも通したくない。是れ皆

煩惱の致す所である。故に人の上に立つ者は其の煩惱を除くために常に力を用ゐて居なければならぬのである。法華經の普門品に、

眞觀清淨觀、廣大智慧觀

とあるは大に味ふべき語である。清淨とは一切の煩惱を除き盡したる状態をいふので。心が清淨であつてこそ初めて眞實の理を究むることが出来るのである。眞實の理を究め得るが故に天地萬有の眞相も明かになり、人生の眞の意義も自ら明かになる。随つて又人々が種々の煩惱に役せられて煩悶苦悶の中に毎日を送つて居る状態をも有の儘に知ることが出来るので、之に對する哀愍の情も深くならざるを得ぬわけである。深く之を哀愍して、之を救護せんが爲に最も適切なる方法を案じ、常に力を盡さるゝのが即ち佛菩薩の廣大なる慈悲である。智慧なくしては慈悲の作用は生み出されぬ。また慈悲の作用を生み出さなければ智慧を具へたかひは無いわけで、二者は畢竟一と見るべきものである。菩薩は佛の御心を以ていつも己が心とする者であるから、般若經には

菩薩は常に能く方便の勝智を修めて他心を知る。衆生の樂ふ所を知つて病に應じて藥を與へ、悉く病を除かしめ、衆生をして諸佛の法に通達せしむ。

とある。王者たるものも亦此の菩薩の心を以て心としなければならぬのである。王者が常に高德の沙門を其の宮中に聘して佛の正法を聴くといふのは、即ち菩薩道を勵まんが爲に外ならぬのである。

以上は國王と大乘佛教との關係に就て説いたのであるが、前にもいつた通り印度の國王といふのは吾が國の天皇など、比較すべきものではないことを知らなければならぬ。印度は昔から曾て一度も統一されたことのない國で、釋尊の當時に於ては中印度だけでも十國以上の王國が對立して居た。それ等は比較的領土の廣い國のみをいふので、其の他に此等の大國の保護を受けて其の存在を保つて居た所の小國も多くあつた。されば一國の王といつても吾が國の封建時代の諸侯に比すべき程度のものに過ぎぬのである。以上に説き來つた所の國王の心得なるものは、決して今日の吾等に縁の遠いものではない。今日世の中に立つて、幾人でも其の部下に屬する人を指導し教化しなければならぬ責任を有するものは、皆昔の印度の國王と同じ心得で居なければならぬのである。殊に現今の吾が國の如きは國家の健全なる發達を圖るといふ責任が決して一部分の人のみ負はされて居るのでなく、苟くも日本國民である以上は皆其の責任を分擔しなければならぬ時代なのである。されば誰人たりとも其の志のある者は皆自ら惑を去り

智を磨くことに努め、又其の力の及ぶ限りに於て世間の人を導いて、共に意義ある生涯を送り共に國家の發展に貢獻せんことを念としなければならぬのである。

殊に社會萬般の事が皆複雑になつて來ると、一人の力で種々の事は出來ぬやうになるから自然分業といふことが發達する。即ち人々皆其の適する所の業を擇んで之を専門とすることになる。而も其の人々が相集つて國家の發展を助くることになるのであるから、専門の異つて居る人々が皆相扶け相補ふことを忘れてはならぬのである。然るに専門が異つて來ると互ひに同情をもてなくなるのが凡夫の常である。田を耕す人が雨を祈つて居る時に、旅をする人は晴の續くことを祈つて居る。花を種ゆるものは寒氣の成るべく遅く來ることを望んで居るが、炭を賣る者は寒氣の成るべく早く來ることを望んで居る。此の如くに一方の喜ぶ所は一方の悲む所であるといふやうに利害の關係が相反するのであるから、互ひに同情をもつて扶けあひ救ひあふといふ氣にはなかくなれぬものである。此の如くにして協力一致の必要なことは誰も能く知りながら、互ひの心と心とは相背き相遠ざからんとするのである。此の如き世間に處して此の如き混亂の外に立ち、能く人々を覺醒せしめて健全なる氣風を作ることには力を用ゐんとする者は、先づ自ら大乘を學んで、其の本來具有せる所の佛性を開發し長養して行くことに努むるの

が何よりも大切である。「如來藏が有爲法の依持建立である」と勝鬘夫人のいつたのも實に此の意に外ならぬのである。

如何に現代が複雑な時代であつて、人々はその立場のちがひに依つて互ひに争鬪的の氣分になつて居ても、大乘の教へを學んで、佛の御心を以て吾が心とすることを志とするものが、何處までも私心をすて、多くの人に接して居れば、久しい間には必ず其の周圍に自然の感化を與へ、自分と同じやうな氣分の人を少しづつなりとも作り出すことが出来るに違ひないのである。如何なる人にも皆貴い佛性が具はつて居るのであるから、何かの機會さへあれば必ず其の佛性が幾分かづつでも光りを發するやうになる筈である。世の中が如何に險惡になつても、吾等は決して失望してはならぬ。寶積經には優陀近王と舍摩夫人とのことが記してある。此の王には二人の夫人があつて、其の一を舍摩といひ他の一を帝女といつた。舍摩は佛法に歸依してまことに心の正しい人であつたが、帝女は何の教へをも信せず、其の心は奸邪にして特に嫉妬心が強かつた。舍摩は慈悲心も深く一般の人に敬愛せられて居たので、帝女は大に之を妬み、言を巧みにして王に之を讒し、「舍摩は佛法を信ずると稱して、實は佛と非法の事を行つて居るのである」といつた。王は之を聞いて大に怒り、舍摩を殺さうと思つて弓箭を持つて其の室へ

突入した。此の事を急いで舍摩に告げた者があつたけれども、舍摩は少しも驚かず、靜座して慈悲三昧に入つて王の來るを迎へた。慈悲三昧といふのは深く王の分別の足らぬことを哀愍し、王が其の邪念を翻さんことを一心に祈願しつゝ、全く他の事を思はぬのである。さて王は舍摩夫人の室に入ると共に箭を放つて夫人を射たが、其の箭は夫人に中らずして床の上に落ちた。王は慌てゝ次の箭を放つたが、それも夫人に中らず、第三の箭も亦夫人に中らずして空しく床の上に落ちた。茲に於て王は大に驚き「汝は天か龍か、いかにして此の如き不思議の力を有するのであるか」と問うた。夫人は靜かに之に答へて、

我は天に^{てん}あらず龍に^{りゆう}あらず。我はたゞ佛を^{ほとけ}信じ、正法を^{しやうはふ}聽きて五戒^{ごけい}を持てる者のみ。我今王を^{われいまわう}哀愍するが故に慈悲三昧^{じいまい}に入れり。故に王は不善^{ふぜん}の心を^{しやう}生ずと雖も、其の箭は我が慈悲の顔^{かほ}を傷^{きず}くこと能はざるのみ。

といつた。王は之によつて大に覺醒する所あり。夫人と共に佛の所へ行つて一切を懺悔し、此より佛法の熱心なる歸依者であると共に、又熱心なる保護者となつたといふことである。

是れは一種の譬喩譚であるが、眞に慈愛三昧に入つた人は天下に敵なき人なのである。何人も此の人に迫害を加へることは出來ぬ。いかに迫害を加へても、一方が其の迫害に屈せずして

自身の信仰を渝へなければ、其の迫害は結局其の力を失つてしまはなければならぬのである。而して一方の正しい信仰をもち、慈悲の念を以て一切の人に對する者は、自ら之に敵對せる者をも感化して、共に正しい道に入らしむる力をもつて居るのである。要するに是れは佛性、即ち如來藏の偉大なる力の發露したるものに外ならぬものである。

第二には人生の苦を厭ふといふ思想の根柢が如來藏に在るといふことを徹底的に知らなければならぬのである。人生に苦が多いといふことは誰も皆知ることであり又誰も皆語りあつて居ることであるが、然らば如何にして人生の苦を脱すべきかといふことに就ては殆んど凡ての人が更に考慮して居ないやうである。それは彼等が苦といふことの性質を眞に深く考へぬからである。若し眞に苦の苦たる所以を知るならば、如何なる努力をしてなりとも此の苦を脱すべき方法を求めなければならぬ筈である。譬へば道を歩いて居て火の粉が頭の上へ落ちて來た時に之を拂ひ落さぬものは誰もない。それは火が自分の身に害を與へることを能く知つて居るから、彼此と思案する暇もなく、直ちに其の火の粉を拂ひ落すのである。生れて間もない赤子は火の恐ろしいことを知らぬから、火の粉が降つて來ても避けやうともせぬのである。要するに道をも學ばず、教へをも求めぬ人は「苦」といふことの眞の意義がわからぬから、自ら苦の中

に在りながら、其の苦の中を脱出せんと努めぬわけである。佛は之を深く哀愍せられて、法華經方便品の中に、

深く諸の邪見に入りて、苦を以て苦を捨てんと欲す。

といつてある。實際此の一語に凡夫の生活は悉されて居るやうである。一の苦を救はうとして力を盡したことが、直ちに第二の苦を生むのであるから、要するに苦によつて苦を救はうとするに外ならぬものである。

譬へば非常に渴を覺えた時に海の水を飲めば、暫く咽喉が潤つて渴を除き得たやうだけれども、其の鹹味に刺戟されて以前よりも更に甚しく渴を覺ゆるやうになる。凡夫の爲す所は概ね其の類である。苦を除かうとして努力すればするほど、其の苦が加はるのみである。秦の始皇が天下を統一するに當つて、始皇を輔けて最も功のあつたのは李斯である。此の人は元來楚の人で、其の青年時代には郡の小吏となつて至て貧しい生活をして居た。或る日偶然にも米倉に入つて見たところが、倉の中の鼠が毎日米を飽くまで食つて肥え太つて居るのを見て大に感ずる所あり、

人の賢不肖は譬へば鼠の如し。その處る所に在るのみ。

といひ、それより奮發して荀卿の弟子となり帝王の術を學んだが、楚の前途に望みもないことを知つて秦に仕へんことを思ひ立ち、其の師荀卿と別れて秦に向ふに當つて、

詭は卑賤よりも大なるはなく、悲みは窮困よりも甚しきはなし。

といつた。それより秦に重く用ゐられ、始皇が天下を一統するに及んで丞相の位にまで昇つた。随つて其の一家一族は皆富貴を極めた。

然るに始皇が崩じて二世皇帝の立つに及んで、趙高の爲に讒せられ、終に叛を謀る者と斷定せられて死刑に處せられた。其の刑せらるゝに際して、李斯は昔楚國で貧しい郡吏であつた時の方が遙かに安穩であつたことを想ひ起し、其の子に向つて

吾若と復た黃犬を牽き、俱に上蔡の東門を出て狡兔を逐はんと欲するも、豈に得べけんや。

といひ、父子相擁して哭泣したといふことである。李斯は貧賤の最も苦なることを知り、此の苦を脱せんが爲に努力を重ね、一時は榮華を極めたけれども、あまりに其の勢力が盛んであつた爲に終に禍に罹つたのである。趙高がいかにか奸智に長じて居ても、二世皇帝の李斯を信ずることが厚かつたならば、其の讒言は効果がなかつたであらう。李斯が始皇に重用せられたのに

心驕つて専横の事の多かつた爲に、二世皇帝は心に深く之を憤つて居た。そこへ趙高の讒言があつたので終に斯ういふ結果となつたわけである。而も謀叛の大罪であるから、一家一族が盡く死刑に處せられたので、其の死に臨んで昔の生活の平穩無事であつたのが懐かしく思はれたのも無理ではない、併しながら是れは所謂自業自得である。李斯は其の勢力の盛んな時に當つて、随分非義非道なことをして自己の勢力を維持せんことに努めて來たのである。

始皇が天下を一統したことを祝せんが爲に咸陽宮に盛んな宴を催した時に、齊人淳于越が進んで「昔の殷周の代が何れも數百年續いたのは王の子弟を封じて諸侯と爲し、何れも大國を與へて充分の實力を具へしめ、以て王室の輔翼たらしめたからである。將來の爲を思ふなれば、是非とも此の古例に従はなければならぬ」といふことを建議した。始皇も之を道理と思つたと見えて、李斯に命じて此の事を詮議せしめた。然るに李斯は若し王の子弟が大國に封せられて勢力が盛んになれば、自分の勢力が其の爲に牽制せらるゝに至るであらうといふ懸念から、淳于越の説を力を極めて非難し、「古と今とは時勢が全くちがふ。然るに古を尙んで今を議するは學者の通弊である。斯ういふことを許して置けば、今後も民心を動搖せしむるやうな説を立てるものが續々として起るであらう。要するに無用の書を讀んで彼此と議論する者が多いから天

下に累ひの絶え間がないのである。若し天下の書を集めて盡く之を焚き、所謂學者なるものを根絶せしめたならば、天下は至て靜謐になるであらう」と主張した。始皇が此の説に惑はされて普く天下の書を集め、之を焚いたのは史上に有名な事であるが、此の一事だけでも李斯は實に大なる罪を犯したものだといはなければならぬ。

また始皇は會稽より琅琊の地方を巡遊中に崩じたのであるが、その時は李斯も趙高も皆之に従つて居た。其の時に最も人望のあつたのは老将蒙恬である。蒙恬は命を受けて匈奴を討つて大捷を博し、且又其の人物も剛直であつたので、誰も之を畏敬して居た。又始皇の太子扶蘇も賢明の聞えが高かつた。李斯は始皇の亡き後に於て賢明なる太子が王位を嗣ぎ、又之を剛直なる蒙恬が輔佐することになつたならば、自分の勢力を奪はるゝやうにならうと恐るゝの餘りに趙高と圖つて始皇の遺命と偽り、扶蘇と蒙恬とに自殺を命じ、公子胡亥を立て、王としたのが即ち二世皇帝である。此の如くにして自己の勢力を張らうとした李斯の計畫は外れた。此の事によつて趙高が二世皇帝の信用を得、その勢力は李斯を凌ぐに至り、終に李斯は之が爲に讒せられて死ななければならぬことに立到つたのである。彼は幾たびか其の苦を除かんが爲に努力し、終に一家一族の滅亡といふ最大の苦を擇むに至つたものである。始め彼は貧賤を最大の苦

と考へ、此の苦を除かんが爲に努力して兎も角も成功した。その後自分の勢力の發展を妨ぐる恐れのあるもの、現はれ来る毎に、いつも之を大なる苦と爲して、此の苦を除かんが爲に努力し、その最後の努力が自分の讎敵の勢力を盛んにするといふ結果にならうとは全く心附かず、まことに哀れな最期を遂げたのである。要するに釋尊の仰せられた通り、苦を以て苦を除かうとして、其の最後の苦に負けて身を亡ぼしたものである。

李斯のことを語るのがあまりに長きに過ぎたやうであるが、彼の一生は實に凡夫の生活の淺ましさを能く證するものといふべきである。李斯の如くに甚しきに至る者は稀であるが、多くの人は互ひに自己の欲望を充し得ぬことを以て苦と爲し、其の苦を脱せんが爲に種々の計畫をするのであるが、其の欲望を達するの妨げとなる者があれば、之を排撃して飽くまでも自己の望みを遂げやうとする。之によつて種々の争ひを生むのである。又自己の一たび得たる地位とか勢力とかを奪はうとする者が現はれて來ると、力を盡して之を拂ひ退けやうとする。此の如くにして互ひに相争ひ相闘うて、益々多くの苦を作るのである。凡夫は皆小なる李斯であるといふも決して過言ではない。唯だ其の爲す所が李斯の如く甚しきに至らざるが故に、李斯の如く死に處せらるゝこともなく、兎も角も無事に一生を終るのであるが、無事といふのは唯だ外

形だけのことであつて、其の心の中には煩悶苦悶の絶え間はないのである。勿論誰も皆佛性を具へて居るから、時に依れば正しい分別の起ることもあるが、暫くにして又煩惱の爲に蔽はれて其の正しい分別は影を潜めてしまふ。様々に計畫を立て、名利を争ひ勢力を争つて居ながら其の計畫が殆んど實現されないで寂しく死んで行く人を見れば誰でも悼ましくなつて、「慾張つて見ても仕様がなしい」といふ氣になるのであるが、其の時の感じはいつと無しに薄らいで、いつか自分も名利を争ひ勢力を争ふ仲間に入つてしまふのが凡夫の常である。

他人のことは彼此と批評して見るが、自ら省みるといふことは容易に出來にくいものである。其の自ら省みる力を養ふためには、絶えず貴い佛の教へに親しむより外はない。大隈言道の歌に、

餌えにつきていのち失うしなふうろくづづを人ひとより外ほかにおもふなりけり

とあるが、餌を吞まうとして釣り上げられて生命を失ふ魚を見ると、其の無分別なのがいかにも氣の毒に思はれるけれども、それを氣の毒と思つて居る人が、自分で其の魚と同じやうな事をして居るのに氣附かぬのである。此の如くに淺ましい状態を脱出する道は、佛の大乘の教へを學ぶより外に何もないのである。大乘を學ぶことに依つて初めて「苦とは何ぞや」といふこ

とが明かにわかるのである。法華經の譬諭品に凡夫の境界を説いて、

衆生有りて苦の本を知らず、深く苦の因に著して暫くも捨つること能はず。

とあるが、苦の本といひ苦の因といふは、要するに煩惱のことである。凡夫は貧しければ之を苦といひ賤しければ之を苦といひ、人に負ければ之を苦といひ、人に侮らるれば之を苦といふ。要するに苦の因を外界に求めて、而も實は吾が心の中に眞の苦の因のあることを知らぬのである。

煩惱は何處までも増長して底止する所のないものであるから、煩惱に充ちたる心を以て世に立つ人は如何なる境遇に在つても満足はないのである。貧賤なれば人に輕んじ侮らるゝが故に苦がある。富貴なれば妬み惡まるゝが故に苦がある。失敗すれば固より苦が多いのであるが、成功すれば其の成功を妬んで、取つて代らうとする人の多いのが苦になる。何れにしても苦を免れぬ。但し佛法などを深く學ばないでも、世の中の經驗を多く重ねて、所謂世故人情に能く通じた人であれば、成功者にも失敗者にも共に苦があるといふことを知らぬ筈はない。それを知りながら其の苦を脱し得ぬのは、煩惱を除き盡せぬからである。例へば胃の病などに罹つて非常な重態となり、やうやく快方に向つた者は甘い物などを食べることを固く禁じられ

る。自分でも其の慎むべきことは能く心得て居る。併しあまり食べたくなくなると、非常に苦しかつたことは忘れてツイ「少しはよからう」といふ氣になり、禁じられた物を食べて病勢が又逆轉するといふやうな場合が随分ある。凡夫の生活にも之に能く似たことが多いのである。心の根本が改まらぬうちは、苦の除かれるといふことは決してないものである。

自分は先年佛國へ行つた時に、彼の歐洲大戰亂の際に於て最も劇戦のあつたので有名なるヴェルダンの郊外へ行つて見た。其の殆んど見限れぬやうな平野に、何萬とも數へられぬほどの戦死者の墳墓が立並んで居るのを見ると、當時に於ける劇戦の狀が想像されて、實に肌粟立つやうに感じた。自分は道連れとなつた一佛人に向つて「實に恐ろしいことではないか。斯ういふ光景を見ると今後如何なる事があつても戦争といふものは絶対に避けなければならぬといふことを痛感する」といつたが、其の佛人は肩をすくめて「君等は唯だ此の恐ろしく多い墳墓が並んで居るのを見たゞけでも、そんな感じがするのさ。吾々は實際血を流して劇戦をして居る有様を目撃したのだ。實に戦争ほど恐るべきものはない。今後は如何なる犠牲を拂つても、戦争だけは絶対に避けなければならぬ」といつた。自分も實際さうであらうと思つた。斯ういふ感じをもつて居る者は其の一佛人のみでなく、殆んど佛國全體の人が同感であつたに違ひな

い。然るに其の後に於ける佛獨兩國の有様を見ると、其の敵對狀態は日に益々劇烈になつて、或は遠からぬ將來に於て何等かの事件が勃發しはせぬかと危ぶまれるやうな感じもする。要するに戦争の慘禍といふものが如何に強い感じを與へても、其の感じは日を追うて少しづつでも薄らぐものであるから、人々の心が今日の如くに煩惱に充された状態を脱し得ぬ限りは戦争が絶滅するといふことはあり得ぬものであらう。

斯ういふ例が昔から幾度となく繰返されて居るのである。彼のクリミア戦争があまりに慘澹たるものであつた爲に、其の後に於て絶對平和論が大に盛んになつたといふことを自分などは少年時代に習つた西洋史の中で讀んだことがあるが、その後に至つて幾度となく大規模の戦争が世界の各地に於て演せられて居る。何れの國民でも戦争の恐るべきことを知らぬものは無いのであるが、其の國の勢力を擴張しやうといふ欲望が甚しくなり無理をしてなりとも其の欲望を遂げたいといふ念が極端に強くなると、ツイ戦争の慘禍といふことを忘れて、武力に訴へても其の目的を貫かうとするに立到るものである。是れは個人間に於ても、若くは國際間に於ても全く同一である。殊に國際間の競争を緩和するといふことは難事中の難事といふべきである。個人の間にも或は團體の間にも常に競争がある。階級間の争ひもあり、又國際間の争ひも

ある。而して個人間の争ひとか團體間の争ひとかいふものは、それが極端になつて何等かの大なる弊害を生ずることになれば、國家の力によつて之を抑制するとか、或は社會制裁によつて之を緩和せしむるとかいふことが随分出來るのである。獨り國際間の競争のみは之を抑制すべき方法がないのである。それは今日のところ國家以上の強力なる團體はないからである。それで個人の間などでは腕力に訴へて其の競争問題に解決をつけやうといふことは殆んどないけれども、國際の競争のみは動もすれば戦争を惹起し易いのである。此の慘害を除くために唯一の頼りともいふべきは、凡ての人の心を支配すべき力ある宗教の發達することのみであらう。

宗教にもさまざまあるが、大乘佛教は慈悲の貴さを徹底的に教へるものであるから、大乘佛教の精神が眞に凡ての人に理解されて來れば、相争ひ相闘ふことの厭はしさが眞に感じられる時が來るに違ひないのである。物事は相對照して見て其の特色が愈々明かになる。晴れた日の快さと比べて、曇つた日の陰氣なことが殊に強く感じられる。炎天の暑い所を歩いて來て、木の蔭の涼しさが殊に快く感じられる。勝鬘夫人の言に「如來藏なければ苦を厭ひ涅槃を樂求することを得ず」とあるのは實に尤もである。如來藏が充分に其の光りを發することは、唯だ大乘佛教を學ぶに依るべきのみである。されば大乘を學ぶことに依つて、初めて苦の本性を知り得ら

るゝものと解すべきである。小乗の教へでも煩惱に囚はれたる生活の厭ふべきものであることは能く教へられてあるけれども、小乗を學び得たのみでは其の心に大なる悦びは感じられぬ。小乗を學んだのみでは佛の御心は充分にはわからぬのである。然るに大乘に至つては佛の御心をスツカリ打明けられたものであつて、寶積經には、

諸佛如來の正眞正覺所行の道、彼の乘を名けて大乘と爲し、名けて上乘と爲すとある。されば大乘を學ぶと共に佛の御心の貴さが全くわかるのである。而も佛は「一切衆生に皆佛性が具はつて居るから、修行一つでは佛の境界に到達することが必ず出来るものである」といふことを明言して居られるのである。

されば大乘を學んで佛の御心の貴さを深く知り得たものは、此の如き佛の御心と相通する所の貴い佛性が吾等に賦與されて居ることを、先づ以て感謝しずには居られぬのである。それと同時に、此の如き佛性を具へて居ながら全く之を自覺せず、たゞ煩惱に役せられて淺ましい争鬪の生活のみを續けて居るものゝ愚さを痛感するのである。更に進んで考へて見ると佛性と煩惱との相容れぬことは正しく水火の如くである。人々は皆佛性を具へて居るのであるから、此の佛性を遺憾なく發揮し得てこそ眞に生きがひのある生き方が出来る筈である。然るに自ら佛性

を具へて居るといふことに氣附かず、煩惱の生活をして居るのは、人としての本性に背いて居ることであるから、苦の絶えぬといふことは當然の次第である。此處まで考へて來て初めて「人生が苦である」といふことの眞の意義が明かになつたのである。其の本性に背いた生き方をし居るのは、宛も魚が水を離れて地上に居るやうなものである。空を舞ふべき蝶が水中に落ちたやうなものである。苦しまざらんとするも得べからざるものである。多くの人は此處に氣附かぬのであるから、佛が「苦の本を知らず」と仰せられたのである。大乘を學んで佛性が伸びて來るに隨ひ、苦の苦たる所以を明かにし、自ら此の苦を脱し盡すと共に、一切の人々を教へ導いて共に此の苦を脱せしめなければならぬといふ大決心がつく筈である。實に大乘を學んで篤く之を信ずるものは自ら救ふと共に人を救ひ、人を救ふと共に國を救ふものと稱せらるべきである。

以上を以て所謂「顛倒眞實章」を終り、次には「自性清淨章」に入る。此の章に於ては勝鬘夫人の如來藏に關する説明を終り、釋尊は此の説が全く佛意に一致せることを認めらるゝと共に、更に其の意を強めんがために簡單なる説明を加へらるゝのである。是れで勝鬘は説くべきことを説き盡したのであるが、最後に大乘を信ずる者の根本的の心得ともいふべきことを補説

し之を以て本經の正宗分を終ることになるのである。

世尊、如來藏とは是れ法界藏なり、法身藏なり、出世間上々藏なり、自性清淨藏なり。此の自性清淨藏而も客塵煩惱と上煩惱とに染せらる。不思議の如來の境界なり。何を以ての故に。刹那の善心は煩惱の所染にあらず、刹那の不善心も亦煩惱の所染にあらず。煩惱は心に觸れず、心は煩惱に觸れず。云何ぞ觸れざる。法而も能く心を染することを得んや。世尊、然も煩惱あり、煩惱の心を染することあり。自性清淨心にして染あること、了知すべきこと難し。唯だ佛世尊のみ實眼と實智とをもて法の根本と爲り、通達の法と爲り、正法の依と爲り實の如くに知見したまふ。

此の「自性清淨章」の前半は勝鬘夫人の語であつて、後半は釋尊の語であるが、以上は其の前半で、即ち勝鬘夫人の説く所の結尾なのである。今までに勝鬘夫人は其の信ずる所に就て順を追つて語つて來た。先づ第一には所謂「十大受」に就て語つた。十大受は菩薩行の要領を説いたものとも稱すべきである。即ち大乘佛敎を信ずる者は如何なる心を以て世に立ち、世のた

め人のために如何なる努力を爲すべきかを概括して説いたものである。之に續いて説かれたのは「三大誓願」である。三大誓願は十大受を實行するに就ての根本精神を擧げたので、即ち菩薩行の根柢を爲す所の信念である。譬へば十大受は樹木の幹や枝の如きもの、三大誓願は其の根の如きものである。根がなければ幹も枝も榮えぬが、幹も枝もなければ根のあるかひは無いので、此の兩者は固より不離の關係に在るものである。三大誓願は菩薩の有する根本の信念であるが、菩薩たる者が如何にして此の如き信念を有し得るかといへば、佛の大乘の敎へを學んだからである。されば佛がなければ菩薩はないわけである。既に菩薩行を説いた以上は、更に進んで佛に就て説かなければならぬのである。

勝鬘夫人はそれ故に三大誓願に續いて「攝受正法」に就て説いた。正法とは佛の正法である。佛の正法とは即ち大乘である。大乘を學ぶことに依つてのみ佛を知り得るのである。佛を知り得たものは佛と一致し得るのである。菩薩行を勵む目的は實に佛と一致することである。菩薩は自ら覺ると共に他を覺らしむることに力を盡すものであるから、自ら佛と一致すると共に、一切の人々を導いて共に佛と一致せしむることに努むるのである。一切の人が皆佛の御心を以て吾が心とするやうになれば、世間に於ける一切の煩累は盡く皆解決せらるべきである。さ

れば十大受といふのも歸する所は攝受正法に外ならぬわけである。但し佛教の中にも大乘あり小乘あり、決して一様ではないから、大乘のみが佛の正法であると斷定するに就ては、小乗が何の爲に説かれたのであるかといふことをも明かにしなければならぬ。小乗も亦佛の説かれたものである。佛が無用のことを説かれる筈はない。小乗は大乘に入るべき準備的の教へとして意義を有するもので、此の意義を明かにしさえすれば、小乗を學んだといふことが決して無用ではないのである。此の點に就ても勝鬘夫人の説明はまことに徹底的である。

さて最後の問題は此の大乘の教へなるものが果して一切の人に信せらるべきものであるか否かといふことである。大乘に於て説かるゝ所は凡夫の生活とはあまりに隔つて居る。若し是れが一切の人に信じられぬやうなものであるならば、佛が世に出て法を説かれた目的は達せられずして終らなければならぬ。佛は一切衆生を悉く救護せんとして世に出られたのである。然るに或る一部分の特に機根の良い人々のみが菩薩行を勵むやうになつても、其の他の大多數の人が大乘の教へなどを信すべき見込みがないとすれば、佛の世に出られた目的は終に達せられぬことになる。此の疑問を解決せんがために説かれたのが「如來藏章」以下である。苟くも人として生れた者は皆如來藏、即ち佛性を具へて生れたのであるから、何人も佛の救護に漏るゝ筈

はないのである。勿論其の人々の機根の差があり、又佛法に縁を結ぶべき機會に早くあふ人と容易にあはれぬ人とがあるから、遅速の差のあるのは已むを得ぬけれども、其の本來具有せる佛性がいつ迄も開發せられずして終るといふことは決してない。佛は此の事を能く見極めて居らるゝから、如何なる困苦に値つても更に屈する所なく、五十年間の化導を續けられたのである。此の五十年には種々の迫害があつたが、其の中の大難とも稱すべきものが九回もあつたので、之を釋尊の九横難といふのである。斯る困苦を忍ばれたのは、一切衆生を救護すること以外には何事も考へられぬ佛の大慈大悲の御心に出ることは勿論であるが、たゞ大慈大悲といふばかりではない、佛は其の努力の決して空に歸せぬといふ確信を有せられたので、如何なる困苦にも屈せられなかつたものと思はれる。

梵網經は大乘戒を説かれたものであるが、釋尊は自ら此の大乘戒を説いて諸弟子に授けられ諸弟子が又此の大乘戒を普く一切の人の爲に説くべきことを命せられた。

衆生佛戒を受けぬれば即ち諸佛の位に入る。位大覺に同じ已りて眞に是れ諸佛の子なり。

とあるが、其の「衆生」といふのは勿論一切の人を指していはれたので、特に優れた機根をも

つた人のことではない。大覺とは即ち佛であるが、一切の人は皆佛と同じものになれるといふのである。また

若し佛戒を受けん者は、國王王子百官宰相、比丘比丘尼、十八梵天六欲天子、庶民黃門姪男姪女、奴婢八部鬼神金剛神畜生、乃至變化人に至るまでも但だ法師の語を解するものは盡く戒を受得す。皆第一清淨者と名くるなり。

とある。國王とか王子とかいふ貴い地位に在る人々でも、乃至は一般の庶民でも、或は人に媚を賣つて生活をして居るやうな最も賤しい男女でも、佛に歸依するといふ上に於ては更に隔てがないのである。獨り人間界の者のみならず、天上界の者でも乃至は畜生界の者でも隔てはない。苟くも法師の語を解し得るものならば佛戒を受けて、第一清淨の者となることを得るのである。第一清淨とは即ち一切の煩惱を離れ切つたことである。斯くして更に進んで已まなければ、やがては佛の境界にも到達し得らるべきである、釋尊は更に佛戒を持つことの功德を説かれて、

此は是れ佛の行處、聖主の稱嘆したまふ所なり。我已に隨順して説く、福德無

量なり。廻して以て衆生に施し、共に一切智に向はん。

とあるが、此の衆生といふのも一切の人を指して居らるのである。一切智といふのは佛の具へらるゝ智慧である。一切の人が皆共に、智者も愚者も終には佛と同じ智慧を具へ得るやうになれることを釋尊は認められたのである。

また法華經の勸持品には、諸菩薩が末法の世に出て、有らゆる艱苦を忍んで此の法華經を弘むべきことを誓ひ、佛が之を御認めになることを願つたことが出て居るが、其等の諸菩薩の語には、

後の惡世の衆生は善根轉た少くして増上慢多く、利供養を貪り不善根を増し、解脱を遠離せん。教化す可きこと難しと雖も、我等當に大忍力を起して此經を讀誦し持説書寫し、種々に供養して身命を惜まざるべし。

とある。是れ佛の大慈大悲に感激して、自ら其の身を此の法華經の弘通のために捧げやうといふ決心をしたものである。但し是れだけの決心をするのには、其の努力が決して空に歸することはないといふ確信があつたからである。此の勸持品の前にあるのが提婆品であるが、提婆品

の次に至つて諸菩薩が斯る誓ひを立てたのは、まことに其の謂ありといふべきである。提婆品に於ては提婆達多の授記があり、また龍女の成佛といふことがある。前者は「悪人成佛」の範といはれ、後者は「女人成佛」の範といはれて居る。提婆は自ら一派を開いて釋尊に對抗し、數十年の間釋尊及び佛弟子等に對して有らゆる迫害を加へたものであるが、釋尊は決して之を怨まらざることなく、此の如き法敵があつたので自分達は始終少しの懈怠もなく、法を弘むるために力を盡すことが出来たのであるといふので、之を善知識と稱せられ、むかし檀王が阿私仙人に依つて嚴しい鍛鍊を與へられたのに比べて、

等正覺を成じて廣く衆生を度すること、皆提婆達多が善知識に因るが故なり。と仰せられた。なほ之に續いて

諸の四衆に告ぐ、提婆達多は却後無量劫を過ぎて當に成佛することを得べし。と明言せられたのである。

次に龍女は文殊師利菩薩によつて法華經を聽き、佛と成ることを得たのであるが、文殊は龍女を「智慧利根」と稱讚し、

功德具足して、心に念ひ口に演ぶること微妙廣大なり。慈悲仁讓志意和雅にして能く菩提に至れり。

といつたが、智積菩薩等は容易に之を信じなかつた。大乘佛教の根本精神からいへば、男女の間に優劣の別を立つべきものではないので、男女共に所謂菩薩行を積んで怠らなければ、共に皆佛の境界に到達し得らるべきものである。現に此の經を説いて居る勝鬘夫人なども、其のいふ所が盡く佛の御心と一致して居ると認められ、未來に於て佛と成ることをも許されたのである。併しながら佛教の起る以前に於ては、一般に女人といふものは男子よりも劣つて居るものと考へられて居た。又女人も概しては自ら輕んじ自ら侮つて、男子に比して修養に力を用ゐることも足りなかつたのであるから、愈々以て男女の距離が甚だしくなつた。佛教が起つてからも其の方便の教へに於ては、舊くからの習はしに従つて女人は男子に及ばぬものとして取扱はれて居たのである。それで此の提婆品に於ても舍利弗が龍女に向つて、

汝久しからずして無上道を得たりと謂へり。是の事信じ難し。所以は何ん。女身は垢穢にして是れ法器にあらず、云何ぞ能く無上菩提を得ん。

といつて居る。然るに此の龍女は成佛することを得て、一切衆生の爲に法を説いたのである。之を見て娑婆世界の一切の者が皆大に喜んだとある。即ち提婆品の本文には

爾時に娑婆世界の菩薩聲聞、天龍八部、人と非人と皆遙かに彼の龍女の成佛して普く時の會の人天の爲に法を説くを見て、心大に歡喜し、悉く遙かに敬禮す。

とある。何故に娑婆世界の者が皆悉く歡喜したかといへば、今迄成佛し得られぬものと定まつて居た女人が成佛したことを確かに見たからである。前には提婆達多の如き惡人でも後に至つて必ず成佛し得べきことを知つた。それに續いて罪障の深いものと定められて居た女人も亦成佛すべきことを知つたのであるから、大に歡喜したのも不思議ではない。即ち何人と雖も佛に歸依し、大乘の教へを學んで怠らなければ皆成佛し得べきものであることを知つて、各自の前途に大なる希望を認めたから、歡喜せざるを得ぬのである。

此等の例に依つて見ても、佛が何を目的として世に出て法を説かれたのであるかといふことは明かである。吾等は佛恩の洪大無邊なのに對して心から感謝しなければならぬ。但し佛の教へられた所が如何に貴いものであつても、吾等に其の貴い教へを辨へる力がなければ、佛の切角の努力は無意味のものになつてしまふのであるが、吾等には皆佛性が具はつて居るから、學

んで怠らなければ、佛の説かれたる深理を辨へ知ることが出来るのである。されば吾等は斯る貴い佛性を具へて生れたことに就て深く感謝しなければならぬわけである。併し多くの人は佛性を具へて居ながら、其の佛性を具へて居ることに氣附かずに居る。首楞嚴經の中には此の事を指摘して、

倉に寶を藏して自ら之を知らず、馳走して食を求むるが如し。

とあるが實際其の通りである。此の倉の中の寶を吾等に示されたのも亦佛である。佛は吾等が皆貴い佛性を具へて居ることを教へられ、また此の佛性を充分に發揮して行くべき道を教へられたのである。若し佛の教へがなかつたならば、吾等は切角貴い佛性をもつて居ながら、いつまでも之を知らずに居たであらう。たとへ佛性を具へて居ても之を自覺せず、此の佛性を發揮すべき道を求めなければ、佛性のないのと同じことである。今此の經に於て種々の教へが説かれたる最後に於て、此の佛性即ち如來藏に就て説かれてあるのは、まことに意義深いことである。之によつて今まで説かれた所が皆シツカリとした根柢をもつことになるわけである。

○如來藏とは是れ法界藏 法界とは即ち天地萬有のことである。何人でも眼がある以上は萬有の形を見ることは出来る。耳がある以上は有らゆるものゝ聲を聞くことは出来る。併し天地萬

有の中を一貫して永恒不變の理の存在することを知るのは、眼の力や耳の力の能くする所ではない。それは如來藏の力が充分に發揮せられて後でなければならぬ。其の法界の實相を知る力が如來藏に具はつて居るから、之を法界藏といふのである。○法身藏 法身とは即ち佛の法身のことである。洪大なる智慧と無邊の慈悲とを具へられたる佛の本性のことである。如來藏から凡ての煩惱が除き盡された時に、佛となるのであるから、如來藏は佛と成るべき性質を其の中に藏するものといふ意味で法身藏といふのである。○出世間上々藏 世間の一切の煩惱を超越して、而も世間の煩惱に役せられて居る人々を救護すべき力を具へて居るものが即ち佛である。佛と成るのは如來藏が本なのであるから、出世間上々の佛身が此の如來藏から出て來るのだといふのである。○自性清淨藏 如來藏は本來有らゆる煩惱を超越すべき力を具へて居るから自性清淨といふのである。此の本性を完全に發揮せんがために大乘を學ぶのである。○客塵煩惱と上煩惱とに染せらる 客塵煩惱と上煩惱とのことは前の説明に委しくある通りである。此の二種の煩惱の本となるものが即ち無明である。吾等は皆如來藏を具へて居ながら種々の煩惱の爲に妨げられて、如來藏の作用が殆んど止まつて居るのである。それは宛も白いものが赤とか黒とかいふ色に染まつて居るやうなものである。○不思議の如來の境界 此の如來藏より

して如來の法身が出たのであるが、是れは吾等より考へれば唯だ不思議といふより外はない。如來藏は誰にも具はつて居ながら、種々の煩惱の染する所となつて居るために、なか／＼如來の境界には到達し得られぬのである。然るに一切の煩惱を離れ盡して、如來の法身を得られたる例へば釋尊の如き方があるといふことは不思議といふべきのみである。而も釋尊は吾等が皆共に斯る不思議なる境界に到達し得らるべきものであると明言して居らるゝのである。○刹那の善心は煩惱の所染にあらず 吾等の心は外界からの種々の刺戟に應じて動くのであるが、唯だ刹那の間のみ動いても善心も不善心も起らぬのである。其の刺戟が續いて、吾等の心が種々に動いて居るうちに種々の煩惱も起つて來る。また其の煩惱を制して行かうといふ努力も生じて來るのである。斯くして善心と不善心とが分れて來るから、其の善心を長養し、不善心を絶滅せしむるために教法に依る必要が生ずるわけである。○刹那の不善心 是れも同様で、心の動く刹那には不善心と稱すべきほどのものは起らぬが、久しい間に種々の刺戟が續いて來るので、種々の不善心が起つて來るのである。○煩惱は心に觸れず 煩惱がいかにも多く起つても吾等の本心、即ち佛性を滅することは出來ぬ。佛性は暫く潛んで居るのみで、吾等が佛法を學ぶと共に漸く其の光りを發して來るのである。○心は煩惱に觸れず 吾等の本心は煩惱の影響を

受けて其の性質を改むるものではない。たゞ暫く潜んで居るばかりであつて、其の本來の性質には少しも變りはない。此のことを煩惱に觸れぬといふのである。○法而も能く心を染することを得んや 法といふのは一切の事物のことである。即ち吾等の身を圍んで、吾等に種々の刺戟を與へて居るところの一切の事物である。それは何れも吾等に種々の刺戟を與へるから、其の刺戟によつて吾等の心に種々の煩惱も起るのである。併しながら吾等の本心は之が爲に少しも變化を受くるものではない。譬へば雲は月を蔽ふことは出来るけれども、月その物に何等の變化を與ふることも出来ぬ。されば雲が散ると共に月は前と同じやうに清き光りを放つて地上の一切の物を照すのである。吾等の本心と外界との關係も亦此の如きものである。○煩惱の心を染することあり 吾等の本心は煩惱に染せられぬ筈であるけれども、煩惱が盛んである時には、本心の作用といふものは少しも顯はれぬから、矢張り煩惱の爲に制せられて居るものゝ如くに見えるのである。此の本心が如何に煩惱に蔽はれて居ても、少しも其の性質を變へぬものであるといふことは、佛のみの見極められたる所である。○了知すべきこと難し 斯ういふ深いことは凡夫には全くわからぬ。又佛法を學んだ者でも此の事を根柢から正しく知るのは容易ではない。それに就ては次に至つて釋尊が改めて説明して、吾等の心得方を教へて居らるゝの

である。○法の根本となり 此處に法といふのは即ち佛法のことである。佛法は佛の智慧を以て照見せられたる所を説かれたものであるから、永く一切の人を救護すべき力がある中に具はつて居るのである。○通達の法 通達とは一切事物の實相に通ずることである。通達の法とは即ち絶對の教へであつて、千萬年を経ても變ることのないものである。斯る教へを與へらるゝことは唯だ佛の御力のみの能くする所なのである。○正法の依となる 佛の全智を以て照見せられたる所を説かるゝが故に、其の教へが正しいのである。正法の基礎たるものは即ち佛智である。○實の如く知見 佛の智慧を稱して正徧知といふは、實の如くに一切を知見せらるゝからである。

勝鬘夫人の説く所は之を以て終結となるのであるが、此の終結が佛を讚歎する所の語であることは特に注意すべきである。此の經の劈頭に勝鬘夫人の父母が其の女に書を與へて、佛の無量の功德を讚歎したとある。而して勝鬘が父母の教へを受けて非常に喜んだ有様を敘して、

書を得て歡喜し頂受し讀誦し受持し、希有の心を生じ。

といつてある。此の如くに佛に歸依する念が篤かつたので、其の説く所が全く佛の御心と一致するやうにもなつたのである。されば佛は勝鬘が佛の功德を言を極めて讚歎するのを聽かれて

大に之を嘉せられ、

汝如來の眞實の功德を歎ず。此の善根を以て當に無量阿僧祇劫に於て天人の中に於て自在王と爲るべし。

と仰せられ、更に重ねて

當に復た無量阿僧祇劫の佛を供養し、二萬阿僧祇劫を過ぎて當に作佛することを得て、普光如來應正徧知と號すべし。

と授記せられたのである。佛の眞實の功德を知るものは、其の心が佛と通ひあつて居るのであるから、次第に菩薩行を重ねて、結局は佛の境界に到達することも出来るわけである。絶対に佛に歸依するといふ心があつて、初めて佛の説きたまへる教への眞實の意義が徹底的にわかるのである。勿論佛の説かれた所は悉く皆其の洪大なる智慧よりして送り出たものであるから、たとへ其の一句一偈の一應の意義だけを知つて、深いことは未だわからぬ者でも、或る程度までの利益は得らるゝに違ひない。譬へば一室の中で非常に良い香を焚いて居れば、襖や障子を幾重が隔てた所までも其の香氣が傳はつて行くやうなものである。併しながら其の室に入つて直接に其の香を聞いてこそ、眞に名香の名香たることがわかるのである。佛法を學ぶのもそれ

と同様で、眞に佛の功德が貴く感せられて、之を讚歎しずには居られぬといふまでにならなければ、佛法を學んだかひは無いのである。其の爲には自分の心が純眞清淨で、自分の小さい智慧分別や知識などを些かなりとも恃むことなく、たゞ偏へに佛の教への眞實の意義を知りたいとのみ念じて居るのでなければならぬ。唯だ多くの經論を讀み、多くの學者の説を涉獵して見聞を擴めさへすれば、それで「佛とは何ぞや」といふことが、解し得らるゝと思ふならば、それは非常なる誤りである。法華經の壽量品には、如何なる者が眞に佛を見たてまつることを得るものであるかを説かれて、

衆生既に信伏し、質直にして意柔軟に、一心に佛を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜まず。時に我及び衆僧俱に靈鷲山に出づ。

とある。佛が靈鷲山に出られて、吾等が其の御姿を拜し得るといふのは、即ち吾等の心と佛の御心と通ひあふやうになることをいふのであるが、さうなるのには、吾等の心が質直柔軟でなければならぬ。即ち吾等は一切自己の知識とか經驗とか乃至は學問とかいふものを持つことなく、唯だ一心に佛の御本意を知りたい、佛の御心と一致するやうな行ひがしたいのみ念願して至心を以て佛の教へを學ぶのである。斯くして努めて已まなければ、必ずしも多くの經論を讀

むとか諸家の説を涉獵するとかいふことをせずとも、佛の御心の在る所がわかるやうになるのである。佛の御心の在る所がわかれば、感激せずには居られず、讚歎せずには居られぬわけである。信解品に於て迦葉等は佛恩の洪大無邊なるを、言を極めて稱へて

無量億劫にも誰か能く報ずる者あらん。手足をもて供給し、頭頂をもて禮敬し、一切をもて供養すとも皆報ずること能はず。

といったが、眞に能く佛を知るものは斯く感せずには居られぬであらう。

斯うなれば佛の教へられた所を是非實行しなければならぬといふ決心もつくわけである。佛の教へられた所を實行して多くの功德を積むに随つて一步より一步と佛の境界に近づくことが出来るのであるから、努めて怠らなければ必ず佛智を具ふるやうにもなれるに違ひない。それで彼の迦葉等の人々も授記せられたのである。勝鬘夫人が授記せられたのも亦同じ理由である前にもいつた通り授記には必ず條件がついて居るのである。唯だ「汝は後に至つて佛に成るぞ」といふのではない。「今の心を持ち續けて、なほ多くの功德を積めば、後に至つて佛に成る」といふことを認めらるゝのである。例へば迦葉に對する授記は法華經の授記品にあるが、其の授記の語には

我が此の弟子摩訶迦葉、未來世に於て當に三百萬億の諸佛世尊を奉觀して、供養恭敬尊重讚歎し、廣く諸佛の無量の大法を宣ることを得べし。最後身に於て佛と成ることを得ん。

とある。其の他の諸大弟子の授記にも皆それ／＼に、成佛を得るまでに力を盡すべき事が示されてある。勝鬘夫人の授記にも、前にいつた通り條件がつけられてある。されば授記といふことは非常に重大なる責任を負はされたことなのである。授記された者は決して「まづ安心である」と思ふべきではない。「サア大に奮發しなければならぬ」と思はなければならぬのである。勝鬘が十大受を説いたのも之が爲であつた。即ち自分が今より菩薩行を勵んで成佛を期するに就て、特に力を用ひんとすることを十ヶ條に分けて説いたのである。それに續いて種々の事が説かれてあるけれども、佛を知るといふことが一切の修行の根柢でなければならぬのであるから、最後に至つて佛智の絶對であることを讚歎したのである。斯くして勝鬘の説いた所は首尾相應じて、極めて貴い教訓として吾等に遺さるゝのである。

其の佛の法身は如來藏の煩惱を離れ盡したものであることは前から段々に説き來つた所であるが、如來藏が此の段に於て説明されてある中に「自性清淨藏」とあるのは「自性は清淨であ

る』といふので、更に言ひ換へて見れば、「自性は清淨であるが煩惱に纏はれて居る」といふ意なのである。前に譬へていつた、月が雲に蔽はれて居るやうな有様なのである。雲がいかにも重つても月その物には何の變りもないけれども、兎に角雲に遮られて居ては、月の物を照す働きは出来ぬのであるから、其の雲を拂ふために力を用ゐなければならぬのである。吾等が佛法を學ぶのは其の爲である。前にいつた檀王が阿私仙人に事へて法を學んだ時のことを、提婆品には

普く諸の衆生の爲に大法を勤求す。

とある。衆生を救ふのには自分が勝れたる智慧を具へて居なければならぬ。それには多くの努力を積まなければならぬ。即ち「勤求する」ことが必要なのである。大法とは即ち大乘である。大乘を學ぶことによつて、初めて一切の煩惱が除かるべきことは、前段から勝鬘夫人の委しく説き來つた通りである。斯くして努力を積むこと久しきに及んで、煩惱が次第に除かれて行けば、自性清淨なる如來藏が其の光りを發して、一切衆生を救ふべき作用も具はるのである。それは雲が霽れて月の光りが地上を明かに照すやうなものである。

また此の如來藏を稱して出世間上々乗といふのは、此の如來藏より發する力によつて全く世俗の生活を超越し、而も世俗の人を教へ導くべき大なる智慧が具備するやうになれるからであ

る。「出世間」といふのにも程度がある。出といふのは即ち超越することであるが、單に世間を離れて居るのも超越には違ひない。併し世間を離れて而も世間の凡ての人を包容することの出来るものは、一段上の超越といふべきである。それが即ち「出世間上々」である。世間の人々は名利の念に驅られ、地位を求め貨財を求めて相争つて居る。争つて敗れたものは世間より侮られ賤しまれて苦しみ悩むのであるが、争つて勝つたものも決して安穩ではない。其の周圍は争ひに敗れたものが充滿して居て、羨みと妬みの眼を以て其の勝つた者を注視し、其の失脚を祈つて居るから、勝つた者には又種々の悩みがあるのである。此の如くにして毎日を送つて、其の一生の終りに至つて「何をして一生を送つたのであらうか」と振り返つて見れば、其の一生の全く無意義であつたことに氣附かざるを得ぬわけである。斯る生活の無意味であることを覺つて、全く斯る世俗の人々より超越し、佛の小乗の教へによつて自ら身を安んじ心を安んずべき道を求め得たものが、所謂聲聞とか緣覺とかいふ中に屬する人々である。是れも確かに或る程度の超越には相違ない。

併しながら是は未だ眞の超越とはいはれぬものである。此の程度の人々は世俗の人を輕んじて自ら高しとするの念を脱し得ぬのである。譬へば高い山の頂に登つたものが遠く其の麓に居

る人達を見下して、自分は彼等よりも遙かに高い所に居るといふことに得意を感じるやうなものである。世俗を超越したことに得意を感じて居るのは、即ち世俗の人々と自己とを比較して其の高下優劣を争ふ念を脱し得ぬのである。されば世俗を離れたといひながら、世俗になほ其の心が惹かれて居るものであつて、眞の超越とはいはれぬのである。然るに彼の大空にある日とか月とか雲とかいふものを見ると、是れこそ眞に大地の上に超越して居るものといふべきである。日月は高く大地の上に在つて、而も其の光りを以て普く大地の上を照し、その大地の上の有らゆる物に對して何も求むる所はない。雲もまた大地を超越して天上に在りながら、其中より出すところの雨を以て普く地上の物を潤はすのである。此の如きが眞の超越で、即ち「出世間上々」なるものといふべきであらう。前にも引用したる老子の言に

生じて有せず、爲して恃まず、長じて宰せず、是を玄德といふ。

とあるのは此等の事をいふのであらう。彼に與へても彼より取らうとはせぬ、彼の爲に力となつても彼と争はうとはせぬのである。佛の一切衆生に對せらるゝは、いつも此の如くであるが所謂菩薩道を勵んで其の智も進み、其の徳も高くなつた人は皆此の如くである。維摩經の佛國品に、長者子寶積が偈を説いて釋尊を頌した中に

世間に著せざることを蓮華の如く、常に善く空寂行に入りたまへり。

とある。空寂行とは即ち世間を超越したることであるが、それを蓮華に譬へてある。蓮は其の根を泥の中に托して居るが、其の花は少しも泥に染まないので、而も淨き香を放つて其の香を周圍の物にまで傳へるのである。佛も亦其の通りであつて、少しも世間の人を隔てず常に世間の人の中に混じて住みながら、其の心は全く世間の外に超越し、而も常に貴き教へを説いて世間の人を化導せらるゝのである。

又同じ維摩經の中に維摩居士の平生の行ひに就て説かれてある所を見ると、殆んど佛と相並ぶべきほどの徳を具へた人と思はれるが、此の人も亦世間の人と相混じて共に住み、其の徳を以て自然に周圍の人々を感化して行つたやうである。眞に大乘を學ぶ者の共に範として仰ぐべき人と思はれる。即ち

久しく佛道に於て心已に純淑にして大乘を決定す。

とあるから、能く大乘の教へを究めて、其の心は全く佛の御心と一致するまでになつて居たことが想像される。其の平生の行ひに關して種々の事が擧げられてある中に、

白衣たりと雖も沙門の清淨律行を奉持し、居家に處ると雖も三界に著せず。

とあるに依つて其の自ら守る所の極めて堅固であつたことが知られる。また

若し博奕の戲處に至つても趣ち以て人を度す。

とあり、或はまた

諸の四衢に遊びて衆人を饒益す。

とあり、或はまた

諸の學堂に入りて童蒙を誘開す。

とあり、更にまた

諸の嬉舎に入りて欲の過を示し、諸の酒肆に入りて能く其の志を立てしむ。

とあるに依つて、一切の人を教化するために如何に其の力を用ゐて居たかを知り得べきである。此等の佛菩薩の行ひこそは眞に「出世間上々」と稱せらるべきものと思はれる。各自の具有せる佛性、即ち如來藏が充分に開發せられて來れば此の如き境界に到達し得らるべきものである。

斯くも貴い如來藏を各自に皆具へて居ながら、容易に佛菩薩の境界に到れぬのは煩惱に妨げらるゝのである。何故に煩惱が起つて來るのかといへば、要するに吾等がたゞ如來藏を具へて

居るといふばかりで、此の如來藏を開發し長養するために充分の修行を積まぬうちに、外界からの種々の刺戟が集つて來るからである。譬へば非常に美しい花を開くべき草の種が播かれてその種から芽が出て、之に淨き水をそそぎ、又之に適當なる肥料を與へ又暖き日の光りに當てるといふやうな努力が足らぬと、切角芽が生えても其の芽に勢力がないから健全には伸びぬのである。其の芽が充分に伸びぬうちに、其の周圍にある種々の雜草が揃つてズン／＼と伸びて來ると、其等の勢力に壓倒されて、草花の苗は益々弱るばかりであるから、いつ迄經つても美しい花を開くべき見込みも立たぬ。それと全く同じことであつて、吾等の具有する如來藏は至つて貴いものであるけれども、美しい花を開くべき草の苗にすぎぬ。之を養ひ育て、美しい花を咲かせるまでには種々の努力が必要である。その努力を怠つて居るうちに外界から絶えず種々の刺戟が來れば、雜草のやうな煩惱がいくらでも伸びて來て妨げをするから、折角具有して居る如來藏はいつ迄も其の光りを發せぬのである。併し、いかに雜草が盛んになつても、一方の草花が雜草に變つてしまふことはない。如來藏も其の如くであつて、いかに煩惱に妨げられて居ても、其の如來藏たる本性を失ふことは無いのである。前に引いた大集經の文に、

一切衆生の心性は本淨し、煩惱の諸結も染著すること能はず。

とあるのは即ち此の事をいつて居るのである。

此の煩惱を除き盡して、如來藏の充分に發揮せらるべき途を立つることが最も肝要であるがさういふ途を立つることは、有らゆる煩惱の起つて來るさまを委しく見分け得た人でなければ到底出來ぬのである。それは病の性質のわからぬ人が此の病を除くべき藥を調劑することの出來ぬのと同様である。然るに世間は極まりなく複雑であり、其の刺戟も種々様々であるから、吾等の心の中に起つて來る煩惱を一々に辨知することは、非常に勝れたる智慧を具へた人でなければ到底出來ぬ。それであるから「了知すべきこと難し」といつてあるのである。佛は之を一々に辨知して、限りなき煩惱を除くべき途を少しも誤りなく吾等に示さるので、吾等は唯だ佛に歸依することのみに依つて、有らゆる煩惱を除くことが出來るのである。無量義經の説法品に、釋尊は自ら佛智の如何に力あるものなるかを説かれて

佛眼を以て一切の諸法を觀ずるに宣説すべからず。所以は何ん。諸の衆生の性欲不同なることを知れり。性欲不同なれば種々に法を説きにき。

とあるが、吾等は斯る洪大なる智慧を具へられたる佛に歸依し、佛の命じたまへる通りに所謂菩薩行を勵んで、吾等の具有せる如來藏を開發し長養するやうに努むるより外はないのである

勝鬘婦人が佛を讚歎するところの語を以て、其の所説を終つたのはまことに謂あることである。

勝鬘夫人是の難解の法を説きて佛に問ひたてまつる時、佛即ち隨喜したまひ、是の如し是の如し。自性清淨の心にして而も染汚あることは了知すべきこと難し。二法ありて了知すべきこと難し。謂く自性清淨心は了知すべきこと難し。彼の心の煩惱の爲に染せらるゝことも亦了知すべきこと難し。是の如きの二法、汝及び大法を成就せる菩薩摩訶薩のみ乃ち能く聽受す。諸餘の聲聞は唯だ佛語を信ず。若し我が弟子、隨信、信増上の者、明信に依り已りて法智に隨順するものは、而も究竟を得たり。法智に隨順するとは、根と意解と境界とを觀察し、施設し、業報を觀察し、阿羅漢の眠を觀察し、心自在の樂、禪定の樂を觀察し、阿羅漢と辟支佛と大力の菩薩との聖自在通を觀察するなり。此の五種の巧便の觀成就して、我が滅後の未來世の中に於て、若し我が弟子の隨信信増上のもの、明信に依つて法智に隨順するものは、自性清淨心彼の煩惱の爲に染汚せられて、而も究竟することを得ん、是の究竟は大乘の道に入るの因なり。如來を信ずる

者は是の如きの大利益ありて、深義を謗せず。

勝鬘夫人の説く所が已に終つたので、釋尊は其の能く佛意に合せることを認めて「是の如し是の如し」と稱讚せられたのである。勝鬘はまだ妙齡の一婦人で、且又佛法を學ぶことも久しからぬ身でありながら、此處までになつたといふのは全く其の佛を信するの念の厚かつた爲である。如何に博く學び多く聞いても、信する力が足りなければ決して覺り得るものではない。大莊嚴經には

一切の諸の功德は信を以て使命と爲す、諸の寶の中に於て信を最第一と爲す。

とある。梵網經の中には

一切の行は信を以て首を爲す。衆徳の根本なり。

とある。また華嚴經には

信を道の元と爲す、功德の母なり。一切の諸の善法を長養す。

とある。また華嚴經に

信は垢濁の心なし、清淨にして憍慢を滅除す。恭敬の本なり。亦法藏第一の財と爲す。清淨の手と爲りて衆行を受く。信は能く惠施して心に惜むことなし。

信は能く歡喜して佛法に入る。信は能く智功德を増す。信は能く必ず如來地に到る。信は能く諸根をして淨明にして利ならしむ。

とあるは、まことに信の力を能く説明せるものといふべきである。信する力によつて智慧も明かになり、多くの功德を積むことも出来るのである。然るに世間にはいかに博く學んでも、またいかに多く聞いても信に入ることの出來ぬ人が少くない。それは何故であらうか。此の事に就て涅槃經に説かれてあるのには、

信にまた二種あり。一には聞より生じ、二には思より生ず。是人の信心聞より生じて思より生ぜざれば、名けて信不具足と爲す。

とある。いかに多く聞いても自ら深く之に就て思ふことがなくては信を得ることは出來ぬのである。また同じ涅槃經に、

また二種あり。一には道ありと信ず。二には得たる者ありと信ず。是人の信心唯だ道ありと信じて、都て得道の人ありと信ぜざれば、名けて信不具足と爲す。

とあるのも眞に貴い教訓である。努力を量ねて佛道を得た人のあることを信するのは、まことに大なる力となるものである。誰も初めから佛道を得たる者はない。皆其の初めは凡夫なので

ある。併しながら努力を怠らなければ佛道を體得するやうになれるのである。さういふ人のあることを信すれば、自分も努力次第では必ず凡夫の境界を離れて佛菩薩に同じきものにもなれやうといふ希望が持てるのである。

信の力はまことに偉大である。唯だ一通り理解し得ても、之を信じ之を貴ぶ心がなければ、其の學び得たる所を實行しやうといふ決心はつかぬのである。華嚴經の中に信の重んずべきことを説かれたのは前に引いた通りであるが、なほ重ねて、

若し能く甚深の法を愛樂すれば、則ち能く有爲の過を捨離す。若し能く有爲の過を捨離すれば則ち憍慢及び放逸を離る。若し憍慢及び放逸を離れば則ち能く一切衆を兼利す。若し能く一切衆を兼利すれば則ち生死に處して疲厭なし。

とある。是れは法を信することの功德を説かれたのであるが、法を説かれたのは即ち佛であるから、法を信する人は即ち佛を信する人なのである。されば出生菩提心經の中にも信の重んずべきことを説いて、

若し福を求めんが爲に恒河沙の如き諸の佛刹に皆悉く寺を造り諸の塔を造るこ

と須彌の如くせんも、道心の十六分にも及ばず。

といつてある。此の勝鬘夫人の如きは眞に信力によつて能く佛を知り、又佛法の洪大無邊なることを知つたので、釋尊は之を大に稱揚せられ、其處まで深く知ることが容易ではないとまで仰せられた。普通のものには了知することの出来ぬやうな深いことでも「汝及び大法を成就せる菩薩摩訶薩のみ乃ち能く聽受す」とある。即ち勝鬘が既に大菩薩の境界に到達し得たものであることを認められたのである。

なほ此の語に續いて「諸餘の聲聞は唯だ佛語を信す」とあるは大に注意すべきことである。聲聞は小乗を學んで覺を得たものであるが、小乗を學ぶことは大乘を學ぶ階梯としてのみ用立つのである。此の事は前段に於て委しく説かれた通りである。されば聲聞には如來藏が一切の煩惱を離るゝことによつて佛の法身を成就するといふやうな深いことは、未だ明かに解し得られぬ筈である。それで「唯だ佛語を信す」といはれたのである。人々は皆如來藏即ち佛性を具へて居るのであるから、大乘を學んで菩薩行を勵みさへすれば必ず終に佛の境界に到達することも出来るといふ、佛の所説を信すべきのみである。若し之を信すれば、小乗を學んだことに満足して、進んで大乘を學ばうといふ志を起さぬのは佛に對して相濟まぬことであるといふ

ことが明かになるから、決して聲聞たることを以て自ら足れりとせぬ筈である。斯うなつてこそ聲聞となるために努力したことも無益ではなくなるのである。彼の迦葉等が佛の法華經を説かるゝを聽聞して、自分等も此より菩薩行を勵み佛の境界に到達するまでは決して怠るまいといふ大決心をしたと共に、非常なる歡喜を感じ、佛に對して感謝の意を述べた語の中に、

我等今は眞に是れ聲聞なり。佛道の聲を以て一切をして聞かしむべし。

とある。是れは信解品の中にあることであるが、眞に是れ聲聞なりといふのは、「此より進んで菩薩行を勵むのであるが、斯くてこそ聲聞となつたかひがあつた。聲聞で止つてしまつては、聲聞となつたかひは無かつたのである」といふ意である。それで自分達も此より菩薩行を勵んで行くと共に、一切の人を誘うて共に菩薩行を勵み、共に佛道を得べく努力せしめようといふことを誓つたのである。勝鬘夫人は信の力によつて大乘の深義を覺り得て、大菩薩たることを佛に認められ、なほ後には必ず佛の境界に到達し得らるゝといふ「授記」をも與へられたのであるが、釋尊は勝鬘を稱揚せらるゝと共に「諸餘の聲聞は唯だ佛語を信ず」と仰せられ、今は小乗を學んで覺り得た程度の者も佛語を信することに依つて更に大乘を學び、菩薩行を勵む志を起さなければならぬといふ意を示されたわけである。

○隨喜したまひ 勝鬘が斯くまでの深義を解し得たことを共に喜ばれたのである。獨り勝鬘其の人の爲にのみ喜ばれたのではない、其の教化によつて利益を受くる者の此より極めて多かるべきことを知つて深く之を喜ばれたのである。○是の如し 佛の御心も是の如くであるといふので勝鬘夫人の今までに説いた所を盡く認められたのである。○了知すべきこと難し 深く佛を信じて大乘の義を辨へ知るやうになつた者でなければ知り得られぬことであるとの意である。○自性清淨心は 各人皆清淨なる本心をもつて居ながら之を知らぬので、種々の煩惱を起し種々の罪を作るのである。○煩惱の爲に染せらるゝことも 自ら煩惱に役せられて居るものは煩惱が如何なるものであるかを知ることの出來やう筈はない。煩惱を離れ得る者にして初めて煩惱の性質を知り煩惱は纏はれて佛性が光りを發し得ぬ有様を明かに知ることが出来るのである。○大法を成就せる 大法とは即ち大乘である。大乘を學んで、後には佛と成るべき見込みのついた者にして初めて大法を成就せるものと稱せらるべきである。○菩薩摩訶薩 摩訶とは「大」といふ意で、摩訶薩とは「大士」といふことである。大士とは大なる志を懷いて居る人のことである。大なる志とは、必ず佛と成つて普く一切の人を救はうといふ志である。世の中に是れほど大なる志はない。菩薩は必ず摩訶薩でなければならぬ。たとへ大乘を學んでも此

の志を有せぬものは眞の菩薩とはいはれぬのである。○聽受す 佛の教へを聽聞して能く其の意を解し、又能く之を信することである。○唯だ佛語を信す 信することが肝要である。信じて居れば大乘の深義を解し得るやうにもなれるのである。○隨信 佛の御心の通りに信ずるのである。我意を加へて佛語を曲解して、それを信じたのでは信じたかひが無い。佛意に違はぬやうに信じ得れば、進んで菩薩行を勵むやうになれるのである。○信増上の者 其の信する心が益々増進して行くものである。一たびは信じても種々の事情によつて其の信が後に至つて退轉するものが、世間には極めて多い。されば信増上とまでならなければ、切角信じたのが大なる力とはならぬわけである。○明信に依り了りて 明信とは即ち佛意に違はぬ信のことである。依り了るといふのは此の信に依つて此より後の身の行ひを定めようといふ決心が確かについたことである。了るといふのは確かに動搖せぬことである。○法智に隨順する 法智とは一切の煩惱を離れたる正しき智力のことである。此の法智によつて一切の事を判斷するやうになつたのを法智に隨順するといふのである。深く佛を信じて大乘の教へを學ぶものは法智を具へ得るやうになれるのである。○究竟を得たり 大乘の深義を全く解し得て、之を其の身に實行する決心がついたのである。○根 六根のことである。即ち眼耳鼻舌身意である。心に迷ひの

ある間は自身の眼耳等が果して如何なる作用をするかを明かに知り得られぬのであるが、煩惱が無くなつて初めて自己の身心の作用が能くわかつて來るのである。是が悟りの始めである。○意解 六根によつて生ずる作用を知ることである。即ち六識である。六識とは眼によつて識り得る色、耳によつて識り得る聲、鼻によつて識り得る香、舌によつて識り得る味、意によつて識り得る法である。法とは物の存在をいふので外界に種々の物の存在することを認め得るのは意力である。○境界 即ち外界のことである。六識を生ずる所の外界よりの刺戟を一々明かに知るのである。即ち所謂六境である。此の六根と六識と六境とを併せて十八界と稱するのである。○觀察し 能く其の眞實の性質を見極むることである。心に煩惱があつては何物に對しても其の眞實の性質を知ることが出來ぬ。○施設し 自分の態度を定むることである。外界のことも吾が身心の作用も皆盡く明かになつて、初めて自分は如何なる態度を以て自分の境界に處すべきものであるかを誤りなく判斷することが出來るのである。○業報を觀察し 人は皆其の業によつて必ず其の報を受くるのである。善業を積んだものは善報を受け、惡業を重ねたものは惡報を受けなければならぬ。報には正報と依報との二種がある。正法とは自己の身心である。依報とは自己の身を托する所の境遇である。如何なる身と心をもつて如何なる境遇に在る

かといふことは皆盡く自己が前に積み來つた所の業によつて定まるのである。其の業報の關係を明かにして居れば、たとへ如何なる苦しい境遇に陥つても更に悔むことはない。此の苦しい中を堪へて行くことによつて過去の惡業を償ふのであると思へば、勇ましく其の中を通り越けて行かれるのである。○阿羅漢の眠 眠とは其の佛性が眠つて居ることである。阿羅漢は小乗を學んで得たる覺の極致であるけれども、まだまだ大乘を學んで居ないから、慈悲の念を以て一切衆生に接し、之に救護を與ふることは出來ぬのである。たとへ名利等の念を一切捨て、清淨なる生活をして居ても、世のため人のために力を盡すやうにならぬ間は、その具有せる佛性が充分に發揮されたものとはいはれぬ。まづ佛性が眠つて居るものと見なければならぬのである。○心自在の樂 心自在とは即ち智慧のことである。自在といふのは凡ての事物の真相を知ることにて於て障礙なく、又如何なる境遇に在つても其の身を處する上に於て少しの誤りもないことをいふのである。一切の煩惱を離れて正しき智慧が具はるやうになつて、初めて自在を得るのである。○禪定の樂 禪定とは心に少しの動搖もなく、外界の如何なる變化にも更に制せられぬやうになつたことである。斯くして其の心が初めて平和安樂なのである。○大力の菩薩 菩薩は一切衆生を救護すべき力を具へて居るから、之を稱して大力といふのである。眞に大

なのは佛のみであるが、菩薩にして徳の高いものは佛にも準せらるべきである。○聖自在神通力といふのと同じことである。凡夫の爲し得ざることを爲し得るのが即ち神通力である。佛教の起らぬ以前には、種々の不思議な働きをするのを(例へば天を翔るとか水を踏むとかいふやうなこと)神通力といつて居たのであるが、佛教に於ては一切の煩惱を除き、一切の人に救護を與へ得る力を神通力と稱するのである。眞に神通力を具へ得たるものは唯だ佛菩薩のみである。阿羅漢や緣覺の如きも煩惱の一部分を除き得たものであるから、神通力の一部を具へ得たものとはいへるけれども、眞の神通力を得た者ではないのである。○五種の巧便の觀 巧便とは良き方便といふ意である。以上五種の觀察を凝すのは所謂菩薩道を行するための方便に外ならぬものである。此の五種の觀察に誤りがなければ必ず菩薩道を行じて、終には佛とも成り得らるべきである。○我が滅後の未來世に於て 佛は滅後のことを深く心にかけて、いつも「未來世のため」といふことを仰せらるゝのである。佛が大乘の教へを説かれたのは在世の諸弟子の爲でもあるが、寧ろ滅後のためといふことに重きを置いて居られたやうである。世が末になると世間は益々複雑になり、人心は随つて益々險惡になるから、尋常一様の教への力を以て之を救ふことは出來ぬのである。此の時こそは大乘の教へが初めて其の光りを發すべき時である。

譬へば重病に罹つて初めて良醫の處方にかゝる靈藥の効き目が顯はれるやうなものである。佛は斯る時の來るべきことを洞見せられて、此の大乘を説き遺されたものである。○而も究竟することを得ん 未だ全く煩惱を離れ盡すことが出來なくても、大乘の眞の精神を辨へ知ることが出來るといふのである。全く煩惱を離れ盡したものは即ち佛である、佛ならぬものは如何に覺つたといつても、其の心の何處かに未だ煩惱が残つて居るのである。併し修行を積んだものは、其の佛の境界に到達すべき道筋だけは能くわかつて來るのである。○大乘の道に入るの因は、大乘の道に入るといふのは大乘の修行を積んで、必ず佛の境界に到達し得られるといふ見込みのついたことである。即ち高德の菩薩である。次第に修行を重ねて所謂明信を得たものは、更に進んで此の「大乘の道に入る」といふところまで行けるのであるから、今までの修行が皆其の因となつたといふのである。○深義を謗せず 深義とは佛の覺りたまへる所をいふのである。謗するといふのは口に出して誹謗することばかりではない、之に乖離するのは盡く誹謗なのである。深義を謗せずといふのは佛の御心に乖かぬことである。佛の御心と一致した行ひの出來るものは、漸く進んで佛の境界に到達することも必ず出來得るのである。

信の力の偉大なことは前から屢々説かれた所であるが、信なくしては眞實の智慧を具へ得るやうにはなれぬのである。佛の遺されたる教へは經典の中に具はつて居るのであるから、何人と雖も此の經典を精讀しきへすれば、其の一通りの意義を解することは必ず出來る。併しながら佛の覺り得られたる甚深の理は、言語文字等によつて悉さるべきものではない。たとへ經典を精讀して、之に就ての明白なる理解を有するに至つたものでも、それで佛の御心がスツカリわかつたとはいはれぬのである。其の甚深の理を解し得ることは、唯だ信力ある者のみの能くする所である。心を打込んで信することに依つて、吾等の心と佛の御心とが通ひあふのである。例へば戸を締め切つて置けば日光は入らぬけれども、戸を明けてガラス障子だけにして置けば、日光は其のガラスを徹して入るから、室の中も明るくなり、又自分の身にも日光が能くあたるのである。併しながらたとへ日光は障りなく入つて居るやうに見えても、ガラスを隔てて居ては、眞に日光の中に在るといふ感じは起らぬ。此のガラス障子を開いて、初めて直接に日光に浴し得るのである。吾等が能く信するに至つて初めて眞の解を得るのも亦それと同様のことである。涅槃經には「信解圓通」といふことが説かれてあるが、是れは大に味ふべき語なのである。

少しも解する所なくしては信するといふことは出來ぬ。殊に現代の教育を受けて居るもの

は、幼年の時から物事の説明を聞いて初めて理解するといふことに慣れて居るのであるから、何故に信すべきものかといふことを辨へずに、信するといふことの出来るものではない。されば現代の人、特に青年の人などに在つては、自分の家は先祖から念佛宗であるから阿彌陀佛を信せよとか、先祖から法華宗であるから法華經を信せよとかいはれても、決して最初から信仰心が起るものではない。それであるから最初は經典等を研究することも必要である。然るに其の研究が研究に止つて居る間は、まだ最も深い所は理解し得られぬのである。併し此の經典の中には佛の御心が打込まれてあるのであるから、若し眞面目に其の研究を續くるならば、其の一通りの意味が理解されるだけでなく、何となしに貴く感じられ有難く感じられて來るのである。何人も皆佛性を具へて居るのであるから、貴い佛の教へを究むることによつて、其の佛性が開發せられぬ筈はない。そこで唯だ言語文字の理解でなく、心を打込んで之を信じやうといふ氣になれば、それが一段の進歩である。信じやうといふ心になつて更に經典を繰返して讀むと、以前に解し得た所よりも更に深いことを解し得るやうになるのである。深く解し得れば又一層の信を増す。信が進めば又一層深いことが解し得るゝやうになる。斯くして解は信を生み、信は解を進めて行くので、それが實行の力となるのである。前にも既に引用した語である

が、涅槃經の中に

信解圓通して方まに行の本おこなひと爲るな。

とあるのは即ち此の事である。

多くの青年の中には往々にして「自分も信仰の必要は認めて居るけれども、心を打込んで信するといふまでに容易になれぬのが残念である。是れは現代の教育を受けた爲であらう。片田舎に住んで居る爺さん婆さんなどは、別段研究といふこともせず、唯だ習慣的に佛を信じて、それで一種の安心を得て居るやうである。それが却つて羨しい」といふやうなことを告白する人もあるが、決してさう自ら悲觀すべきものではない。眞面目なる研究はやがて信仰心を生み出すものである。それは人々が皆佛性を具へて居るからである。たとへ急に信仰的生活に入ることが出来ずとも少しも失望するには及ばぬ。何事でもさうであるが、殊に宗教的の信念を得やうとするものは、怠らず急がぬといふ心掛けが肝要である。釋尊が二十億といふ弟子に教訓せられた通り、琴を弾くのも其の絲があまりに緩ければ好い音は出ぬが、又あまりに急であれば其の絲は切れてしまふ。緩急宜しきを得て初めて眞に好い音が出るのである。釋尊は此の譬喩を説かれて後に、

極めて大精進するときは心亂る。若し精進せざるときは心に懈怠を生ず。若し其の中を得れば必ず解脱することを得ん。

と諭されたのは極めて有益なる訓戒であつたと思はれる。怠つてはならぬが、又あまりに急いでもならぬのである。

片田舎に住んで、あまり多くの外界からの刺戟を受けず、習慣的に信心を持ち續けて居る人は羨むべきものゝ如くに見えるけれども、實はそれ程に羨むべきではないのである。その信仰は温室で咲いた花のやうなものである。其の温室の外へ移されて、急に非常な冷たい風に當れば、忽ちにして凋んでしまふ。其の山家を離れて都住居をして、急に多くの刺戟を受けるやうになれば、忽ち其の心に混亂を起して、佛も法も殆んど忘られたやうになつてしまふのである。急に信仰的生活に入れないでも少しも失望せず、一步より一步と着實に進んで行く人の信仰は徐々に固まつて行くのであるから、後に至つて退轉するといふ恐れは殆んどない。これこそ眞に頼りとなるべきものである。又前から度々いふ通り、菩薩道を勵む者は、一切衆生が煩惱に役せられて煩悶苦悶の中に日を送つて居るのに對して哀愍の念を起し、之を救護せんが爲に力を盡すべきものである。それが即ち佛の化導を助けて佛恩に報ずる道であると共に、また自己の

智を進め徳を積む所以なのである。而して多くの人を教化し救護せんとするのには、世故に通じ人情に通じ、彼等が如何なる事情の下に在つて其の煩悶苦悶を増長せしめて行くかを委しく辨へて居なければならぬ。それは刺戟の少い所で習慣的に信仰を持ち續けて來た人の能くすべき所ではない。自ら種々の煩悶苦悶の中を経て來たものにして初めて其等の事に就ての察しもつくのである。されば信仰を求めて容易に信仰が得られず、大に苦しんだといふやうなことは決して無意義のものではない。其の苦しみに負けないで努力を續けさへすれば、却つて其の苦しみが大なる力を蓄へ得べき因由となるべきである。

兎にも角にも吾等は信解圓通といふことを理想として吾等の努力を積むべきであるが、今此の段に於て釋尊が所謂「如來を信する者」を三大別して「隨信の者」と「信増上の者」と並に「明信に依りて法智に隨順する者」とにせられたのは大に注意すべきことである。吾等も此の順序を経て漸次に信仰の道に深入りして行くべきである。先づ第一は「隨信の者」であるが、隨信とは佛の御心の通りに信を勵むことである。たとへ信を勵んでも、その信する所が佛の御心に背いて居れば、其の信によつて功徳を積むどころでは無い、却つて罪を作ることになるのであるから、先づ此の點に深く意を用ゐなければならぬ。何の爲に佛法を信するのであるかと

いへば、吾等の本來具有せるところの佛性を開發し、明なる智慧を具へ、大なる慈悲を行すべ

き力を具へんがためである。それは涅槃經の中に、

大信心は即ち是れ佛性なり、佛性は即ち是れ如來なり。

といひ、更にまた

或は阿耨多羅三藐三菩提を説きて信心を因と爲す。是れ菩提の因また無量なり
と雖も、若し信心を説けば則ち已に攝盡す。

といつてあるに依つても明かである。阿耨多羅三藐三菩提とは所謂佛智であるが、佛智を具足
するのには信心が其の因となるのであるといふのである。また寶積經には

信は是れ佛の子なり。是故に智者は應に常に信に親近すべし。

とある。また大智度論には信の意義を説かるゝこと甚だ詳悉である。即ち

信心を説くに四種あり。一には根本を信ず。所謂眞如の法を樂念するなり。二
には佛に無量の功德ありと信じ、常に念じて親近し、供養し恭敬し善根を發起
して一切智を願ひ求む。三には法に大利益ありと信じ、常に念じて波羅蜜を修

行す。四には僧能く自利利他を修行すと信じ、常に樂うて諸の菩薩衆に親近し
て如實の行を求め學ぶ。

とある。信ずるといふことは第一に絶對の理を信することである。第二に佛を信じ、第三に法
を信じ、第四に僧を信することである。斯く信を積んだ結果として絶對の智慧を具へ、一言一
行盡く絶對の理に一致するやうになれるといふのである。此の大智度論は龍樹の作であつて、
佛説ではないけれども、其の所説は能く佛の御心と一致したものと見做してよいのであるか
ら、此の語も諸經の中の語と同じやうに重んじて誤りはないものであらう。

以上引用した經論中の語は大體に於て一致して居る。即ち信心の目的は吾等の具有せる佛性
を開發し長養することである。凡夫の境界を離れて、佛の境界に近づいて行くことである。斯
う解釋して信心を勵むのが即ち「隨信」である。此より異つたる考へで信心をするのは隨信と
はいはれぬのである。世間に信心を勵んで居ると自ら稱する人は少くないが、その殆んど大部
分が隨信ならぬものであるのはまことに哀むべきである。先づ最も多いのは現世の利益を求む
る爲の信心である。或は罰を恐るゝが爲に信心をする者もある。或は又來世を頼みとして信心
をする者もある。併し能く佛意に隨順して信心を勵む者は至て稀である。何でも信心をすれば

宜いといふものではない。起信論にも特に

大乘の正信を起す。

といふことを以て吾等に勧めてある。然らば正信と邪信との區別は何に依つて定めるのかといへば、佛の御心と一致するのを正とし、佛の御心に背くことを邪とするより外はない。

此の如くに「隨信」といふことは極めて大切であるが、更に進めば「信増上」といふ地位に達するのである。即ち其の信する力が日を追うて増して行くのである。其の信する力は知る力と相伴うて進むべきものである。知ること愈々深ければ、信することも益々深くなるべきは勿論である。信するとは前に引いた大智度論の語によつても明なる如く、佛を信じ法を信じ僧を信するのである。然るに佛を知るといふのは容易のことではない。法華經には

諸佛の智慧は甚深無量なり。

とあり、無量壽經には

諸佛の智慧海は深廣にして涯底無し。

とある。また無量義經には

清淨無邊にして思議し難し。

とある。此の如くに佛は吾等の容易に思議し難き智慧を具へられ、隨つて佛の一切衆生を教化し救護したまふ所の作用も廣大無邊であつて、吾等には容易に之を量ることは出来ぬ。唯だ佛を信すること漸く久しきに及んで、以前に窺ひ得なかつた所までも漸々に明かにわかるやうになるのである。信に依つて解が増すといふことを前にいつたが、其の解が進むに隨つて又信も増すので、畢竟信と解とは相俟ち相助けて何處までも進んで行くべきものである。されば信が増上するといふことは、即ち其の信する者の努力が益々加はつて行くことを證するのである。佛が斯く思議し難きものであると同様に、法も亦思議し難きものである。佛の御心を打込まれたものは即ち法である。吾等は佛法を學ぶことに依つて佛の智慧をも、佛の慈悲をも知ることが出来るのである。されば佛を信すること深きものは、又法を信すること深きものである。佛法は之を學ぶに隨つて益々深さを加ふるものである。無量義經に

稽首して難思議に歸依したてまつる。

とあるのは佛に歸依することであるが、なほそれに續いて、

梵音雷の如くに震ひて響に八種あり、微妙清淨にして甚だ深遠なり。

とあつて、佛の説法の貴いことが稱讚してある。されば吾々も佛法を學ぶこと益々久しきに隨

つて、法に對する信も増進して行くべきこと勿論である。又僧といふ中にも種々の別があるけれども、僧の上首に在るものは高德の大菩薩である。菩薩はやがて佛の境界に到達し得べきものであつて、吾等は菩薩が佛の化導を助けて吾等衆生を救護する爲に力を盡さるゝに對しても大に感謝すべきものである。例へば華嚴經に

菩薩は常に此の念を爲す、我當に十方の一方の衆生の爲に無量劫に住し、衆生を成就して心に疲厭なく、共に止住して捨離することなく、悉く十方世界を度し、一衆生の爲にするが如くに一切衆生の爲にせん。

とあるが如きは殆んど佛の徳を稱へたのと異らぬやうである。されば吾等の菩薩を信ずることも、吾等自身の修行の進むに隨つて益々増進すべきである。要するに吾等の信の増上することは吾等の解も亦増進して居ることを證するものである。「信増上の者」となるに及んでは、たゞ「隨信の者」であつた時よりも、將來佛の境界に到達し得べき見込みが更に正確になつたものと見るべきである。

更に「明信に依つて法智に隨順する者」に至つては、又一層優れたものであつて、其の信の力に依つて最も明かなる智慧を具へ得るやうになつた境界である。此の境界に達した者は如何なる力を具へて居るかを經文に説明してあるが、其の第一は「根と意解と境界とを觀察し施設する」といふので、是れは一切の人の性質と境遇とを正しく理解することである。其の第二は「阿羅漢の眠を觀察する」といふので、是れは小乗の教へを學んだのみでは充分に佛性を開發することの出來ぬことを知るのである。第三に「心自在の樂を觀察する」といふより以下は、大乘の教へを深く究むることである。斯く人といふものゝ本性を能く知つて、正しい教への力に依らなければ、折角貴い佛性を具有して居ても之を開發長養することの出來ぬことを知り、又同じく佛の教へられた所にも大小乗の別があつて、其の小乗は大乘に入るの階梯に過ぎぬことをも明かにし得たものは、其の信心が退轉するといふ恐れは絶對にないのである。菩薩行を勵んで佛の境界に到達するまでの間を十段に分けて、之を「十地」と稱するのであるが、此の「法智に隨順する者」といふのは十地の中の第七地の「遠行地」といふ位であると考へられて居る。それを遠行と稱する所以は唯識論に、

世間と二乗との道を出過するが故に。

とあるに依つて明かである。世間といふのは所謂凡夫である。大乘を學んで久しきものは勿論凡夫の境界を離れ盡して居る。又二乗即ち聲聞緣覺の境界をも遠く離れて、専ら菩薩行を勵み

佛の境界に近づくことを理想として、修行を續けて居るものである。

此處までになればもう安全なので、「自性清淨心、彼の煩惱のために染汚せられて而も究竟することを得ん」とある。自性清淨とは即ち佛性であるが、煩惱の爲に蔽はれても佛性そのものに何等の變化の無いことは前段に説かれてある通りである。それは前にも譬へた通り、月が雲の爲に蔽はれて居るやうなものである。佛法を學ぶことに依つて其の煩惱が漸次に除かれて行くのは、雲が晴れて行くに随つて月の光りが漏るゝやうなものである。雲が全くなくなつて、満月が中天に皓々たる光りを放つて居るやうなのが即ち佛の境界であるが、其の雲のかゝつて居るのにも種々の程度がある。雲が非常に深ければ月の姿は全く見えぬ。道も教へも全く辨へぬ凡夫は此の如きものであつて、折角貴き佛性を具へながら、其の佛性は少しも光りを放たぬのである。其の雲が少しづつ薄くなつて來れば、微かながらも月の形が認められるやうになる。それは佛法を學ぶことによつて其の佛性が少しづつなりとも光りを發するやうになつたのに比すべきである。さて此の「法智に隨順する」と稱せらるゝまでになれば、モウ此より進んで佛の境界に到達し得べき見込みが略ぼついたのであるから、譬へば雲が非常に薄くなつて、月の形が先づ大體明かにわかつたやうなものである。それで之を「究竟することを得た」といつてあるのである。

此處までの修行が「大乘の道に入るの因」だといふのである。大乘の道といふのは、前にいつた十地の中に於ていへば第八地以上と見らるゝのである。其の第八地は「不動地」と稱せられ、第九地は「善慧地」と稱せられ、第十地は「法雲地」と稱せらるゝのである。不動といふは全く安全なことである。佛と成るべき大願の必ず成就すべきことは確かであるといふ見込みのついた境界である。次に善慧といふのは有らゆる功德を生み出すべき智慧を具へ得た境界である。善とは缺くる所なきことをいふのである。最後に法雲といふのは雲の大空に徧く擴がつて、やがて其の中から雨の降り注ぐが如く、菩薩が徧く一切衆生を哀愍して、之が爲に法を説き、之を救護すること、此處に至れば殆んど佛と異ることなきほどの徳を具へたものなのである。此の如き境界に到達し得る力は唯だ深く佛を信ずることに依つて與へらるゝのであるから、信ほど貴いものは無いのである。されば勝鬘夫人は佛に歸依することの肝要なるを説いて、前段から引續いて來た所説を終り、釋尊も亦佛を信ずるの大利益を説いて、勝鬘の説の眞實なることを證せられたのである。以上で收束となつたのであるが、勝鬘はなほ此の如き正法を信せぬ者のあるべきことを慮り、之を戒むる語を之に附け加へた。それが次の「如來眞子

章」である。まことに其の用意の周到なるを見るべきである。

爾の時に勝鬘佛に白して言さく、更に餘の大利益あり。我當に佛の威神を承けて復た斯の義を説かんと。佛の言はく、便ち説けと。勝鬘佛に白して言さく、三種の善男子善女人、甚深の義に於て自の毀傷を離れ、大功德を生じ、大乘の道に入る。何等をか三と爲す。謂く若しは善男子善女人、自ら甚深の法智を成就すると、若しは善男子善女人、隨順の法智を成就すると、若しは善男子善女人、諸の深法に於て自ら了知せずして世尊に推したてまつり、我が境界にあらず、唯だ佛の所知なりといふ。是を善男子善女人、仰いで如來に推したてまつると名く。此の諸の善男子善女人を除き已りて、諸の餘の衆生の、諸の深法に於て妄説に堅著し、正法に違背し、諸の外道の腐敗の種子を習ふ者は、當に王力及び天龍鬼神の力を以て之を調伏すべしと。爾の時に勝鬘、諸の眷屬と與に佛足を頂禮したてまつる。佛言はく、善哉善哉勝鬘、甚深の法に於て方便守護して、非法を降伏すること善く其の宜しきを得たり。汝已に百千億の佛に

親近して能く此の義を説けりと。

此の經の正宗分は愈々これを以て終るのである。此の最終の一段に於て勝鬘夫人は二つの重要なることを附け加へて説いた。其の一は佛を信する力の足らぬものは、邪説に惑はされ易いことである。其の二は正法に背いた者に嚴しい制裁を與ふることの必要である。前段にも説かれてある通り、信することの深からぬ者は、解することも深からぬ者である。信解共に深からぬ者は邪説に惑はされ易いのである。涅槃經には

菩薩惡象等に於ては心に怖懼すること無かれ。惡知識に於ては畏懼の心を生ぜよ。

といつてある。象は唯だ肉體を殺すのみである。肉體はたとへ殺されずとも、百年と保ち得らるゝものではない。惡象よりも遙かに恐るべきは惡知識である。惡知識といふのは邪法を説き勸むる者のことである。邪法は心を惑はすものである。心は現世に止まらず、來世までも永く續くものであるから、心が邪法に惹かれて正しい道に戻らなければ、其の報は來世にまで及ぶのである。故に惡象よりも惡知識を恐れて、決して之を近づけぬやうにしなければならぬと戒められてあるわけである。然るに其の邪法なるものは聽く者の耳に快く響くものである。凡夫

の心は皆煩惱に充されて居る。其の煩惱は多くの苦を生ずる元であるのに、多くの人は之に氣附かず、其の煩惱を恣にして居るのである。

貪愛を以て自ら蔽ひ盲瞶にして見るところ無し。

と法華經方便品にある通りである。正法は斯る煩惱を除くことを主として説かるゝものであるから、煩惱に役せられて居るものが之を聽けば、身體に傷のある者が其の傷に觸られたやうなものであるから、大なる痛みを感ぜざるを得ぬのである。然るに邪法は敢て凡夫の煩惱を除かうとするのでなく、却つて煩惱を増長せしむるやうなことを説くものであるから、多くの凡夫は寧ろ邪法に親み易いのである。故に深く之を戒めなければならぬわけである。

而して邪法に惑はさるゝ者は必ず惡業を重ねるやうになるのであるが、惡業の徒が多ければ其の國は必ず衰微する。甚しきに至れば即ち滅亡するのである。故に國王は邪法の徒に制裁を與ふることを怠つてはならぬのである。今日と異つて昔は教育も普及せず、一般人民の中に思慮分別の深いものは至て稀であつて、上に立つ人の指導次第で如何様にもなつたのである。されば王者たるものは人民を指導すべき大責任を負うて居たわけである。王者は自ら正法を信じ、身を以て衆を率ゐて共に正法に歸依せしむるやうに努めなければならぬのである。佛が特

に國王のために種々の教へを説かれたのは眞に謂れあることである。國王一人が正法を深く信するやうになれば、其の國は擧つて正法に歸すべきである。華嚴經に

人は王を以て命と爲し、王は政治を以て身と爲す、世道既に和平なれば、佛法

茲より始まる。

とあるは實に之が爲である。勝鬘夫人は友稱王の妻であつて、一國の王妃として仰がれて居る人であるから、常に其の國民の幸福を増進せんことを念として居たに違ひない。然るに佛の大乗の教へを信じ、自ら今より菩薩行を勵んで終には佛の境界に到達することも出来るやうな身となつたのであるから、何卒其の國民一般に佛の正法を信せしめたいといふ希望が最も熾烈に起つたに違ひない。随つてまた佛の正法に違背する者には國王の力を以て制裁を與へなければならぬといふことを深く感じたものと思はれる。最後に此の事をいつたのは、其の正法を重んずる念の篤く、また其の民を憐むの念の深いことを示すもので、まことに貴く懐かしく思はるゝ次第である。

○餘の大利益 是れは前段に於て釋尊が「如來を信する者は是の如きの大利益あり」といつて説かれた所と少しも異らぬのであるが、更に之を他の語を以て解釋し説明したのである。○甚

深の義 大乘の教へのことである。即ち佛の自ら覺りたまへる所を打明けて説かれたものであるが故に、甚深の義といふのである。○自の毀傷を離れ 佛の大乘の教へを信するに當つて、佛意の通りに之を信せず、自己の私意を加へて之を解し之を信するのは、即ち佛の貴い教へを毀傷するのである。斯る毀傷を離るゝといふのは、即ち佛の御心の通りに信するので、前段にいはれた「隨信の者」に當るのである。○大功德を生じ 其の信が深くなるに隨つて大なる功德を植ゆべき力が生み出さるゝのである。即ち前段に説かれた「信増上の者」といふのに當るのである。○大乘の道に入る 佛と成るべき見込みの確になつたものゝことで、即ち前段に於て「明信に依つて法智に隨順する者」といふのが之に當るのである。○自ら甚深の法智を成就する 其の信が深くなつた爲に其の解も深くなり、一切衆生の性質境遇の差も皆能くわかり、佛の大小乗の教へに就ても正しい見解が出来たのを、甚深の法智を成就するといふので、即ち前に「明信に依つて法智に隨順」するといふのに當るものである。○隨順の法智を成就する 佛を信すること愈々深くなるに隨ひ、佛の御心と自己の心とが能く通ひあふやうになつて、凡ての事物の實相がわかつて來るので、即ち前に「信増上の者」といはれたのが之に當るのである。○自ら了知せずして 自己の智慧力のみでは凡ての事物の實相を明かにすることは出來

ぬと知つて居るのである。○世尊に推したてまつり 唯だ深く佛を信するが故に、佛語に隨つて萬事を解釋して居るのである。○我が境界にあらず 今の自己の分際としては、まだ一切の事物の實相はわからぬといふことを知つて居るのである。○唯だ佛の所知なりといふ 佛の説かれたまゝを信じて居るので、即ち前に「隨信の者」とあるのに當るのである。○諸の餘の衆生 以上三種の信を得ぬ者である。即ち正しい信念の缺けて居る者である。いかに博く學び多く聞いても、信する力の足らぬものは邪説に惑はされ易いのである。○妄説に堅著し 誤れる説を信じて堅く之に執著し、其の誤りであることをいつ迄も自覺せぬのである。○正法に違背し 既に邪説に惑はされて居るのであるから、其の身に行ふことが佛の正法に違背するやうになるのである。邪信が邪行の元となるのは當然のことである。○諸の外道 佛教以外のものを盡く外道と稱するのであるが、印度に於ては佛教以外の教へとしては婆羅門教より外はない。されば此處に外道とあるのは婆羅門教のことであると解すべきである。婆羅門教の中には浅いのも深いのも種々あつて、釋尊當時に至るまでに其の分派は總計九十六に達したといふことである。其の中には深い哲理を説いたものも無いわけでは無い。併しながら煩惱を除き盡すことを徹底的に教へたものはないから、到底佛教には比べられぬのである。○腐敗の種子 腐敗し

た種子からは芽の生えぬのと同様に、婆羅門の教へを學ぶことに依つて吾等の具有せる佛性を開發せしむることは到底出來ぬのである。○王力 國王は佛の正法に基いて國法を立て、國の安穩を圖るべきものである。されば邪法を奉じて佛の正法の流布を妨ぐる者は、國王の力に依つて制裁を與へられなければならぬのである。○天龍鬼神の力 天龍鬼神等は皆佛の正法に歸依し、正法を護るべきことを誓へるものである。されば正法の流布を妨ぐる者に對しては、天龍鬼神も勿論之に制裁を加ふべき筈である。○調伏 其の心の亂れたるを正すのを調といひ、其の教への邪なるものを打破るのを伏といふのである。邪法を調伏しなければ正法は弘まらぬ。○方便守護して 出來得る限りの方法手段によつて、正法の世に廢れぬやうに力を盡すのである。○百千億の佛に親近して 是れは過去世のことである。勝鬘がまだ妙齡の一婦人であつて、而も佛教を學び始めてからあまり久しくもないのに、其の信する所が盡く佛意に叶ふやうになつたのは、過去世に於ける修行の結果が現世に至つて現はれたものと見なければならぬのである。業報の關係は三世に亘るものであるから、過去に於て修行を積んだものは、其の報として非常に優れたる機根を具へて現世に生れて來るから、現世に於ける修行が久しくなくても、佛意に通達することが出來るのである。勝鬘の如きも其の一人であることを釋尊が認めら

れたのである。

此の段に於ける勝鬘の所説は、大體に於て前段に於ける釋尊の語と異なる所はないやうであるが、本段に至つて折伏の必要を説いた所が異ふのである。また釋尊も其の點を特に稱揚して居らるゝのである。佛法を世に弘むるに就ては攝受と折伏との二途があるので、其の時と場合とを能く見て、何れの方法に依るべきかを定めなければならぬ。攝受とは他の善を認めて之を獎むるのである。折伏とは他の誤りを糾して之を正しき道に入らしむるのである。何れも慈悲心より出るものである。天台大師は其の著「摩訶止觀」の中に於て

夫れ佛に兩説あり、一は攝にして一は折なり。……與奪途を異にすと雖も俱に利益せしむ。

といつた。與ふるとは其の善を認むることである。奪ふとは其の過を責めて用捨せぬことである。共に彼をして其の本來具有せる佛性を發揮して、佛の御心に叶つた修行を積ませやうといふ大慈悲心から出るものであるから、「俱に利益せしむ」といつてあるのである。折伏を行ふことの出來ぬものは慈悲の念の足らぬものである。譬へば非常に優れたる寶玉をもつて居る人が、それを瓦石の如きものであると考へて途に棄つるのを見た人は、彼に其の寶玉を大切に

するやうに忠告を與へなければならぬ。それを黙つて看過するのは親切の足らぬ人である。折角に貴い佛性を具有しながら正法に歸依せずして邪法に心を寄せ、いつ迄も其の佛性を開發することも出來ず、言行共に正道に背いて行くのは、寶玉を途に棄つる愚人と少しも異らぬものである。之を其の儘に看過するのは無慈悲の甚しいもので、苟くも佛法を學んだものは、さういふ事の出來る筈はない。日蓮上人が「開目鈔」の中に折伏の必要を説いて、

我が父母を人の殺すに、父母に告げざるべしや。惡子の醉狂して父母を殺すを制せざるべしや。惡人の寺塔に火を放たんに、制せざるべしや。一子の重病を灸せざるべしや。

といったのは如何にも道理ある言である。佛法を學ぶものは誰も皆此の心がなければならぬのである。

折伏の最も良い例として引かれるのは法華經不輕品に出て居る不輕菩薩である。此の不輕菩薩の出られた時代には増上慢の比丘が大勢力をもつて居たとある。増上慢とは未だ得ざるを得たりとするものである。佛の御心の在る所を能くは辨へず、其の時代に適する教へは如何なるものであるべきかを正しく判すべき力がないのに、自ら悟り得たりとして獨り得意になつて

居るものである。此の如き人々が勢力を得て居た時代であるから、勿論佛の正法は世に行はれて居なかつたのである。その時に不輕菩薩は行きあふ人毎に必ず之を禮拜し、之に對して言を正して

我深く汝等を敬ふ、敢て輕慢せず。所以は何ん。汝等皆菩薩の道を行じて當に作佛することを得べし。

といった。此の如くに説いて人々の反省を促したのであるが、其の意の在る所を知らぬものは却つて嘲弄せられたと思つて大に怒り、或は之を罵詈し、或は之に杖木瓦石を加へ、散々に迫害を與へたが、不輕菩薩はいかに迫害せられても更に怒ることなく、依然として

我敢て汝等を輕しめず、汝等皆當に作佛すべし。

といつて居た。此の如くに有らゆる迫害に堪へて善根を積んだ功德によつて、不輕菩薩は殆んど佛に近いほどの徳を具へた人となつたので、前に之に迫害を加へた者共は皆之に歸依するやうになつたといふ。それで經文には

是の人を輕賤して爲に不輕の名を作せし者、其の大神通力、樂說辯力、大善寂力を得たるを見、其の所説を聞きて皆信伏隨從す。

とある。「不輕の名を作せし」といふのは、此の人が常に「汝等を輕しめず」といつたので、之を愚弄するために之に「不輕」といふ名をつけたといふことである。

此の不輕菩薩が一切の人を禮拜したのは、其の具有せる佛性を重んずるの意を表すると共に、切角貴い佛性を具有しながら之を空しくすることの愚さを自覺せしめんが爲であつた。「皆菩薩の道を行じて當に作佛することを得べし」といふのは、其の菩薩の道を行せずして空しく一生を送ることを痛惜するの意である。若し菩薩の道を行せずして空しく月日を送るならば、其の具有せる所の佛性はいつ迄も埋もれて終らなければならぬ。それでは切角佛性を具へたかひは無いのである。されば之を禮拜し、又之に對して此の如きことを説いたのは、其の反省を促さんが爲である。「折角貴い佛性を具へながら、菩薩の行を勵まうといふ志を起さぬのは惜いことではないか」といふ警告を與へんが爲であつたのである。されば之を折伏の範として傳へられて居るのである。天台大師とか傳教大師とか日蓮上人とかいふ人々のやうに、諸宗の教義に厳しい批判を加へ、法華經以外の經は佛の眞實の教へとは見做されぬといふことを痛論するの折伏であるが、不輕菩薩の如くに行きあふ人を盡く禮拜するの亦折伏である。其の形に現はれた所は相反するもの、如くであるが、其の反省を促すといふ精神に於ては全く一致し

て居るのである。其の形に現はれた所の異ふのは其の時代が異ふからである。必ずしも其の形に囚はるゝには及ばぬ。其の時と其の場合と、其の相對する人にと最も適當なる方法に依れば宜いのである。章安大師が「涅槃經疏」の中に

取捨宜しきを得て一向にすべからず。

といつた通りである。

さて折伏を行するに當つて覺悟して居なければならぬのは、之が爲に種々の迫害にあふことである。それは此の不輕菩薩の例によつても知らるべきである。人には誰でも執著心がある。自ら善いと思ひ定めて居ることを捨てるといふことは容易に出來ぬのが凡夫の常である。されば之に對して折伏を加へて其の反省を促し、其の過を改めて善に移ることを勸むる時には、却つて憤慨して種々の迫害を加へて來るのである。折伏を加へんとする者は豫め之を忍受する覺悟がなければならぬ。其の有らゆる迫害を忍受する覺悟は、佛の大恩に感激するの情よりして生み出さるべきものである。法華經勸持品の中に於て諸菩薩が釋尊に對して、此經を弘めんが爲には有らゆる迫害に堪へ、有らゆる艱苦を忍ぶべきことを誓ひ、

我等佛を敬信して當に忍辱の鎧を著るべし。是經を説かんが爲の故に、此の

諸の難事を忍ばん。

といつたのは即ち此の意である。佛が吾等一切衆生を救はんが爲に世に出られて、有らゆる艱苦を忍んで吾等の爲に貴い大乘の教へを説かれた。此の洪大無邊の恩に感激するものは、如何にもして此の恩に報じなければならぬといふ考へを起すべきであるが、如何にしたならば報恩が出来らうか。それは佛の望んで居らるゝことに、多少なりとも吾等の力を添ゆるより外に途はない。佛は一切衆生を教化し救護することのみを志として居らるゝのである。されば佛の正法を世に弘めて、佛の努力に對して多少なりとも御力添へをすることが出来た時に、初めて報恩の志が達せられたわけなのである。

然るに吾等が佛の正法を弘めんとするに當つて、世間多數の人が邪法を信じて居るならば、此の邪法を排斥しなければ正法は決して世に弘まらぬのである。譬へば自分が車を推して道を進んで行く時に、その道を塞いで居る他の車があるならば、それを片寄せなければならぬ。他の車の爲に吾等の進むべき道が塞がれて居ては、如何に吾等の車を進めやうとしても到底不能である。是れ折伏の必要なる所以である。但し其の車を片寄せた爲に其の車に乗つて居る人に迷惑をかけるのではない。其の車に乗つて居る人を吾等の車に移らせて、以前よりもモット

早く其の道を進んで行けるやうにしてやるのである。折伏は決して他の人を排斥するのではない。他の人を救ひ上げてやるのである。誤つた道から引き出して正しい道へ入れてやるのである。而も此の意を了解せずして、折伏を行する者に對して却つて迫害を加へて来るものがあるが、それは何處までも忍ばなければならぬのである。それは如何にもして佛恩に報じたいといふ念が強ければ必ず忍び得らるべきである。彼の諸菩薩は難を忍ぶことの理由を説いて、

我身命を愛せず、但だ無上道を惜む。

といつた。無上道とは即ち佛の正法のことである。佛の正法の世に行はれぬことを惜むといふ至情から、如何なる難をも忍ぶのである。之が爲には身命を失ふことさへも敢て厭はぬのである。是れ實に佛の洪大無邊なる恩に感激すると共に、此の如き大法を信することを知らずして邪法に惑はされ、切角に具有せる其の佛性を空しくする人を哀愍する念の強盛なるが爲なのである。

大乘を學ぶものは佛の御心を以て吾が心としなければならぬ。即ち一切衆生を教化し救護することに力を盡さうといふ念を決して失つてはならぬのである。世間の汚濁に遠ざかり、閑居して獨り其の清淨なる生活に安んずるのは小乗の徒の爲すことである。それは世の迷へる者を

哀愍する念の足らぬものである。されば涅槃經には

若し善比丘、法を壞る者を見て、置て呵責し驅遣し舉處せずんば、當に知るべし是人は佛法の中の怨なり。若し能く驅遣し呵責し舉處せば是れ我が弟子にして眞の聲聞なり。

といつてあるのである。善比丘といふのは能く佛戒を持ち、清淨なる生活をして居る人のことである。その善比丘でも折伏に努めなければ佛法の敵と見做さるゝであらうといふのである。法を壞る者といふのは、正法の世に弘まる妨げを爲し、邪法を世に弘めて多くの人を惑はす者のことである。之に對しては嚴しい制裁を加へなければならぬ。呵責するといふのは之を責めて其の非を自覺せしむることである。驅遣するといふのは其の人を排斥して、其の説く所の邪法であることを明かにすることである。舉處するといふのは其の邪法の流布するのを止むるために然るべき處置を取ることである。此等の事に力を盡してこそ眞の佛弟子と稱せらるべきである。左様な邪法を弘むるものを其の儘に措いて敢て問はぬものは、たとへ平生清淨なる生活をして居るものでも、之を佛法の敵と見做すべきである。たとへ極言してある。それは慈悲心の足らぬものであるからである。譬へば吾が眼前に於て一の惡人が罪もない人を殺すのを見て、

此の人を助けやうともせず、手を袖にして傍觀して居るならば、たとへ自ら手を下して其の惡人の助けをしないでも、其の同類と見做さるべきである。假にも罪なくして殺されやうとする人に同情をもつならば、之を傍觀することの出来るものではない。折伏に力を盡し得ぬ者もこれと同様の罪を犯したものと云ふべきである。

邪法に對して折伏を加へるのには二つの目的がある。一には其の世間を惑はすのを防ぐことである。世間には思慮の深い人は甚だ少い。大多數の者は其の周圍に惹かされて何れへでも靡くものである。されば邪法を弘むるものを制裁しなければ其の害の及ぶ所は測り知られぬのである。之を折伏することは世間に對する大なる恩惠といふべきである。二には其の邪法を弘むる人を覺醒せしむることである。いかに邪法に心を打込んで居る者でも、其の本來具有する所の佛性を失ひ盡すといふことはない。されば之を惡人として見捨てゝしまふべきではない。之を折伏して其の非を自覺せしめさへすれば、今まで邪法を弘むる爲に用ゐた力を正法の爲に用ゐ得るやうになるのであるから、折伏を加ふることは其の人に對する大なる恩惠といふべきである。されば釋尊は之を稱して「是れ我が弟子」と仰せられたのである。又是れは立派な菩薩行であるのに「眞の聲聞なり」と仰せられたのも大に味ふべき所である。聲聞とは小乗の教へ

を學んで覺を得たものであるが、前にも度々いつてある通り、小乘を學ぶのは大乘を學ぶ階梯として役に立つので、大乘を學び得てこそ小乘を學んだかひがあるわけである。それ故に菩薩行の出來たものを「眞の聲聞」として稱揚せられたのである。

人の過失を見て之に忠告もせずして捨て置くのは不親切の甚しきものであつて、決して佛弟子の爲すべきことではない。たとへ一時は彼の過失を責めた爲に彼の怒りを沽つても、誠心を以て之を諫むる時には彼も亦必ず反省すべきである。斯くてこそ友として交はつたかひがあるのである。されば又涅槃經には、

慈無くして詐り親むは是れ彼が怨なり。能く糾治せんは是れ護法の聲聞にして眞の我が弟子なり。彼が爲に惡を除くは即ち是れ彼が親なり。能く呵責する者は是れ我が弟子、驅遣せざる者は佛法の中の怨なり。

ともいつてある。實際慈なくして詐り親むといふ程度の交際が世間には多いのである。其の人の感情を害しても自分に少しの利益もないと思ふところから、其の過失を見ても之を戒めもせず、諫めもせず、表面親友を装うて居て、其の人が其の過失の爲に大なる禍にあへば、其の禍の自分に波及せぬやうに遠退いて居るといふやうなのが凡夫の常である。佛弟子は決して斯う

いふ態度を取るべきものではない。親は其の子に對して眞の愛情をもつて居るから、其の子の病に罹つた時には、或は之に鍼灸を加へ、或は之に苦い藥を與へ、其の子が之を嫌つても或は時として親を怨んでも、親は決して怨まるゝことを厭はずして唯だ其の子の病を除かんことにのみ心を盡すのである。眞の佛弟子たる者は此の如き心を以て一切の人に臨まなければならぬ。それ故に釋尊は「彼の爲に惡を除いてやる者は彼の親ともいふべきものである。これこそ眞の慈悲である」と仰せられたのである。此の慈悲心があつて初めて折伏を行ひ得べきである。されば折伏し得る人は攝受し得る人でなければならぬのである。

前にいつた通り、其の過を責めて之を改めさせ正しき道に入ることを得しむるのが即ち折伏である。其の善を認めて之を獎め之を勵まし、益々其の善を長せしむるのが即ち攝受である。法を弘むるの道は此の攝折の二門より外にはない。攝折はその途を異にするけれども、その慈悲心より出るといふ點に於ては一致して居るのである。若し他人に折伏を加ふるに當つて慈悲心に缺くる所があれば、それは折伏ではなくて、鬭争となつてしまふのである。折伏と鬭争とは往々其の外形に於て相類したものと、如くに見えるけれども、其の精神に於て全く相反して居る。折伏は彼を覺醒せしめんことを目的とするものである。鬭争は勝つて吾が勢力を伸さんこ

とを目的とするものである。折伏は彼の爲であるが、鬭争は我の爲である。折伏は已むを得ずして爲すものである。鬭争は我より好んで爲すものである。折伏は菩薩行であるが、鬭争は修羅の所行である。日蓮上人は其の生涯の間全く折伏を以て終始されたのであるが、自ら其の理想とする所を説いて

日蓮が慈悲曠大ならば、南無妙法蓮華經は萬年の外、未來までも流るべし。――

報恩鈔

といはれた。是れは折伏が菩薩行であることを最も力強くいはれた語として、特に注意すべきである。

されば眞に折伏を行じ得るものは、必ず攝受を行じ得るものでなければならぬのである。攝受を行ずるものは、攝受せらるゝ者の爲に深く喜ぶのである。折伏を行ずるものは、折伏せらるゝ者の爲に心から之を悲しむのである。彼の爲に喜ぶのも、又彼の爲に悲しむのも共に是れ慈悲心に出るものである。折伏して他を屈伏せしめた時には、勿論大なる喜びを感じるのであるが、それは自分が勝つたのを喜ぶのではない。彼が其の迷ひを捨て得たことを彼の爲に喜ぶのである。折伏して他を屈伏せしめて自ら得意を感じるが如き者があれば、それは折伏と稱し

ながら鬭争をして居る者なので、佛の呵責を免れ得ぬものといふべきである。折伏を以て終始せられた日蓮上人は

鳥と蟲とは鳴けども涙おちず、日蓮はなかねども涙ひまなし。此涙は世間の事にはあらずたゞ偏に法華經の故なり。――諸法實相鈔

といはれた。其の涙は法華經に背く人の爲にも注がれ法華經を信する人の爲にも注がれたのである。法華經に背く人の爲には之を悲しみ悼むために涙を流し、法華經を信する人の爲には其の未來の成佛を喜んで涙を流されたのである。心の中には泣きながら強い折伏を加へられたのであるから、其の折伏には非常なる力が籠つて居たわけである。元來慈悲心が深いのであるから一たび法華經に歸依した者に對しては、之を吾が子の如くに愛護し教訓せらるゝので、其の情の濃かなことは實に讚歎すべきものである。例へば四條金吾に與へられたる消息の中には、返す返す今に忘れぬ事は、頸切られんとせし時殿は伴して馬の口につきて泣き悲み給ひしをば、いかなる世にも忘れ難し。設ひ殿の罪深くして地獄に入り給はゞ日蓮をいかに佛になれと釋迦佛こしらへさせ給ふとも用ひ參らせ候べからず、同じく地獄なるべし。日蓮と殿と共に地獄に入るならば釋迦佛法華經も地

獄にこそ在おほしまさすらめ。暗やみに月つきの入いるが如ごとく、湯ゆに水みづを入いるが如ごとく、氷こほりに火ひをたくが如ごとく、日にち輪りんに暗やみを投なぐるが如ごとくこそ候さふちはんずれ。

とある。此の如き温情あつてこそ、初めて真に折伏を行することが出来る筈である。

また折伏を行する人は絶えず自ら反省して、自己の力の足らぬことを愧ぢ、常に佛菩薩の加護を祈るといふ心がなければならぬのである。譬へば高山に登る人が其の途中で立ち止つて、はるかに其の麓を見下した時には、いつ迄も麓の平地にのみ立つて居て、此の高山に登るべき路を求め得ぬ人を心から氣の毒に思つて「何故早く登つて來ぬか」と、聲を高たかくして之に呼びかけるのである。それが即ち折伏である。併しながら自分はまだ此の山の絶頂まで登りつめた者ではないから、其の絶頂を仰ぎ見て「まだ大に努力して此の登り道を進まなければならぬ。此處で止つてしまつては、切角登つて來たかひが無い」と自ら勵ますことも極めて必要である。若し其の途中で止つてしまふならば、たとへ其の麓に立つて居る人に比べて、はるかに高い所に達して居るとしても、絶頂に達し得ぬといふ點に於ては同一なのであるから、決して自ら誇るやうな念を起してはならぬのである。たとへ大乘の教へを學んで多少は得る所があつても、佛の境界に到達せぬうちは、まだ一切の煩惱を離れ盡したものであるから、自ら足

れりとすべきではない。日蓮上人の如きは法華經を信することを知らぬ者に對しては、常に最も劇烈なる折伏を加へられながら、自ら省みて常に足らざる所の多いことを認め、自ら「名字の凡夫」と稱して居られた。殊に其の晩年に於て身延山に籠つて居られた際にも、

靈山淨土の教主釋尊、寶淨世界の多寶佛、十方分身の諸佛、地涌千界の菩薩等
梵釋日月四天等冥にか加し顯けんに助たすけ給たまはずば、一時とき一日いちにちも安穩あんおんなるべしや。——撰

時鈔

といつて居らるゝのである。折伏を行する者は誰も皆此の如く自ら反省しなければならぬのである。

以上に於て此の勝鬘經の正宗分は終つて居るので以下は其の流通分である。他の諸經と比べて見て、此經の流通分は非常に簡單に思はれるのであるが、併しながら之を熟讀して見ると、此處にも貴い教訓が見出さるゝやうに感ずるのである。

爾その時ときに世尊せそん、勝光明しょうくわうみやうを放はなちて普あまねく大衆だいしゆを照てり、身みの虚空こくうに昇のぼること高たかさ七多た羅樹らじゆ、足あしに虚空こくうを歩あゆみて舍衛國しゃゑこくへ還かへりたまふ。時ときに勝鬘夫人しょうまんぶにん、諸もろくの眷屬けんぞくと合掌がつしやうして佛ほとけに向むかひたてまつり、觀みるに厭足えんそくなく自暫じしほらくも捨すてず、眼めの境きやうを過すぎ已まつ

て踊躍し歡喜し、各各に如來の功德を稱嘆したてまつり、還つて城中に入り友稱王に向ひて大乘を稱嘆す。城中の女人七歳已上は化するに大乘を以てす。友稱大王も亦大乘を以て諸の男子七歳已上のものを化し、國を擧げて人民皆大乘に向ひき。

此より所謂流通分に入るのであるが、前にもいつた通り、流通分に於ては此經に説かれた所が正しく信仰せられ、又正しく實行せらるゝに於ては如何なる大功德があるかといふことを説いて、此經を読む人の信仰を勧めらるゝのである。抑々佛法を學ぶ者は共に此の法の最も尊きことを知つて、心に深く之を信じ、身に篤く之を行する決心をしなければならぬのである。法の尊ぶべく重んずべきことに就て、心地觀經の中には、

法寶は能く一切生死の牢獄を破る。猶ほ金剛の能く萬物を壞るが如し。法寶は能く痴闇の衆生を照す。猶ほ日光の世界を照すが如し。法寶は能く衆生に喜樂を與ふ。猶ほ天樂の諸天人を樂ますが如し。法寶は衆生をして彼岸に度らしむ。猶ほ堅牢の大船の如し。法寶は四魔を破し無上菩提を證す。猶ほ金剛の甲

胃の如し。

とあるが、如何に多くの經論を読み、如何に久しく法を學んでも、たゞ學んだのみでは此の如き利益は決して現はれぬ。たゞ深く之を信ずると共に、其の學び得たる所を實行することに努むる者のみが此の如き利益を受くことが出来るのである。併しながら「書經」の中にも

之を知るの艱きにあらず、之を行ふこと惟れ艱し。

とある通り、吾等凡夫はたとへ貴い法を聽聞して、貴いとは感じてても、自ら之を身に行ふといふことは容易に出来ぬのである。是れ經典に流通分の必要缺くべからざる所以である。如何に良い薬でも之を服用しなければ病を除くことは出来ぬ。切角良い薬を與へられながら之を服用する氣になれぬやうな人が世間には夥しくある。然るに此の薬の効驗をいろ／＼説明されると、それでは飲んで見やうかといふ氣が起るものである。又此の薬を飲んで重い病を除き得たといふ實例があれば、もはや躊躇するに及ばず、直ちに飲んで見やうといふこととなる。流通分によつて與へらるゝ利益も其の通りである。今此の勝鬘經に於ても、其の正宗分に於て大乘の深い教義が懇切に説かれてあつた上に、流通分に入つて友稱王と勝鬘夫人とが共に深く大乘を信じ又此の大乘の法を以て其の人民を感化したる實例が擧げられてあるのは、吾等

後世の者の信仰心を勵ますために大なる力となるものである。前にもある通り此の勝鬘夫人は佛に歸依するやうになつてから未だ至て日が浅いのである。況して友稱王は其の妻よりして佛の尊いこと大乘の貴いことを聽いて之を信するやうになつたといふのであるから、其の信仰は猶ほ更日の浅いものである。それでも一たび至心を以て佛を信じ、大乘の法に歸依するといふことになれば、其の人民に最も大なる感化を與ふる力を具へ得たのである。此の事實は吾等に對して眞に大なる教訓を與ふるものといはなければならぬ。

○勝光明を放ちて 佛の光明に照されたものは皆疑怯の念がなくなり、今までに聽聞した所を固く信じ又之を自分の身に實行しやうといふ念が起つた筈である。○七多羅樹 多羅樹は東印度に多い樹で朱欄の樹に似て赤色の實あり、其の高さは七八十尺に達するといふことである。○舍衛國 此の時釋尊が舍衛國の祇園精舎に居たまへることは、此經のはじめに出て居る通りである。○眼の境を過ぎ已つて 佛の御姿の見える間は唯だ感激の念に充ちて殆んど身動さもせずに見送つて居たのであるが、御姿が見えなくなつてから、今まで聽聞したことの貴さを思ひ出して踊躍したのである。人情としてまことにさもあるべき事である。○友稱王に向ひて 勝鬘夫人が其の夫たる友稱王に向つて大乘の教の貴いことを物語つたのである。友稱王は前

にいつてある通り、阿踰闍國の國王である。○大乘を稱嘆す 王が大乘に歸依したことは記してないけれども、其の人民に大乘の信仰を勧めたことが下にあるのを以て見ると、王が深き信仰に入つたことは明かである。是れ全く夫人の力である。○城中の女人 是れは勝鬘夫人が大乘を弘めて其の國中の女人に其の信仰を勧めたことである。○七歳已上 其の頃の印度では男女共に七歳になつて初めて教育を與へるのであるから、其の教育を受くる最初から、大乘の教義を以て其の精神教育の基礎とさせたのである。

勝鬘夫人の信仰の力が其の夫たる友稱王を動かし、夫婦共に大乘佛教に歸依して、其の國民の精神教育の基礎を大乘佛教に置くやうになつたといふのは、まことに貴い事である。昔の印度で行はれた普通教育は凡そ五つの科目に分れて居たので、之を稱して「五明」といふのである。明とは「心を明かにする」といふ意味で、即ち學科をいふのである。其の五明とは

一に聲明。二に工巧明。三に醫方明。四に因明。五に内明。

のことである。第一の聲明といふ中には、讀み方と書き方と音楽とが含まれて居る。第二の工巧明といふ中には手工と畫學と計算法とが含まれて居る。第三の醫方明といふ中には、衛生學の初歩のものと藥物學の初歩のものが含まれて居る。第四の因明は即ち今日の論理學である

が、文法も此の中に含まれて居る。それから第五の内明といふのが即ち精神教育であるが、佛敎の起らぬ前には主として婆羅門敎の敎理を基礎として精神教育が施されて居たのである。斯く古代の印度に於ける普通教育は、まことに能く要領を得たものであつた。是れは少しく餘談に渉るやうであるが、今日吾が國の教育はあまり學科の數が多すぎるやうである。殊に普通教育の初歩の時代から多くの學科が詰め込まれて、幼年の者は思想の統一がつかず、兎角散漫になつて行くために、結局敎へる方も習ふ方も、精力を空費する傾きがあるのはまことに惜むべきことである。三千年前の印度人に學ぶ所がありはせぬか、少しく考へて見なければならぬのではないか。

それは暫く措いて、今此の友稱王夫婦が其の國の男女七歳以上の者を、盡く大乘によつて敎化したといふのは、所謂内明を大乘佛敎の敎理を基礎として敎へさせたことであると解すべきで、即ち佛敎を以て國民教育を立てたことに外ならぬのである。誰でも惡を去つて善に就かなければならぬのであるが、人々の境遇事情はそれ／＼に異ひ、地位職業もそれ／＼に異ふのであるから、如何なる善事を行ふべきかといふことは其の人々によつて必ずしも同一ではない。たゞ其の心の根柢に於ては同一でなければならぬ。若し人々の心が佛の御心と通ひあふやうに

なつて居れば、いつでも其の場合に應じて最善を盡すことが出来る筈である。涅槃經の中にある耆婆大臣の言に

臣佛説を聞くに、一善を修する心は百種の惡を破る。大王少金剛の能く須彌を破るが如く、亦少火の能く一切を燒くが如く、少毒藥の能く衆生を害するが如く、少善も亦然り。少善と名くと雖も其の實は是れ大なり。何を以ての故に。大惡を破るが故に。

といつたが、其の一善を修する心とは即ち佛の御心と一致した行ひがしたいといふ心をいふのである。心の土臺が此處に定まつて居れば、初めは小善を行ふのみであつても、日に日に進んでやがて大善を行ふやうになれるのであるから、其の効果は實に莫大なものである。今此の友稱王夫婦が教育の基礎を大乘佛敎に置くことを決定し、幼年の時から正しい信念を養はせるやうにしたのは、まことに能く國に王たる者の責任を解し得たものといふべきである。王は政治の中心であると共に敎化の中心でなければならぬ。人化を敎へ導くことは王者の一身に負へる種々の責任の中に於て殊に重大なるものである。前にも度々いつた通り、釋尊は國王を敎化することに特に力を用ゐられたが、それは國王一人の其の國に與ふる感化の極めて大なることを

認められたからである。友稱王夫婦の如きは釋尊の御心に最も叶へる者といふべきであらう。友稱王が正しき信仰を得たのは其の妻たる勝鬘夫人の感化に依るのであるが、勝鬘夫人が正しき信仰を得たのは其の父母たる波斯匿王及び末利夫人の感化に依るものである。一家一族の中に最初たゞ一人でも正しい信仰をもつて居るものがあれば、それはやがて大なる力となるものであるといふことが之に依つて能く證せられて居る。眞に貴ぶべきは一人の力である。一人の力がいつ迄も一人に限られては居ないのである。

若し自心清淨なれば一切衆生の心清淨なり。

と大莊嚴法門經にあるのは、感化の力の極めて貴ぶべきことを力説したる言である。法華經の嚴王品には妙莊嚴王が雲雷音宿王華智佛に従つて教へを受け、非常に高德なる菩薩となつたことが記されてあるが、此の王は元來婆羅門教に歸依して、佛教の貴ぶべきことを知らなかつたのであるが、其の二子に感化せられて佛教を學ぶやうになつたので、王は二子に對して深く感謝し佛に對して

世尊、此の我が二子は已に佛事を作しつ。神通變化を以て我が邪心を轉じ、佛法の中に安住することを得て、世尊を見たてまつることを得しめたり。此の二

子は是れ我が善知識なり。宿世の善根を發起して我を饒益することを欲するが故に我が家に來生せり。

といつた。佛も王の爲に深く之を喜ばれて、

若し善男子善女人は善根を種ゑたるが故に世世に善知識を得ん。其の善知識は能く佛事を作し、示教利喜して阿耨多羅三藐三菩提に入らしむ。大王當に知るべし善知識は是れ大因縁なり。

と仰せられた。此の二子は淨藏といひ淨眼といふのであるが、其の母の淨德夫人といふのは久しく佛法を信じて居た人で、二子も亦母の感化を受けたものであつた。此の如き例はまだ諸經の中に多く見出されるのであるが、要するに一人の力の極めて大なることを證するものであつて、吾等の爲に貴い教訓と申すべきであると思ふのである。

爾の時に世尊祇洹林に入りて長老阿難に告げ、及び天帝釋を念じたまふ。時に應じて帝釋諸の眷屬と忽然として至つて佛前に住す。爾の時に世尊、天帝釋及び長老阿難に向ひて、廣く此の經を説きたまふ。説き已つて帝釋に告げて言は

く、汝當に此の經を受持し讀誦すべし。憍尸迦、善男子善女人ありて恒沙劫に於て菩提行を修し、六波羅蜜を行ぜん。若し復た善男子善女人ありて聽受し讀誦し乃至經卷を執持せんに、福彼より多からん。何に況んや廣く人の爲に説くをや。是故に憍尸迦、當に此の經を讀誦して、三十三天の爲に分別し廣説すべしと。復た阿難に告げたまはく、汝も亦受持し讀誦して四衆の爲に廣く説くべしと。

此の段に於ては釋尊が其の大弟子の一人たる阿難及び帝釋天に對して、勝鬘夫人の説いた所を普く説き弘むべきことを命せらるゝのである。勝鬘夫人は妙齡の一婦人にすぎぬ。又佛教を信するやうになつてから未だ日が浅いのである。併しながら其の覺り得たる所は能く佛の御心と一致し、能く大乘の眞諦を得たるものであるから、佛も之を善と稱せられ「是の如し是の如し」とて其の説く所に少しも足らぬ所のないことを證せられたのである。而も釋尊は之を稱揚せられたのみならず、祇園精舎に於て阿難及び帝釋天に對して、勝鬘の説いたことを自ら繰返して説かれ之を普く世に説き弘むることを命せられたのである。されば吾等の如くに後世にな

つて此の經を讀むものは、之を勝鬘といふ一婦人の説いたものと思はずに、之を佛説として尊重し深く之を信すると共に、又吾等の身に之を實行せんことを期すべきである。また阿難は大弟子の一人である。帝釋天は天上界の大王である。何れも勝鬘の如き一婦人とは到底比較することの出来ぬほどに高德尊貴なる人々である。然るに釋尊は之に對して勝鬘の説いたことを世に説き弘めよと命せられ、阿難や帝釋天も唯々として其の命に従つたのである。此の事は吾等に限りなき感激を與ふるものである。

法華經の譬諭品には舍利弗が釋尊より授記せられ、今よりなほ久しく菩薩道を勵んだ末には華光如來といふ佛になるであらうといふことを許された。其の次の信解品に入ると、迦葉等の

人々が此の舍利弗の授記に就て非常なる歡喜の意を表し、我等今佛前に於て、聲聞に阿耨多羅三藐三菩提の記を授けたまふを聞きて心甚だ歡喜し、未曾有なることを得たり。謂はざりき今忽然に希有の法を聞くことを得んとは。深く自ら慶幸す、大善利を得たりと。

といった。それは舍利弗が今眼前に於て授記せらるゝのを見て、自分等も必ず授記せらるゝ時が來やうといふ確信を得たからである。舍利弗も迦葉等も同じく釋尊の弟子となつて久しく少

乗の教へを學び、所謂聲聞の中に在つては先輩と稱せられて居たのである。併しながら將來に於て佛の境界に到達することが出来やうなどは夢にも思つて居なかつた。然るに其の一人たる舍利弗が、今より菩薩道を勵んで怠らなければ後には必ず佛の境界に到達し得らるべき者であることを證せられたのであるから、「然らば自分達も今より菩薩道を勵んで怠らぬに於ては、舍利弗と同じく將來に於て佛の境界に到達することが出来るに違ひない」といふ希望を懐くことが出来た。「未曾有なることを得たり」といつたのは尤もなことである。全く今まで望み得られぬと思つて居たことが叶ふのであるから、

世尊は大恩まします。希有の事を以て、憐愍教化して我等を利益したまふ。無量億劫にも誰か能く報ずる者あらん。

とまで申して、其の深き感謝の意を表したわけである。

今此の勝鬘夫人が授記を興へられ、又其の説いたことを釋尊が重ねて自ら説かれて、阿難や帝釋天に之を世間に弘通することを命せられたといふ事實を知るものは、誰も自身の前途に大なる希望をもたずには居られぬ筈である。一般世間の習はしからいへば婦人は男子に及ばぬものとなつて居る。殊に昔の印度に於てはさうであつた。又年の若い者は多くの經驗を積んだ老

人には及ばぬものとなつて居る。又特別に印度に於ては、人間界と天上界との間には非常なる高下の區別があつて、人間界に於て善行を重ねたものは次の生に於て天上界に生れると信じられて居たのである。然るに妙齡の婦人たる勝鬘のいつたことが佛意に叶つて居るといふので、釋尊は祇園精舎に於て重ねて之を説かれ、之が弘通を長老たる阿難と、天上界の王たる帝釋に命せられたといふのは、實に驚くべき事といはなければならぬ。而も此の事に就て阿難も帝釋も少しも驚いた様子はなく、唯々として其の命に従つたのである。それは釋尊の繰返して説かれた所が眞に大乘の精神を明かにしたものととして、二人を心服せしめたが爲と解さなければならぬ。それ程に正しくして且深いことを勝鬘は説き得たのである。それは佛を深く信ずることに依つて、其の本來具有せる貴い佛性が遺憾なく發揮せられたからに違ひない。佛性は何人も本來具はつて居るものであつて、此の佛性が充分に開發せらるゝに當つては、男女の區別とか老若の差とかいふものは全くなくなつてしまふのである。此の事を考へて見ると、前に引いた涅槃經の文に

一切衆生は定めて當に大信心を得べし。是故に説きて一切衆生悉く佛性有りと
いふなり。

といふ語が如何にも意義深く感ぜらるゝのである。而して其の「一切衆生」といふ中に吾等も勿論入つて居るのであると思ふと、大なる歡喜を感ぜずには居られぬのである。

○祇洹林 世間で一般に祇園精舎として知られて居る。此の經の劈頭に「給孤獨園」とあるのと同じ所である。此の精舎は須達長者の建てたものであるが、此の長者は慈悲心が非常にあつて、多くの孤獨の者を救うたので、世間で之を救孤獨長者と稱した。此の人が祇陀太子の所有の園林を買ひ受け、其の中に釋尊の說法したまふ爲に精舎を建てたので、此處を給孤獨園といふのである。又此の長者の志に感じて、祇陀太子が其の園に屬する樹木だけは無償で與へたので、祇樹とか祇園とかいふ名が起つたのである。即ち釋尊は勝鬘夫人に別れて此處へ歸られたのである。○長老阿難 阿難は釋尊の從弟で、所謂十大弟子の一人である。殊に二十五年間も常に釋尊の側に侍して御世話を申したので、多くの佛弟子が皆此の人を長老として尊重して居た。それで長老阿難といふのである。○天帝釋 忉利天の主にして須彌山の絶頂に居り、印度の昔に於て尊ばれた諸天の中でも殊に重んぜられたものである。深く佛法に歸依し、佛法の弘通に特に力を與ふることを誓つたと傳へられて居る。○廣く此の經を 前に勝鬘夫人の説いた所が盡く佛意に一致して居るから、釋尊は重ねて其の大意を二人の爲に説いて、之を普く世間

に弘むべきことを命ぜられたのである。○菩提行 菩提とは佛智のことである。佛智を具ふるに至らんことを目的として修行するのが菩提行で、即ち菩薩の修行のことである。○六波羅蜜 即ち菩薩行のことで、その委しい説明は前の「攝受正法章」に出て居る。○聽受し讀誦し 此の勝鬘經を説くのを聽きまた重ねて自ら之を讀誦するのである。○經卷を執持 此の勝鬘經を信じ、また其の信を持続することに努むるのである。○彼より多からん 唯だ菩薩行を修めて居る者よりも、此の勝鬘經を信する者の方が多くの福を得るといふのである。此の勝鬘經は大乗の精髓ともいふべき所を説いたものであるから、之によつて修行すれば、たゞ漫然と菩薩行を修めて居るよりも得る所が多いわけである。○憍尸迦 帝釋天がもと人であつた時の姓だといふことである。○三十三天 帝釋の統理して居るところの天上界が三十三に分れて居るので、「忉利」といふのは三十三を意味する梵語である。

釋尊が祇園精舎へ歸られて、歸つたといふことを長老阿難に告げられたとあるが、それは阿難が定まつた侍者であつたからである。此の人は斛飯王の子で提婆達多の弟であつて、釋尊には從弟に當るのである。阿難といふのは「歡喜」といふ意である。宛も釋尊の成道の日に生れたので此の名をつけられたといふことである。兄の提婆は佛敵となり、佛法の流布を妨げて大な

る罪を積んだのであるが、阿難は至て篤實な性質で二十五歳にして釋尊の御弟子となり、御入滅まで二十五ヶ年の間其の侍者となつて、一日と雖も釋尊の側を離れず誠意を盡して事へたのである。増一阿含經には

時を知り物を明にし、至る所疑ふこと無く、憶ふ所忘れず、多聞廣遠にして、堪忍して上に奉ぜるは阿難比丘是なり。

とある。釋尊が御入滅の時には懇ろに御介抱申し、最後の御教訓をも他の諸弟子と共に聞いたのであつた。何にせよ二十五ヶ年の間斷えず御側に事へて居たのであるから、釋尊の説かれた所を最も多く聞いて最も能く記憶して居たので「多聞第一」と稱せられたのである。

釋尊御入滅の翌年に至り、迦葉が發起して阿闍世王の保護の下に第一回の結集を行つた。結集とは釋尊が平生説き置かれたことを蒐集し整束して後世に傳ふことをいふのである。此の大事を成就するために各地から佛弟子が集つて、各々釋尊から聽聞したことを語りあひ、結集の材料としたのであるが、阿難ほど多く釋尊の説法を聽聞して居るものは無いから、阿難の記憶して居る所を中心とし、他の者は之を補ふことゝ定め、先づ阿難に請うて高座に上つて、其

の記憶して居る所を説かせ、迦葉等は皆之を謹聽した。阿難は釋尊御入滅の時のことを思ひ出して悲みに堪へられず、口を開くことも出来なかつたのであるが、人々が肅然として自分の説くのを待つて居る有様を見て、釋尊が斯くまで多くの人々に心から歸依せられて居たことに今更ながら大なる歡喜を感じ、強いて自ら氣を勵まして説いたといふことである。其の時の様子を増一阿含經の中に記して

四部を顧眄して虚空を瞻、悲泣涙を揮ひて自ら勝へず。便ち光明を奮ひて顔色を和らげ、普く衆生を照すこと日の初の如し。

とある。其の説く所は盡く佛の平生説かれた所なのであるから、之を説いて居る阿難の身から光りが出て聽く者を照して居るやうな有様で、人々は日の出を仰ぎ見るやうな感じがしたといふのである。阿難は此の如くに優れた人であつたので、長老と稱せられて多くの佛弟子の間に重きを爲して居たわけである。

また帝釋天といふのは印度で尊ばるゝ諸天の中に於て殊に崇敬せられて居るものであるが、梵名は「釋迦提桓因陀羅」で、之を略して「釋提桓因」といふのである。「提桓」といふのは天と譯し、「因陀羅」といふのは「帝」と譯すのである。而して「釋迦」とは其の姓である。印度の昔に於

ては此の人間界に於て多くの善事を積んだものが、次の生に於て天上界に生るゝものと信じられて居た。此の帝釋天は人間界に於て非常に多くの善事を積んだ報として、後には天上界に生れて三十三天を統理する身となつたといふので、其の人間界に在つた時の姓が「釋迦」といふのであつたから、天上界の王となつて後も其の姓を以て呼ぶのである。されば釋提桓因を譯せば「釋天帝」となるのであるが、之を反轉して帝釋天といつて居る。此の帝釋天の居る所を喜見城といふのであるが、喜見城の側に善法堂がある。帝釋天は人間界を管督し、人々の行ひの善惡によつて之に吉凶禍福を與ふるのであるが、其の下に所謂四天王があつて、各分掌して四方の人民の行ひを視察し、其の結果に就て公平に評定して、之を帝釋天に報告するのである。善法堂は即ち此の評定の場所であると考へられて居るのである。帝釋天は首に寶冠を戴き身に種々の瓔珞を纏ひ、喜見城外に四つの遊園を有し、多くの綵女にかしづかれて榮華の生活をして居るのであるが、人間の吉凶禍福を定めるといふ大任を負うて居るのであるから、其の心は最も公平にして潔白でなければならぬ。それで釋尊に歸依して其の教化を受け、常に徳を修むることを怠らず、又三十三天に住するものも亦自ら帝釋天の感化を受けて佛に歸依するやうになつて居るといふのである。

佛教の興らなかつた前は婆羅門教のみが信せられて居たので、その中には九十五六も分派があり、随分深い哲學説なども其の中に發達するやうになつた。併し大體に於て波羅門教の信仰といふものは、來世に於て天上界に生れることを理想として現世に於て善行を勵むべきであるといふこと以外には出なかつた。或は坐禪をしたり、或は種々の難行苦行をするのも畢竟其の報として來世に天上界に生を受くることを目的としたのである。然るに佛教に於ては天上界に生を受くることを理想とするのは至て淺薄な考へ方であると教へられて居る。天上界は人間界の一切の苦勞を離れて、まことに平和無事な所であるといふが、單に平和無事であるといふことは吾等に眞の満足を與ふるものではない。吾等はあまりに多事多端な現世に生を受けて居るから平和無事の生活が理想的のものゝ如くに思はれるけれども、たゞ平和無事であるばかりでは生きるといふことの意義は更でない。全く無事であれば其の無事なのに厭きて、又何か事のあるのを望むやうになるのが人情である。されば天上界の者でも決して満足はないわけである。人間界の者でも天上界の者でも、眞に意義ある生活をするには、正しい教へに歸依して其の心の根本から立て直し、其の本來具有せる所の佛性を發揮し得るやうに努めなければならぬ。是れ即ち帝釋天を始めとして天上界の者も皆佛に歸依して、佛教を學ばなければならぬと

いふことが信せらるゝ所以である。

釋尊が祇園精舎に於て帝釋天を念せられたといふのは、此の勝鬘經の中に説かれた教へは大乗の教への深義を遺憾なく顯はしたものであるから、天上界にも人間界にも共に之を流布せしめたいといふ趣意に出たものである。佛の大慈悲は洪大無邊であつて、獨り人間界のみならず天上界にも及ぶものである。苟くも生命のあるものは皆佛性を具へて居るのであるから、皆佛教を學んで其の具有せる佛性を充分に開發して行くことに努むべきである。

時に天帝釋佛に白して言さく、世尊當に何んか此の經を名け、云何か奉持すべき。佛帝釋に告げたまはく、此の經は無量無邊の功德を成就せり。一切の聲聞緣覺は究竟し觀察し知見すること能はず。憍尸迦當に知るべし、此の經は甚深微妙にして大功德聚なり。今當に汝が爲に略して其の名を説かん。諦に聽け、善く之を思念せよと。時に天帝釋及び長老阿難佛に白して言さく、善い哉世尊、唯然り教を受けん。佛言はく、此の經をば歎如來眞實第一義功德といふ、是の如く受持せよ。不思議大受といふ、是の如く受持せよ。一切願攝大

願といふ、是の如く受持せよ。説不思議攝受正法といふ、是の如く受持せよ。説入一乘といふ、是の如く受持せよ。説無邊聖諦といふ、是の如く受持せよ。説如來藏といふ、是の如く受持せよ。説法身といふ、是の如く受持せよ。説空義隱覆眞實といふ、是の如く受持せよ。説一諦といふ、是の如く受持せよ。説常住安隱一依といふ、是の如く受持せよ。説顛倒眞實といふ、是の如く受持せよ。説自性清淨心隱覆といふ、是の如く受持せよ。説如來眞子といふ、是の如く受持せよ。説勝鬘夫人師子吼といふ、是の如く受持せよ。復た次に憍尸迦、此の經の所説、斷一切疑決了義入一乘道といふ。憍尸迦、今此の説勝鬘夫人師子吼經を以て汝に付屬す。乃至法の住には受持し、讀誦し、廣く分別すべしと。帝釋佛に白して言さく、善い哉世尊、頂受尊敬せんと。時に天帝釋、長老阿難及び諸の大會の天人阿修羅乾闥婆等、佛の所説を聽きて歡喜奉行しき。

最後に釋尊は此の經の中に説かれたる所が大乗の眞の意義を悉したものであるといひ、更に此の經の名を擧ぐるに及んで居るが、其の終りの二は此の經全體の名であつて、

前十四は此の經の内容を順を追うて擧げられたのである。されば此の十四名を讀めば、大體此の經の中に如何なる事が説かれてあるかといふことは能くわかるのである。今まで此の經の本文を説明するの之を十四章に分ち、「歎佛眞實功德章」より始めて、「如來眞子章」に至るまで、一々其の章の名を記して來たが、是れは固より自分が私に附けた名ではなく、古來の名に従つたのである。また古來の學者が此の十四章の名を立てたのも、實は此の段に擧げられたる十四の名目に基くものである。此の十四の名目が「如來の眞實第一義の功德を歎す」といふを以て始まり「如來の眞子を説く」といふを以て終つて居るのは特に注意すべきである。佛を知り佛を仰ぐといふことがなければ、いかに多くの經論を讀んでも、眞の信心といふものは起らぬのである。華嚴經には

若し諸の衆生あつて未だ菩提心を發さざるも、一たび佛名を聞くことを得ば、決定して菩提を成ぜん。

とあり、法華經には

一心に佛を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜まず。

とある。「佛名を聞く」といふのは唯だ佛の名を耳に聞くことではない。佛とは如何なる者であ

るかを解し得たことである。「佛を見る」といふのは佛の御姿が眼の前に見えるといふことではない。自分の心が佛の御心と通ひあつて、佛と共に在る心を以て毎日を送ることである。「菩提」といふのは智慧のことであるが、その智慧には無論實行が伴つて居るのである。多く讀み多く聞けば智解を得ることは出来るけれども、智解を得たのみでは實行は出来ぬ。實行する人は能く知ると共に能く信じた人である。

此の經を説いた勝鬘夫人は實際釋尊に見えて其の自ら解し得た所を語りその能く佛意に一致したことを認められたのであるが、末代に生れた吾等は親しく佛に見ゆることは出来ぬ。併しながら佛の御精神は吾等に遺されたる經典の中に打込まれてあるから、吾等が誠心をもつて之を讀誦し之を思惟し工夫するならば、たゞ其の深遠なる理を解し得るのみならず、宛ら親しく佛に接して、親しく其の教へを受くるやうな心にもなり得る筈である。前にも引いた語であるが、法華經の法師品の中には、此の經の貴いことを説いて

此の中には已に如來の全身有す。

といつてある。經典の中に佛の全身が宿つて居られるといふことを、佛が御自身に明言せられたのであるから、吾等は其の心をもつて經典を讀まなければならぬのである。徒らに多く讀

んで多くの術語を知つたのみでは、眞に經を讀んだものとはいはれぬのである。吾等は勝鬘夫人が佛の大乗の教へを魂を打込んで學んで能く其の深義を解し、その深義を解すると共に深く佛を信するに至り、深く佛を信するによつて信解共に具はつて佛の眞實の功德を讚嘆するに至つたことを此の經によつて知つたのであるが、是れこそ眞に吾等の共に仰いで範とすべきものでなければならぬ。釋尊は勝鬘夫人が此より多くの善根を積んで後必ず佛の境界に到達すべきことを説かれて「普光如來」と授記せられたのであるが、其の授記の語のはじめには

汝如來の眞實の功德を歎ず。此の善根を以て……

とある。吾等が種々の經典を讀みながら、いつ迄も凡夫の境界を脱し得ぬのは、要するにまだ「如來の眞實の功德を歎ず」といふ心が起らぬからであると思はなければならぬ。

此の勝鬘經の中心を爲すものは「攝受正法」といふことである。それは此の經文を通讀した人の共に認むる所である。正法を攝受するといふのは即ち菩薩行である。菩薩行を積んで怠らぬ者は結局佛の境界に到達し得らるべきである。されば攝受正法といふことほど大切なものは無い筈である。然らば正法とは如何なるものか。正法を攝受するに就ては如何なる心得が肝要であるか。正法を攝受するものは如何なる徑路を経て佛の境界に近づいて行くのであるか。此等

の問題を解決し得て初めて「攝受正法」といふことが明かになるので、此の經に於ては此等の問題が順を追うて解決せられてある。此等の問題が正しく解決せられた時に「吾は如來の眞の子である」といふ自覺が生ずるのである。此の自覺を得さへすれば、如何にしても其の信心の退轉する恐れはないわけである。此の經が如來の功德を讚嘆することを以て始まり、如來の眞子を説くことを以て終つて居るのは、まことに謂ありといふべきである。

○云何が奉持 持するとは其の信を持ち續けて、之を其の身に實行することである。其の決心をするに就て、此の經の中に於て説かれたことの要領を又改めて問うたのである。○無量無邊の功德を成就 此の經の中に説かれた所を能く信じて之を實行しさへすれば佛の境界に到達し得らるゝのであるから、此の經の中には無量無邊の功德が具はつて居るといふべきである。○歎如來眞實第一義功德 眞實第一義といふは佛の覺り得たまへる絶對の理のことである。佛は絶對の理を覺り、一切衆生の心を明かに知見したまふが故に、一切衆生を盡く救護せんがために教を説かれたので、これが即ち其の功德である。勝鬘夫人は深く信することに依つて佛の御心を能く知り得たるが故に、其の功德を讚嘆したので、即ち「歎佛眞實功德章」の内容をいふのである。○是の如く受持 此の經を受持せんとするには此の點に意を留めなければならぬとい

ふのである。○不思議大受 勝鬘夫人の説いた十大受のことである。是れは菩薩行を遺憾なく悉して居るので、之を實行すれば世を益すること實に莫大であるから、之を稱して「不思議」といふのである。即ち「十大受章」の内容を爲すものである。○一切願攝大願 勝鬘夫人の説いた三大願のことである。一切の願は畢竟此の三大願の中に包容せらるべきであつて、十大受といふのも三大願を基礎とするのである。これは「三大願章」の内容をいふのである。○說不思議攝受正法 攝受正法は即ち菩薩行である。之を行することに依つて自ら佛の境界に近づき得ると共に、一切衆生を教へ導くべき力も具はるのであるから、之を不思議と稱するのである。此の攝受正法のことを説かれたのが即ち「攝受正法章」の内容である。○說入一乘 一乘とは佛乘である。佛乘とは佛と成るべき道を説かれたものである。佛教の中には小乗もあり大乘もあるけれども、皆佛乘に歸入すべきである。佛は佛乘を説かんが爲に世に出られたのである。此の事を説かれたのが即ち「一乘章」の内容である。○說無邊聖諦 佛の説かれた所は盡く聖諦と稱せらるゝのであるが、其の中には方便の教へもある。眞に聖諦と稱せらるべきは即ち佛乘である。此の意味を説かれたのが即ち「無邊聖諦章」の内容である。○說如來藏 如來藏とは即ち佛性であるが、吾等は皆本來佛性を具有せるが故に、佛教を學んで佛の境界に近づくことも出来るの

である。此の事を説かれたのが「如來藏章」の内容である。○說法身 如來藏が遺憾なく開發せられて、一切の煩惱のなくなつたのが即ち佛の法身である。此の事を説かれたのが「法身章」の内容である。○說空義隱覆眞實 空義といふのは小乘に於て説かるゝ所である。小乘は大乘に入る階梯として説かれたものであるから、之を學んだのみでは佛の眞實の意はわからぬのである。小乘に止まるものは眞實を隱覆せるものといふべきで、此の事を説かれたのが「空義隱覆眞實章」の内容である。○說一諦 一諦とは即ち眞の聖諦のことである。此の一諦を學んで佛の法身を知り得たものが眞の佛弟子と稱せらるべきものである。此の事を説かれたのが即ち「一諦章」の内容である。○說常住安穩一依 眞の聖諦に依つて信仰を定め得たものは常住安穩を得るのである。これを一依といふので、此の一依が種々の信仰を統一すべきである。此の事を説かれたのが即ち「一依章」の内容である。○說顛倒眞實 凡夫の心は顛倒して居る。大乘を學んで怠らぬ者のみが眞實を覺り得るのである。併し顛倒の凡夫でも大乘を學んで眞實を覺ることは必ず出来るので、此の事を説かれたのが「顛倒眞實章」の内容である。○說自性清淨心隱覆 自性清淨心とは即ち佛性のことである。凡夫でも佛性は具有して居るのであるが、煩惱の爲に隱覆せられて居る爲に凡夫なのである。唯だ佛は明かに之を知見して之が爲に其の佛性を開發

すべき道を説き示されたのである。此の事を説かれたのが即ち「自性清淨章」の内容である。○説如来眞子 大乘を學んで佛の御心を明かに知り得た者は自ら修行を勵むと共に、正しき信仰を得ぬものに對して折伏を加へ、之を導いて正しき信仰に入らしむるために特に力を盡さなければならぬ。斯くてこそ佛の眞子と稱せらるべきものである。此の事を説かれたのが「如来眞子章」の内容である。以上で此の勝鬘經の内容の要目は終るのである。○説勝鬘夫人師子吼 此の經全體が即ち勝鬘夫人の師子吼である。元來師子吼とは佛の説法のことであるが、勝鬘夫人の説いた所は能く佛意に一致せるものであるから、之を師子吼と稱して佛の説法に準するわけである。○斷一切疑決定義入一乘道 是れも此の經の全體に就ていふのである。此の經によつて一切の疑惑を除き得るが故に「斷一切疑」といひ、大乘の教の眞義が明かに知り得らるゝが故に「決定義」といひ、佛と成るべき道が明かに示されてあるから「入一乘道」といふのである。○法の住には 佛の正法が永く世に住するためには、佛の御心を明かに知り得たものが自ら其の信心を勵み其の修行を勵むと共に、佛の正法を世に説き弘むることに力を盡すことを要するのである。○廣く分別して 法を聽く人の機根は種々様々である。其の性質其の境遇もそれ／＼に異ふのである。されば其の人に適するやうに説き分けることが最も肝要なのである。

○歡喜奉行 歡喜の心を以て、佛の説かれた所を實行するのである。吾等が凡夫の境界を離れて佛の境界に近づき得るのは全く歡喜奉行の力に依るのである。

此處に擧げられたる十四の名目は唯だ此の一經の内容を悉して居るのみではない。眞に正しい信仰を勵まうとする者の特に意を用ゐなければならぬ諸點を能く明かに示されたものと申すべきである。先づ第一は佛に歸依し佛を讚嘆する心を起すことである。さて佛が難行苦行を積んで覺り得られた所を少しも惜む所なく吾等のために説き示されたる大慈悲に感激するものは、必ず此の教へを實行しやうといふ決心をすると共に、斯る貴い教へを普く世に弘めて、一切の人をして悉く此の貴い教へに歸依せしめやうといふ決心を固むるに至るべきである。即ち勝鬘夫人の説かれた十大受、三大誓願といふものは斯る決心よりして進み出たものに外ならぬのである。此の如き決心をすると共に、更に深く佛教の内容に就て究めなければならぬといふ心が起るのである。華嚴經には菩薩が一切衆生を教化することに全力を注いで、佛の化導を贊くるに就て細々と説いてあるのであるが、而も

菩薩は衆行を修めて懈ることなく、勇猛の勢力能く制伏するものなくして能く一切の智門を満足す。

といつてある。他を化することに力を用ゐるほど、自ら養ふことの必要を痛感するやうになるのは當然の事である。

此の經に於て説かれた諸問題、即ち佛の説法の歸着點は何れに在るかといふこと。佛が斯る貴い教へを説くべき力を具へられたのは何が其の原因であるかといふこと。吾等が斯る貴い教へを聽いて之を解し之を信することの出来るのは何故であるかといふこと。又吾等と同じ地上に住みながら佛の教へなどに全く無關心な者の多いのは何故であるかといふこと。此の如き者の夥しい世の中に立つて、佛の正法を弘むる者の特に意を用ゆべき點は何であるかといふこと。此等は何れも今の吾等に取りつて最も大切な問題であつてそれが一々明かに此の經の中に説き示されてあるわけである。而もそれが妙齡の一婦人たる勝鬘によつて説かれたことに、特に深い意義があるやうである。

四河海かみに入りて復た河かの名なし。四姓沙門しやうしやもんとなつて皆釋種みなしやくしゆを稱しょうす。

と阿含經にあるのは、佛弟子となつた以上は身分や階級の差を一切離れなければならぬといふことであるが、此の精神は佛教全體に一貫したるものである。大乘を學んで菩薩行を勵み、成佛を期する上に於ては老若男女の差別などのあらう筈はない。併し其の差別に囚はれるのが普

通の人情である。勝鬘經は斯る淺はかなる考へを打破るために特に大なる力となるものといふべきである。

聖徳太子が此の經を維摩經及び法華經と共に朝廷の百官の爲に講せられ、又此等三經の義疏を作つて後世に遺されたのは前から度々申したことであるが、太子が多くの寺を建立せられ、其等の寺の附屬として種々の社會事業を經營せしめられたのは、此の勝鬘夫人の説いた十大受に基くものであると傳はつて居る。此の事は特に注意しなければならぬことである。實生活のみに囚はれて居るものは所謂俗人である。佛教は或る意味に於ては、實生活を超越することを教ゆるものといふことも出来るのである。併し全く實生活を離れた信仰といふものは空虚なものである。實生活を超越するといふのは實生活に囚はれぬことである。實生活に囚はれぬ心を以て所謂俗人と共に住み、世間多數の人を救護するために力を用ゐることが眞の菩薩行である。勝鬘經は眞の菩薩行を教ゆるものであるが、聖徳太子が直ちに之を御實行になつたのは返す返すも貴いことである。自分は力を揣らずして、太子の講せられたる三經の講述を發願して、やうやく維摩經と勝鬘經とを終つた。固より淺學非才の身であつて、佛の御精神を十分に發揮し得なかつたのは勿論或は之を曲解し、多く私意を雜へて説いた爲に、多くの罪を作つた

であらうと思ふと、まことに慚愧の至である。さりながら之が講述に力を用ゐたのが自分の修行になつたことは非常なものであつて、自分はいつても感謝の念を以て筆を執つて居たのである。

此よりは更に進んで法華經の講述に入るわけであるが、法華經が三經の中に於て最も深いものであることは吾等の多言を要せぬ所である。佛は自ら此の法華經の難信難解であることを言を極めて説かれた。斯ういふことは維摩經にも勝鬘經にもない。之を以て見ても法華經が最も深いものであることは疑はれぬ。自分には恐らく法華經を講すべき力はないであらう。唯だ是れも自身の修行の爲であると思つて、豫定通り法華經の講述に入るのである。江湖諸君子の示教と鞭撻との力が加はつて、法華經の講述を無事に終ることが出来たならば、此に上超す悦びは無いであらう。

勝鬘經講義 終

昭和十三年三月一日印刷
昭和十三年三月五日發行

定價金參圓五拾錄

著者

東京市澁谷區幡ヶ谷笹塚町一一九九

小 林 一 郎

發行所

東京市四谷區内藤町一番地

大 乘 佛 教 會

印刷者

東京市芝區愛宕町二丁目十四番地

渡 邊 丑 之 助

印刷所

東京市芝區愛宕町二丁目十四番地

常磐印刷株式會社

發賣所

東京市四谷區内藤町一
振替口座東京六二二番

晉文館

電話四谷七七七五番

著 生 先 郎 一 林 小

各宗佛教綱要	維摩經講義	聖德太子の憲法と 大乘佛教	續佛教綱要	佛教綱要
近刊	菊判布裝 千三百頁	菊判美本 一〇〇頁	菊判布裝 八〇〇頁	菊判布裝 八〇〇頁
	定價 五圓五十錢 送料 二十二錢	定價 五十錢 送料 三錢	定價 三圓五十錢 送料 二十二錢	定價 三圓五十錢 送料 二十二錢

萃 拔 目 書 行 發 館 文 晋

746
22

